

田原本町文化財 調査年報 23

2013年度



田原本町教育委員会

田原本町文化財 調査年報 2013年度 23



田原本町教育委員会

例　　言

1. 本書は、田原本町教育委員会が2013年度（平成25年度）に実施した文化財事業の概要をまとめたものである。
2. 埋蔵文化財の発掘調査については、土地所有者・施工業者ならびに近隣の皆様にご協力とご理解を賜った。記して感謝します。
3. 本書は、Iを清水琢哉、IIを藤田三郎・木村麻衣子・西岡成晃、IIIを木村・西岡、IV. 1・2を藤田が執筆した。I. 2の遺物は清水・奥本英里、木下正樹・野尻昌宏・江浦至希子・児玉駿介が、IV. 1・2の遺物は藤田・江浦が実測し、木下・西岡・江浦がトレースをおこなった。本書は西岡が編集した。

目 次

I. 田原本町の埋蔵文化財

1. 町内における開発と遺跡の異動	1
(1) 町内における開発と発掘調査	1
(2) 遺跡の異動	2
2. 埋蔵文化財の調査	
(1) 発掘調査の概要	4
1. 唐古・鍵遺跡 第114次調査	6
2. 宮古北遺跡 第17次調査	10
3. 十六面・薬王寺遺跡 第31次調査	16
4. 十六面・薬王寺遺跡 第32次調査	37
5. 十六面・薬王寺遺跡 第33・34次調査	41
6. 小阪里中遺跡 第5次調査	48
7. 金剛寺遺跡 第6次調査	51
8. 金剛寺遺跡 第7次調査	54
9. 佐味遺跡 第2次調査	58
10. 保津・阪手道 第2次調査	68
11. 筋違道 第3次調査	72
12. 寺内町遺跡 第14・15次調査	76
13. 十六面・薬王寺遺跡 試掘調査 (S-201301~201303)	87
(2) 工事立会の概要	96
1. 唐古・鍵遺跡 工事立会	99

II. 資料の整理と活用・普及

1. 文化財資料の整理・保管	
(1) 埋蔵文化財の整理・保管	105
(2) 木製品の樹種同定と保存処理	108
(3) 図面・写真的保管と資料撮影、写真的デジタル化	111
(4) 図書の受領	112
(5) 資料の寄贈	112
2. 遺跡・文化財の保護・啓発	
(1) 発掘調査地の現地説明会	113
(2) 史跡の公有化	114
3. 講座	115

4. 学校教育等への支援	
(1) 小学校出前授業・教材貸出	116
(2) 中学校職場体験学習	117
(3) 大学の学外授業	117
(4) 講師の派遣	118
5. 刊行物一覧	118
6. 資料の活用	
(1) 資料の貸出	119
(2) 写真掲載・撮影	120
(3) 資料調査	123
7. ボランティア組織	
(1) ボランティア組織の概要	123
III. 唐古・鍵考古学ミュージアム	
1. 常設展示	
(1) 常設展示資料の追加	127
(2) 田原本ギャラリー 今回の逸品	127
2. 企画展・ミニ展示	
(1) 春季企画展「たわらもと2013発掘速報展－奈良盆地の開拓史－」	130
(2) 秋季企画展「弥生遺産～唐古・鍵遺跡の土器～」	133
(3) 特別展示「田原本町内小学校の総合的な学習展示会」	136
3. 入館者・ホームページ	
(1) 入館者数	137
(2) 節電対策夏季無料入館	139
(3) 入館者アンケート	140
(4) 視察・研修・学校等からの来館	140
(5) ホームページ	141
4. ボランティア	
(1) ボランティアガイドの実績	142
(2) 企画展受付ボランティア	142
IV. 資料の報告	
1. 唐古・鍵遺跡出土の須玖式土器 (藤田三郎)	145
2. 佐味遺跡採集の遺物 (藤田三郎)	157



I. 田原本町の埋蔵文化財

1. 町内における開発と遺跡の異動

(1) 町内における開発と発掘調査

本町における2013年度（平成25年度）の民間開発行為等による埋蔵文化財発掘届（第93条）は53件、地方公共団体等による通知（第94条）は22件で、計75件を数える。

本年度の発掘調査は17件である。内訳は、個人住宅等の建築3件、史跡整備に伴う事前調査1件、公共事業4件、民間開発9件である。昨年度と比較して調査面積・出土遺物数が大幅に増加しているが、これは十六面・薬王寺遺跡における大規模店舗建築に伴う発掘調査を実施したためである。

第1表 田原本町における2013年度の発掘届・通知件数一覧

発掘届 93条	発掘通知 94条		発掘調査	工事立会	慎重工事	先行工事
53	22	通知内容	11	46	15	3
		実施分	町 17 県 0	43	-	-

第2表 田原本町の発掘届・通知と発掘調査件数の推移

	'06	'07	'08	'09	'10	'11	'12	'13
発掘届（93条）	43	53	57	49	54	58	52	53
発掘通知（94条）	17	18	11	18	18	35	13	22
計	60	71	68	67	72	93	65	75
発掘件数	町	12	18	11	13	7	10	14
	県	4	2	1	1	1	0	0
町内総調査件数	16	20	12	14	8	10	14	17

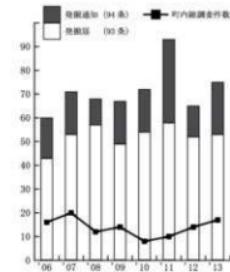
第3表 町教育委員会が実施した発掘調査の原因別推移

	'06	'07	'08	'09	'10	'11	'12	'13
範囲確認	0	0	0	0	0	0	0	0
個人住宅	4	5	6	4	2	1	4	3
公共事業	6	6	3	4	3	5	6	5
民間開発	分譲	2	4	2	2	1	2	1
その他	0	3	0	3	1	2	2	8
計	12	18	11	13	7	10	14	17

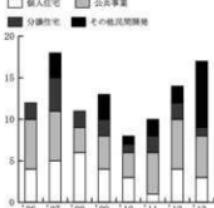
第4表 町教育委員会による調査の面積及び出土遺物数の推移

	'06	'07	'08	'09	'10	'11	'12	'13
総調査面積(m ²)	986	1,400	341	1,117	457	1,152	2,530	5,555
出土遺物数(箱)	95	146	103	118	74	140	134	370

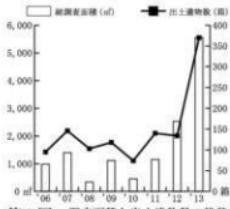
第1図 発掘届・通知と発掘調査件数の推移



第2図 発掘調査原因の推移



第3図 調査面積と出土遺物数の推移



(2) 遺跡の異動

2013年度におこなった遺跡の異動は3件である。大規模店舗の開発が十六面・薬王寺遺跡北西端で計画され、これに伴う調査をおこなった結果、遺跡範囲の変更が必要となった。これまでの遺跡範囲よりも北西側に遺構が拡がることが判明したほか、これまで知られていなかった弥生時代前期の集落遺構を遺跡北西隣接地で検出した。一方、平成25年度に実施した十六面・薬王寺遺跡西端での試掘調査では、いずれも顕著な遺構を確認できなかったことから、遺跡範囲を一部縮小することが適当と判断された。

宮古北遺跡 十六面・薬王寺遺跡北西端の古墳時代前期集落は、宮古北遺跡で検出した同時期の集落遺構と密接な関連がある可能性が高い。従って、宮古北遺跡を十六面・薬王寺遺跡北西端に接するまで拡張することが適当と考えられた。

富本遺跡 十六面・薬王寺遺跡の北西隣接地で、これまで知られていなかった弥生時代前期の遺構を確認した。集落範囲は北西に隣接する富本遺跡にも及ぶことが想定される。従って、富本遺跡の南東部を南に拡張することとなった。

十六面・薬王寺遺跡 遺跡北西端の調査で、濃密な弥生時代末～古墳時代前期の遺構分布を確認した。このため、遺跡範囲を北西に拡張することとなった。一方、遺跡西端で実施した3件の試掘調査の結果、西竹田付近の本遺跡には顕著な遺構が拡がらないことを確認した。従って、北西端を拡張する一方で西端の一部は遺跡範囲を縮小することとなった。

第5表 遺跡の異動一覧表

	遺跡番号	遺跡名	実施内容	異動原因	遺跡概要	報告	通知	施行日
1	IIA-0072	宮古北遺跡	範囲の変更	十六面・薬王寺遺跡 第31次調査 十六面・薬王寺遺跡 試掘調査(5-201201)	弥生時代後期の方形圓 底盤群・古墳時代前期の 集落跡等を確認	26.3.12 田代文 第066号	26.5.28 教文第7601号	26.6.2
2	IIC-0028	富本遺跡	範囲・内容 の変更	富本遺跡 第2次調査 十六面・薬王寺遺跡 試掘調査(5-201201)	弥生時代前期の集落跡と 古墳大溝を確認	26.3.12 田代文 第067号	26.5.28 教文第7602号	26.6.2
3	IIC-0032	十六面・薬王寺遺跡	範囲の変更	十六面・薬王寺遺跡 第31次調査 十六面・薬王寺遺跡 試掘調査 (5-201201) (5-201301) (5-201302) (5-201303)	弥生時代後期の方形圓 底盤群・古墳時代前期の 集落跡等を確認	26.3.12 田代文 第068号	26.5.28 教文第7603号	26.6.2



第4図 2013年 遺跡の異動位置図 ($S = 1/5,000$)

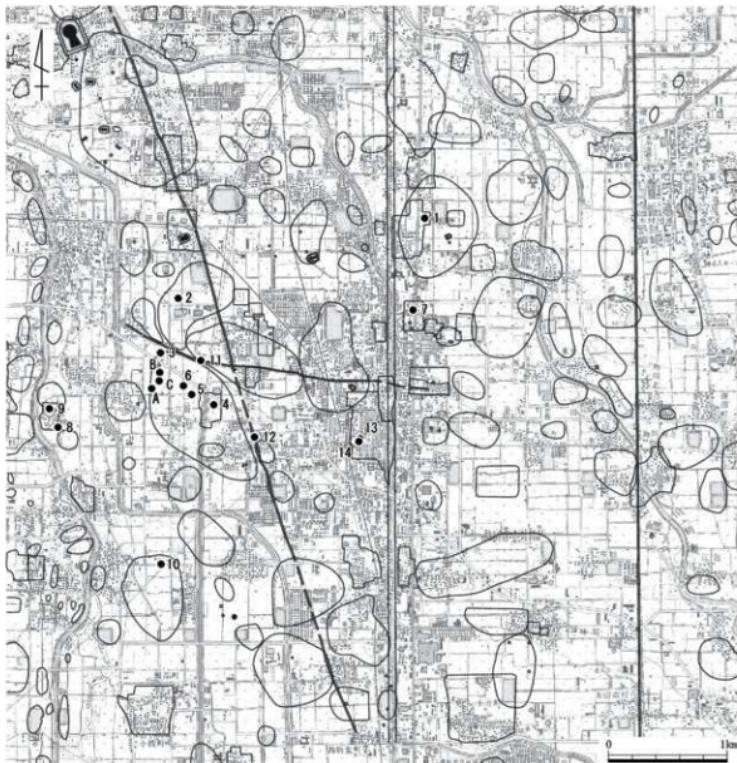
2. 埋蔵文化財の調査

(1) 発掘調査の概要

本年度は14件の発掘調査、3件の試掘調査を実施した。弥生時代～古墳時代では、十六面・薬王寺遺跡、佐味遺跡で成果が得られた。十六面・薬王寺遺跡北西部の第31次調査では弥生時代前期の集落・古墳時代前期初頭の方形周溝墓・古墳時代前期の集落・古墳時代後期の水田に伴うとみられる大溝などを検出した。佐味遺跡では、弥生時代中期中頃の方形周溝墓を検出した。

中世では、十六面・薬王寺遺跡・金剛寺遺跡・佐味遺跡で成果が得られた。佐味遺跡では、中世の屋敷地を囲むとみられる大溝を検出し、多数の羽釜が出土した。

近世では、寺内町遺跡で津島神社本殿とその周囲について調査をおこなった。



第5図 田原本町の遺跡と調査地点 (S = 1/40,000)

第6表 2013年度 発掘調査一覧表

遺跡名	次数	調査地		調査者	調査	期間	面積	担当	備考
		横	出						
1. 唐吉・鍵	第114次	田原本町大字唐吉小字ソノ田121-1	北側水路	田原本町長	史跡公園整備のための 歴史調査	2013.10.24 ~11.11	180m ²	清水・野尻 美濃・笠原 総合政策課	遺物量(箱)
		現代：水路1条、瓦隠1							
2. 宮古北	第17次	田原本町大字黒川小字落田124-1各		奈良コープ	倉庫兼事務所の築作	2014. 2. 26 ~3. 4	200m ²	清水・野尻 宮古北	受託事業
		古墳時代：溝3条、落ち込み1条 古代：溝1条							
3. 十六面・ 薬王寺	第31次	田原本町大字十六面小字下宇田97-1各		㈱コメリ	六波羅古跡建築	2013. 4. 17 ~ 9. 19	4,700m ²	清水 美濃・日置 田原本 美濃	受託事業
		古生・時代後期：溝1条、柱1基 古墳時代後期：方形容埴輪5基、穴住埴輪1個、瓦隠1条、河跡1条、溝5条 古墳時代前・中期：柱穴2基、溝8条、河跡1条 古墳時代後・後期：柱3条、溝1条、土坑1基、落ち込み2条 平安・時代：門273-1条、建物2種、地盤遺構1基 中・近世：土坑1基、瓦隠小遺物							
4. 十六面・ 薬王寺	第32次	田原本町大字保津1字平ノ段270-1, 271-1		個人	宅地造成・貸貸住宅	2013. 5. 7 ~ 5. 15	72m ²	奥谷	受託事業
		中世後期：大溝2条						上世跡、瓦隠、瓦質土器、 中世陶器、木製品等	
5. 十六面・ 薬王寺	第33次	田原本町大字十六面小字平段152各	北側道路	田原本町長	下水道工事	2013. 7. 2 ~ 7. 3	6 m ²	奥谷	下水道調
		中世：施設小遺物						上世跡、瓦隠、瓦質等	
6. 十六面・ 薬王寺	第34次	田原本町大字十六面小字下宇田89	東側道路外	田原本町長	下水道工事	2013. 11. 11 ~ 11. 13	9 m ²	清水・野尻	下水道調
		古墳時代後期：柱1根 古代：溝1条、土坑1基 中世：施設小遺物						上世跡、瓦隠、近世陶磁器等	
7. 小阪里中	第5次	田原本町大字小阪中字守田内225-1		個人	個人住宅の建築	2013. 11. 26	7 m ²	清水・野尻	閑塚補助事業
		中世：落ち込み1条						上世跡、近世陶磁器等	
8. 金剛寺	第6次	田原本町大字金剛寺小字ハサダ201-1		ソフトバンク モバイル㈱	携帯無線基地局	2013. 7. 31 ~ 8. 5	48m ²	奥谷	受託事業
		中・近世：墓塚・清酒						上世跡、瓦隠、瓦質土器、 近世陶磁器等	
9. 金剛寺	第7次	田原本町大字金剛寺小字アメ木210-1各		個人	個人住宅の建築	2014. 12. 2 ~ 12. 4	4 m ²	清水・野尻	閑塚補助事業
		中世：土坑遺構1基 近世：溝1条、土坑1基 近代：土坑1基						上世跡、瓦隠、瓦質土器、 近世陶磁器、瓦等	
10. 佐麻	第2次	田原本町大字油田小字アメ木218-1各	南側道路	田原本町長	道路改良工事	2014. 1. 15 ~ 2. 3	130m ²	清水・野尻 建設課	
		新牛・時代：溝1条、方形容埴輪1条、土坑1基 中世：土坑1条、柱1条、小溝3条 近世：大溝1条 江戸時代：土坑1基						新牛・土器、瓦質土器、 埴輪・廻遊等	
11. 保津・ 坂手道	第2次	田原本町大字古南古字坂手4各	南側道路	田原本町長	下水道工事	2013. 6. 24 ~ 6. 27	8 m ²	奥谷	下水道調
		中世：土坑1条、柱1条、小溝3条 近世：大溝1条						上世跡、廻遊路、瓦隠、 瓦質土器等	
12. 篠蓮道	第3次	田原本町大字薬王寺小字穴62-15		個人	個人住宅の建築	2013. 7. 4 ~ 7. 5	6 m ²	奥谷	閑塚補助事業
		古代？：溝1条 中世：施設小遺物						上世跡、瓦隠等	
13. 谷内町	第4次	田原本町大字小堀459-1		宗教法人	神社本殿改築	2014. 12. 11 ~ 12. 12	2 m ²	清水・野尻	受託事業
		近世：本殿基壇1基						上世跡、瓦質土器、近世陶磁器、 瓦等	
14. 谷内町	第15次	田原本町大字小堀459-1各		宗教法人	神社社正社擴張工事	2014. 2. 20 ~ 3. 4	64m ²	清水・野尻	受託事業
		中世：大溝2条、土坑5基、ピット4基 近世：土坑1基						上世跡、瓦質土器、近世陶磁器、 瓦等	33箱

第7表 2013年度 試掘調査一覧表

遺跡名	調査地		調査者	調査	期間	面積	担当	備考
	横	出						
A 1. 六面・薬王寺 道跡 5-201301	田原本町大字西竹田小字川原田2-1	北見地壁	範囲確認調査	2013. 7. 29 ~ 7. 26	40m ²	奥谷・美濃	閑塚補助事業	
	中・近世：施設小遺物					上世跡、廻遊路、瓦隠等		
B 1. 六面・薬王寺 道跡 5-201302	田原本町大字西竹田小字川原田4各	個人	範囲確認調査	2013. 1. 9 ~ 12. 2	40m ²	清水・野尻	閑塚補助事業	
	中・近世：施設小遺物					近世陶磁器等		
C 1. 六面・薬王寺 道跡 5-201303	田原本町大字西竹田小字川原田4, 5, 6	美農国	範囲確認調査	2014. 2. 5	36m ²	清水・野尻	閑塚補助事業	
	中・近世：土坑1基、施設小遺物					上世跡、瓦質		

1. 唐古・鍵遺跡 第114次調査

1. 遺跡・既調査の概要

唐古・鍵遺跡は、奈良盆地の中央、標高47m前後の沖積地に立地する。弥生時代を代表する大規模な集落遺跡であり、その重要性から平成11年に史跡指定をうけている。遺跡では、南部で青銅器鑄造に関わる遺構・遺物を確認しているほか、遺跡西部および中央西付近で弥生時代中期の大型建物を確認している。特に、遺跡中央西付近の大型建物は弥生時代中期中頃に属するものであり、直径80cmを超える大型の柱が遺存していた。

今回、史跡整備に伴う水路改修工事に先立って発掘調査を実施することとなった。先述の大型建物の直上に位置するため、地下遺構への影響がないよう工事を実施する必要があった。通常では重機を用いておこなう表土掘削の段階から人力で掘り下げ、地下遺構への影響を最小限にとどめるよう努めた。

2. 調査の成果

(1) 層序

調査地の現状は水路である。東側および西側は現場打ちの古いコンクリート水路で、中央東の第93次調査部分のみ10年前の発掘調査後に設置された既製品によるU字溝となっている。調査前に重機で水路を解体・撤去し、工事掘り肩に従って人力による掘り下げをおこなった。なお、工事による掘り下げは既設水路の栗石層上面までにとどまり、第93次調査部分でも10年前の床付けコンクリート上面までの掘削にとどまる。ただし、掘り肩が当時のものより一廻り広くなるため、一部中世遺物包含層等が遺存する部分に影響する掘削となった。

調査区の北側は過去の造成により約1m高くなっている。ここでは、調査区中央付近の南壁層序を示す。

I：暗茶灰色粘質土〔検出標高47.6m、以下数値のみ記す〕、II：淡茶灰色土〔47.5m〕、II-b：淡褐色砂質土〔47.4m〕、III：暗灰褐色土〔47.3m〕、IV：暗褐色粘質土〔47.1m〕

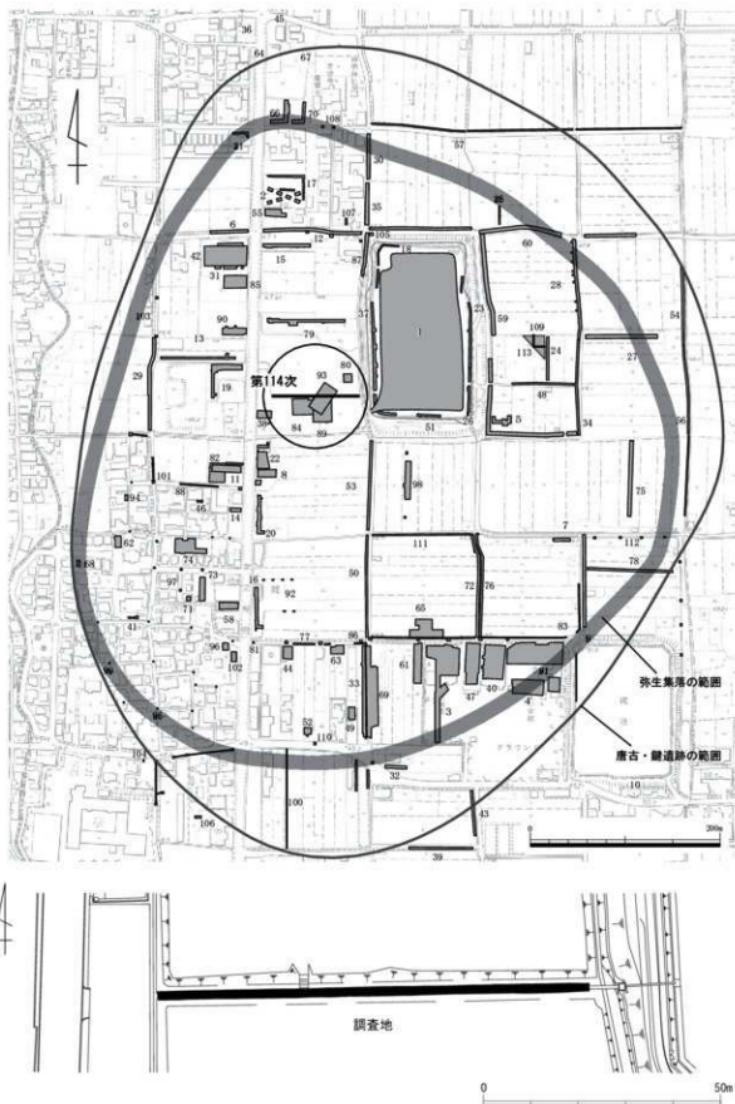
第I・II層は現代水田層、第III層が近世遺物包含層、第IV層が中世遺物包含層である。第IV層上面が中世遺構検出面となる。調査区北端および南端でそれぞれ0.2mずつ中世遺物包含層が残っているが、中央部分は過去の水路工事により深さ0.2m前後掘削されていた。掘削部分は拳大の砾で充填され、その上にコンクリートベースが打たれていた。

(2) 遺構と遺物

今回の調査は、基本的に遺構検出に至らない高さまでの掘削であるため、断片的に中世素掘小溝の上面を確認した程度である。検出した遺構というよりは現代水路工事の痕跡を記録した形である。

弥生時代

擾乱1 第93次調査部分に該当する。調査後の埋め戻し土からも多数の土器が出土した。特に、弥生時代前期に遡る破片も多く含まれており、調査地が弥生時代前期前半から安定した居住区となっていたことを示唆するものとみられる。



第6図 調査地位置図（上：S = 1/5,000、下：S = 1/1,000）

現代

S D-01 調査区中央で検出した現代水路である。内寸で幅0.6mのコンクリート製水路であるが、ベース部分で幅1.2m前後の掘削がおこなわれていた。昭和40～50年代の工事とみられる。弥生時代遺物包含層まで掘削が及んでいたとみられ、埋め戻し土中から弥生時代中～後期および古墳時代の土器が多数出土した。また、形象埴輪片や中世輸入陶磁器片も出土している。

3. まとめ

今回の調査は、遺跡の内容を解明することを目的としたものではないため、顕著な成果は得られていない。ただし、丁寧に人力で掘削をおこなったことで工事による遺構への影響を最低限に抑えることができたこと、多数の土器・石器類を採取することができたことは一応の成果といえよう。

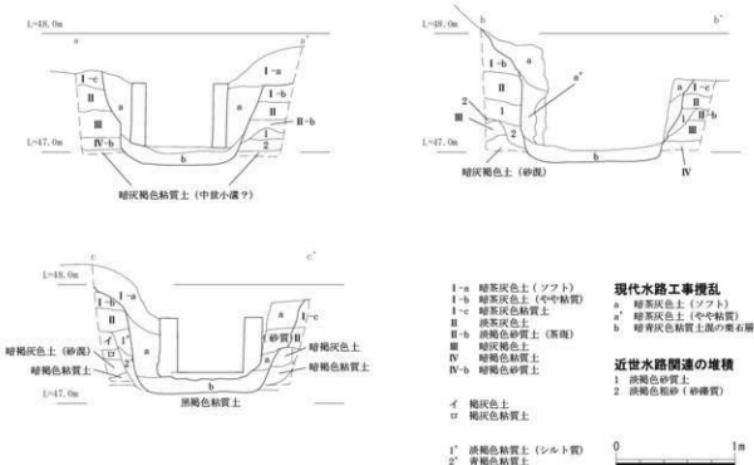
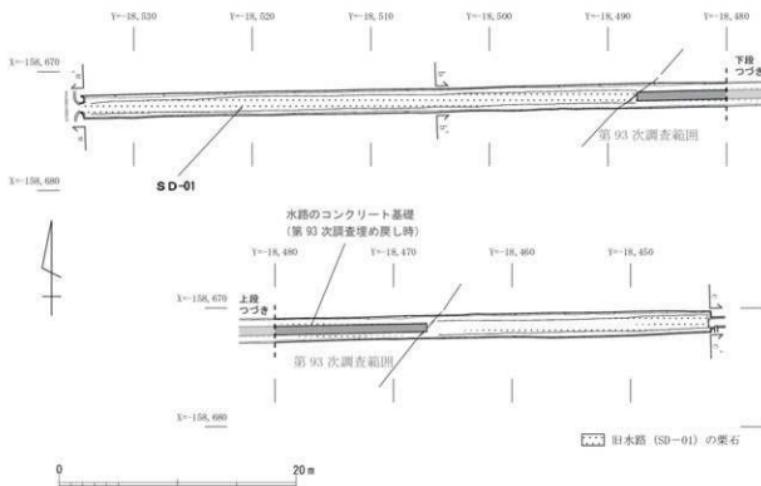
今回の調査では、形象埴輪を含む埴輪数点が出土した。南側隣接地の第84次調査地中央で検出した方墳（唐古・鍵8号墳）には顕著な埴輪がみられなかった一方で韓式系土器等が出土している。また、第84次調査地西側の方墳（唐古・鍵10号墳）からは馬や盾・鶴の形象埴輪が出土している。第84次調査地北端で検出した方墳（唐古・鍵9号墳）は今回の調査区となった水路に分断されないとみられる。これらの状況から、今回出土した円筒・形象埴輪は唐古・鍵9号墳または10号墳に関わる遺物である可能性がある。



1. 北壁西端層序（南東から）



2. 完掘状況（西から）

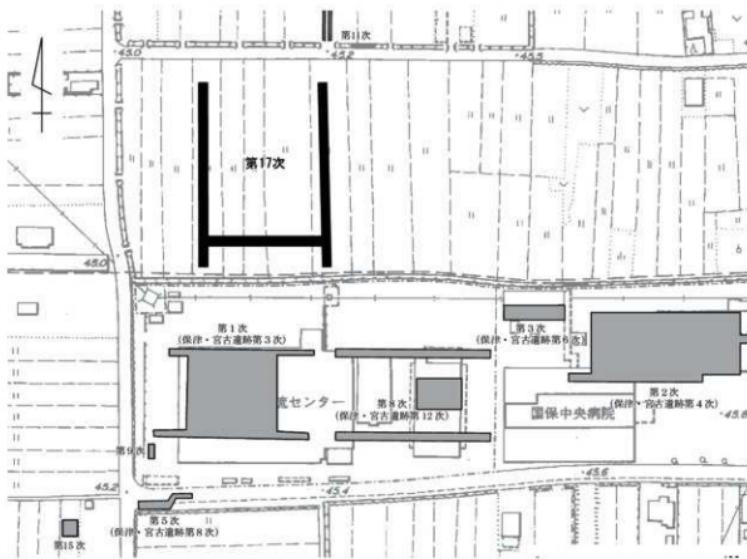


第7図 腹済区平面図および断面図（上：S=1/400、下：S=1/40）

2. 宮古北遺跡 第17次調査

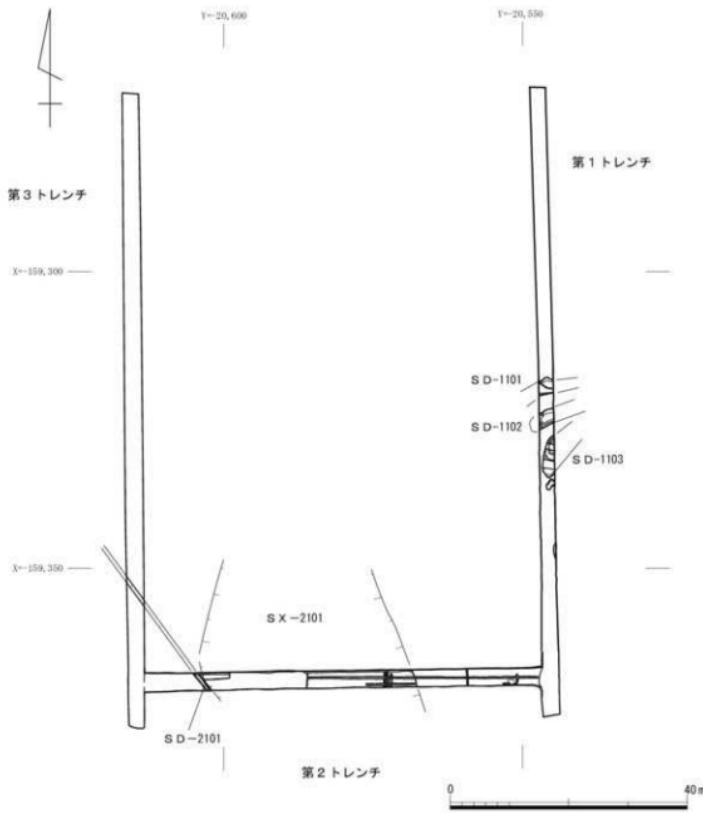
1. 遺跡・既調査の概要

宮古北遺跡は、奈良盆地の中央、標高47m前後の沖積地に立地する。弥生時代～古墳時代前期の集落跡、古代の建物群等からなる複合遺跡である。当初は保津・宮古遺跡の一部として認識されていましたが、調査の進展とともに保津・宮古遺跡との間に遺跡の空白部分が認識され、さらに北側の黒田池周辺の遺物散布地東側でも古墳時代前期の遺構が確認されたため（保津・宮古遺跡第11次調査）、保津・宮古遺跡第3・4次調査区とその北側を保津・宮古遺跡とは別の集落遺跡「宮古北遺跡」として取り扱うこととなった。宮古北遺跡では、遺跡西部で布留式古段階の方形区画を伴う集落、遺跡東部で布留式新段階の集落をそれぞれ検出しており、地点により集落の営まれた期間が異なるとみられる。また、古代道路「筋違道」に接する地点で検出された飛鳥時代の建物群は倭屯倉に関わる遺構の可能性も考えられている。さらに、宮古北遺跡東端では、宮古前遺跡・宮古石橋遺跡として本遺跡から独立して認識されることになった中世の屋敷跡がある。なお、宮古北遺跡東部の第10次調査、遺跡中央北の第11・16次調査では顕著な遺構がみられず、各時期の遺構集中区との間には遺構密度の低い地区が点在している可能性が考えられる。



第8図 調査位置図 (S = 1/2,500)

今回の調査地は、遺跡中央にあたるもの、布留式古段階の集落域からやや北東に外れた場所と想定される。設計段階の事前協議で掘削を浅く抑えて遺構面まで及ばない工法となつたため工事立会での対応を予定していたが、施工時に立会をおこなつたところ大幅に深い掘削をおこなつていたため、急速発掘調査で対応することとなつた。このような経緯から十分な調査体制を整えることができず、重機および作業員等は施工業者が直接用意して短期間で調査を実施することとなつた。調査には実質4日を要した。



第9図 調査区の設定と主な遺構 (S = 1/800)

2. 調査の成果

(1) 層序

調査地の現状は水田である。調査対象となった掘削工事は遊水池設置に伴うもので、敷地東端と西端の延長各110m、敷地南端の延長65mの総延長285m、幅3mの開削がおこなわれた。敷地東端の南北開削部分を第1トレンチ、敷地西端の南北開削部分を第3トレンチ、敷地南端の開削部分を第2トレンチとし、第1トレンチの遺構検出部分と第2トレンチについて発掘調査をおこなった。ここでは第1トレンチ中央付近の層序を示す。

I : 暗茶灰色土〔検出標高46.3m、以下数値のみ記す〕、II : 褐色土（シルト質）〔46.15m〕、III : 灰褐色粘質土〔46.05m〕、IV : 黄灰色シルト〔45.85m〕、V : 黄灰色粘土（シルト質）〔45.5m〕、VI : 青灰色シルト〔45.2m〕

第I～III層が現代耕土とその床土、中世遺物包含層である。第IV層がベースで、その上面が各時期の遺構検出面となる。ただし、第1・3トレンチは先行して工事掘削深度までの掘削がおこなわれたため、第V層上面での遺構検出となった。第2トレンチは発掘調査の体制で掘削をおこない、第IV層上面で各時期の遺構を検出した。

(2) 遺構と遺物

a. 第1トレンチ

弥生時代後期末～古墳時代前期

SD-1101 第1トレンチ中央で検出した東西方向の大溝である。幅2.5m、深さ0.9mを測る。下層から庄内期とみられる甕などが少量出土した。第12回は下層から出土した甕で、外面ハケ、内面ヘラケズリでやや器壁が厚い。口径18cmを測る。庄内期の遺物と考えられる。

SD-1102 SD-1101の南側2.5mで検出した西南西～東北東方向の大溝である。幅約2.5m、深さ約0.5mを測る。遺物は少量で詳細な時期を決定することは困難であるが、弥生時代後期末～古墳時代前期頃の遺構とみられる。

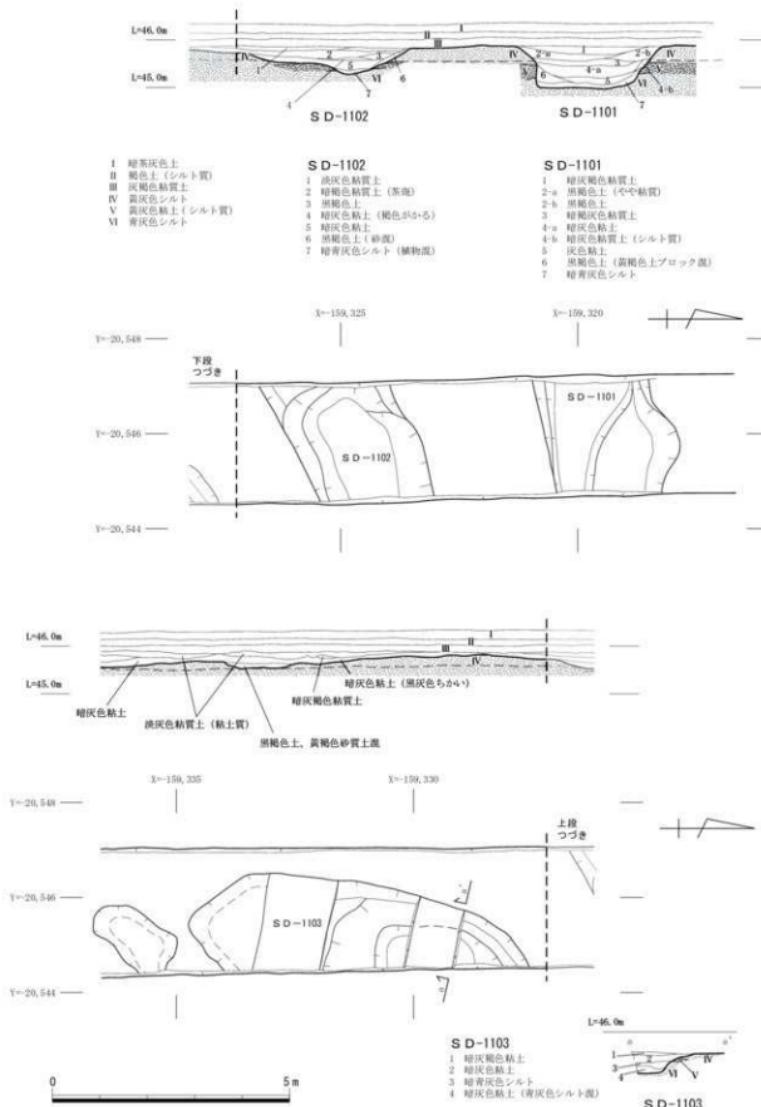
SD-1103 SD-1102の南側に隣接して検出した、北北東～南南西方向の大溝である。調査区東端が最も深く、本来の検出面からの深さ0.8mを測るが、南南西に向かって徐々に浅くなり、西壁付近では深さ0.4m程度となる。推定幅2.5m。遺物は少量で、時期は明らかでない。

b. 第2トレンチ

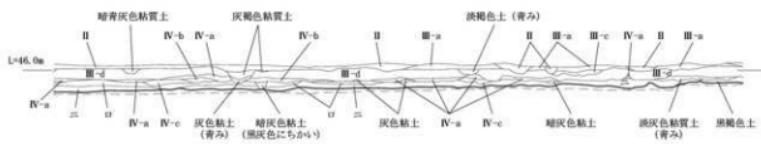
古代

SD-2101 第2トレンチ西側で検出した、北西～南東方向の溝である。幅0.7m、深さ0.2m。この溝は第3トレンチでもその延長部分を検出しており、直線的に調査区外へと続いているとみられる。堆積土は上層が粘質土、最下層が砂質土で、耕作に伴う水路のような性格が考えられる。なお、この溝の東肩にはば重複する形でSX-2101の西肩を検出している。

SX-2101 第2トレンチの大半を占める、幅35mにおよぶ大規模な落ち込み状の遺構である。深さ0.2mと規模に比較して極めて浅い。遺構の性格は明らかでないが、西肩がSD-2101に規制されている可能性があり、先述のSD-2101と関係の深い遺構と考えられる。



第10図 第1トレンチ遺構平面図および西壁断面図 (S = 1/100)

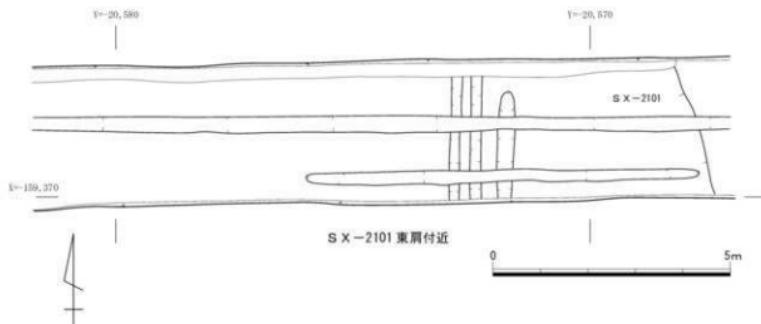


S X-2101

- イ 暗褐色土
- ロ 暗褐色粘質土
- ハ 黑灰色土 (粘土質)
- ニ 黑褐色粘質土

I 緑褐色土 (緑)

- IV-a 淡灰色粘質土
- IV-b 灰色粘土
- IV-c 暗褐色粘土
- IV-d 淡褐色粘土 (やや粘質、つよい)
- III-d 淡褐色粘土 (ソフト)
- III-d 淡褐色土



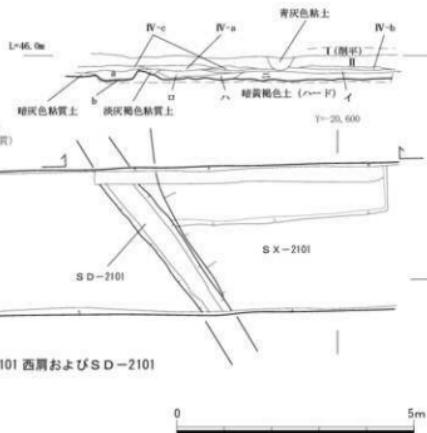
- I 緑褐色土 (緑)
- II 淡褐色粘質土
- IV-a 淡褐色粘質土 (青みがかる)
- IV-b 灰色粘土
- IV-c 暗褐色粘土
- V 暗褐色粘土 (やや柔らかい)

S D-2101

- a 灰色粘質土
- b 暗褐色砂質土

S X-2101

- イ 暗褐色土
- ロ 暗褐色粘質土
- ハ 黑灰土 (粘土質)
- ニ 黑褐色土



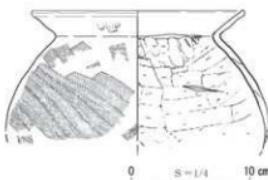
第11図 第2トレンチ遺構平面図および北壁断面図 (S = 1/100)

3.まとめ

今回の調査では、第1トレンチで庄内期前後の大溝を検出した。延長部分を他の調査区で確認していないことから方形周溝墓である可能性があるものの、3条の溝の主軸がそれぞれ異なるため、本調査の成果のみでは遺構の性格を断定することは難しい。

古代頃とみられる北西-南東方向の溝とこれに伴うとみられる幅の広い落ち込み状の遺構は、水田に関わるものである可能性が考えられる。ただし、遺物が僅少であるため、遺構の時期を特定することは困難である。

本調査では、南側隣接地で検出している弥生時代-古墳時代前期の集落関連遺構の抜がりは確認できず、集落域の外であった可能性が高い。ただし、墓域または水田域としての土地利用の痕跡が認められ、遺跡としての取り扱いは継続すべきであろう。



第12図 SD-1101出土土器



1. 第1トレンチ完掘状況（北東から）



2. 第1トレンチ西壁土層堆積状況（東から）



3. 第2トレンチ遺構検出状況（東から）



4. 第2トレンチ北壁土層堆積状況（南東から）

3. 十六面・薬王寺遺跡 第31次調査

1. 遺跡・既調査の概要

十六面・薬王寺遺跡は、奈良盆地の中央、標高46m前後の沖積地に立地する。これまでの調査で、弥生時代から近世にかけての複合遺跡であることが判明している。

弥生時代中期には、遺跡北部で集落関係の遺構が、遺跡南部で方形周溝墓が検出されている。北側に隣接する保津・宮古遺跡でも当該期の遺構が認められることから、付近一帯に散漫な集落が拡がっていた可能性がある。

弥生時代後期末～古墳時代前期には、遺跡南部で円形周溝墓・方形周溝墓が築造される。また、古墳時代前期～中期には遺跡北西部で堅穴住居数棟を含む集落遺構を検出している。この地区では、滑石を素材とする玉製作をおこなっていたことが判明している。

古墳時代中～後期には、遺跡南部でまとまった集落が形成される。鞍や椅子などの木製品が出土していることから、在地有力者の存在を想定することができそうである。

古墳時代後期末～飛鳥時代には、遺跡北半で埋没水田が確認されている。また、奈良時代には遺跡北端で古代の建物群を検出しており、北側に隣接する保津・宮古遺跡にまたがる形で官衙的性格の遺構が拡がっていたと考えられる。

平安時代末～鎌倉時代には、現在の十六面集落の南側（字十六面周辺）で墨書き土器や箸・扇子・墨書きのある方形曲物容器などが出土しており、遺跡の特殊性を窺い知ることができる。

室町時代には、遺跡中央北半に環濠をもつ屋敷地が形成される。周囲の小字名から、保津氏居館跡の推定地となっている。また、遺跡南側には創建が古代に遡るとされる薬王寺（廢寺）の推定地があり、古代に遡る寺院関連遺物の出土は見られないものの、周囲で室町時代を中心とする集落遺構を検出している。

今回、遺跡北西端およびその北西隣接地（東西200m、南北100m）での大型店舗の建設設計画があつた。これを受けて平成24年度に試掘調査を実施し、遺跡範囲外となる地区にも弥生時代前期～後期の遺構が分布することが判明した。また、遺構面が敷地西半で低くなることから、工事による掘削で大きな影響を受ける建物東半を本調査で、遺構面まで基本的には掘削が及ばない西半は工事立会で対応することとなった。その結果、弥生時代前期から中世にかけての各種遺構を検出した。

2. 調査の成果

（1）層序

調査地の現状は水田である。ここでは、調査区南西部の層序を示す。

I：暗青灰色粘質土〔検出標高45.5m、以下数値のみ記す〕、II：淡褐色土〔45.3m〕、III：灰褐色粘質土〔45.05m〕、IV：暗褐色土〔45.0m〕、V：黒褐色粘質土〔44.9m〕、VI：黒灰色粘質土〔44.7m〕、VII：黄褐色シルト〔44.5m〕

第IV層上面が古墳時代後期～平安時代時代および中世の遺構検出面となる。また、第IV層自体は古墳時代後期頃の水田耕土の可能性があり、この層中より古墳時代後期前後の土器が出土している。弥生時代後期～古墳時代前期の遺構は、基本的には第VII層上面が検出面となる。ただし、遺構の認



第13図 調査地位置図 (S = 1/2,500)

識が非常に困難であるため、結果的に第Ⅶ層上面で検出した遺構も多数ある。

(2) 遺構と遺物

調査後の遺物洗浄途中であり、遺構数も多いため、すべての遺構について記述することは困難である。ここでは、代表的な遺構について説明する。

弥生時代前期～中期前半

調査区北西部を中心に弥生時代前期の土坑・溝等を検出した。小規模・短期的な集落とみられる。中期前半には耕地に伴う可能性がある直線的大溝（S D-201）が掘削される。

S X-201 調査区北西部で検出した小規模な土坑である。平面は長軸0.4m前後の不定円形で、ほぼ完形の広口長頸壺1点（大和第II-1様式）が出土した。遺構の性格は不明である。

S D-201 調査区西端北側から調査区東端中央付近にかけて、直線的に掘削された大溝である。延長90mにわたって検出した。幅1.5～2.5m、深さ0.8m前後。上層からは弥生時代後期後半の土器が出土しているが、下層は遺物が希薄であり、少量出土した土器は弥生時代前期に属するものであった。方形周溝墓群や弥生時代後期の溝などに切られることから、弥生時代前期末以降、弥生時代後期以前の掘削と考えられるが、詳細な時期は不明。周囲の調査成果から、弥生時代中期頃の耕地開発に伴う遺構である可能性も考えられる。

S D-202 調査区北西部で検出した、北西～南東方向の小溝である。S D-101の溝底で検出したため、幅0.4m、深さ0.3m前後という規模になっているが、本来は深さ0.8m前後の遺構であった可能性がある。延長10m前後で両端が急速に浅くなる。弥生時代前期後半頃の土器が出土した。

S X-152 調査区中央付近で大型の壺胴部下半を伏せた状態で検出したため、壺棺墓の蓋である可能性を考慮して掘り下げをおこなったものの、出土したのはこの土器のみであった。土壙墓の蓋として壺胴部を用いた可能性もあるが、墓となるかどうかは不明である。胴部下半のみであるため詳細な時期は不明だが、弥生時代前期末～中期頃の遺構と考えられる。

S K-183 S X-152の西側に接して検出した、長方形の土坑である。南北3m、東西1m、深さ0.5m。遺物中に弥生時代後半頃の甕片などがあり、弥生時代前期に遡る可能性がある。

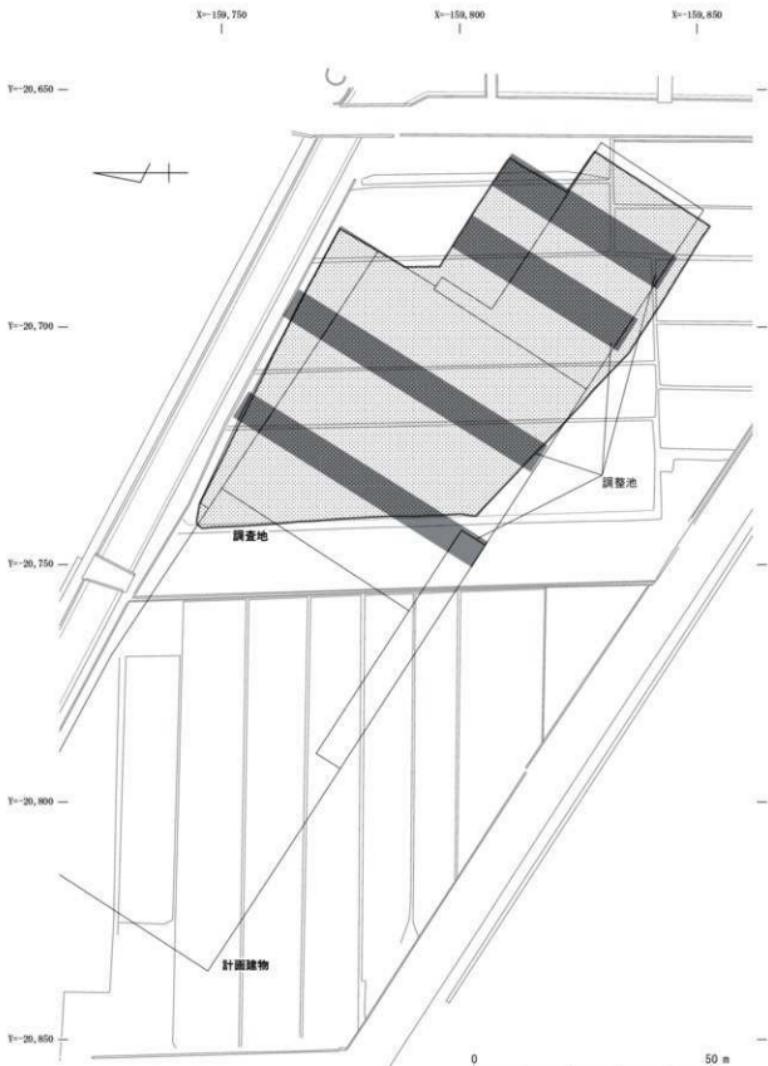
弥生時代後期末～古墳時代前期初頭

弥生時代後期末には調査区全体が墓域となるが、古墳時代初頭には調査区東半で土坑や区画溝が掘削され、居住区となる。

1号墓 調査区西部で検出した方形周溝墓である。主軸は北西～南東方向、主丘部の規模は1辺10m前後を測る。溝幅は2m前後、深さ0.5m前後。溝中より、布留甕や庄内甕、小形丸底甕、小形器台などの土器類が多数出土した。また、本遺構は平成24年度の試掘調査第2トレチで確認していたものであるが、試掘調査時に山陰系の台付無頸甕、紀伊系の広口甕などの搬入土器が出土している。布留式初頭の遺構とみられる。

2号墓 1号墓の北西に隣接して検出した方形周溝墓である。主軸は1号墓と同じく北西～南東報告、主丘部の規模は7m前後とみられるが、コーナーを鎌倉時代の井戸SK-10に切られるため正確な規模は不明。溝幅0.8～2.5m、深さ0.2m前後。また、西半は調査区外となる。弥生時代後期系の甕や二重口縁甕などの土器が出土した。庄内期の遺構とみられる。

3号墓 調査区東側中央で検出した方形周溝墓である。主軸は北北東～南南西で、主丘部は1辺



第14図 調査地位置図 (S = 1/1,000)

10m前後となる。溝幅1.5~3m、深さ0.2~0.4mを測る。溝内の北東部に土坑状の落ち込みがあり、広口壺などの完形土器群が出土したほか、南溝中央付近・溝内南西隅付近にも土坑状の落ち込みがあり、それぞれ土器が多く出土した。弥生時代後期末頃の遺構と考えられる。

4号墓 3号墓の南側で検出した方形周溝墓である。主軸は北西-南東で、主丘部は1辺10m前後となる。溝幅は1.2~2.5m、深さ0.1~0.3m。溝内より弥生時代後期末頃の土器が出土した。

5号墓 調査区中央南で検出した方形周溝墓である。主軸は北北東-南南西で、主丘部は1辺6m前後を測る。周溝は1.5~2m、深さ0.4m。東周溝内を中心に弥生時代後期系の幾点が出土した。庄内期古相並行期の遺構とみられる。

第8表 十六面・葉王寺遺跡第31次調査検出土坑一覧

遺構名	遺構の規模 (m)			平面形状	断面形状	遺構の時期				備考
	長軸	短軸	深さ			VI-4	庄内	布留	古	
SK-151	1.5	1.3	0.8	円形	U字形		○			井戸
SK-152	1.2	1.1	0.6	円形	U字形		○			井戸
SK-153	2.8	2.0	0.2	隔壁丸方形	皿状	○				
SK-155	3.4	—	0.2	北東半調査区外	隔壁円形	?		○		
SK-156	2.0	1.9	0.2	不正円形	皿状	○				
SK-157	1.9	1.9	0.2	円形	皿状	○				
SK-160	3.2	2.1	0.3	不整形	皿状	○				
SK-161	3.9	1.4	0.2	隔壁円形	皿状		○			
SK-166	1.0	0.9	0.5	円形	U字形	○				井戸
SK-167	1.0	0.7	0.2	円形	皿状	—	○			
SK-168	0.9	0.9	0.9	円形	逆台形		○			井戸
SK-169	1.0	0.9	0.6	円形	逆台形		○			井戸
SK-170	1.1	1.0	0.9	円形	漏斗形		○			井戸
SK-171	0.8	0.8	0.6	円形	U字形	○				
SK-172	1.4	1.1	0.7	円形	U字形	○				井戸
SK-174	1.7	1.6	1.7	円形	U字形		○			井戸
SK-175	4.9	2.1	0.4	不整形	皿状	○				
SK-176	0.9	0.9	0.4	円形	U字形		○			
SK-177	1.2	1.0	0.6	円形	U字形	○				井戸
SK-178	1.6	1.2	0.7	隔壁円形	U字形	○				井戸
SK-179	3.4	2.2	1.0	大型井戸	隔壁丸方形	すり鉢状		○		井戸。充形土器・グリーンタフ等
SK-180	1.3	1.0	0.4	上層(±SD-181)	円形	漏斗形	○			井戸
SK-181	3.8	1.0	0.5	不整形	方型	○				
SK-184	1.5	1.5	0.9	円形	二段丁字形		○			井戸
SK-185	0.6	0.6	0.6	円形	U字形		○			井戸
SK-186	3.3	2.9	0.4	円形	皿状	○				
SK-187	1.1	1.0	1.6	円形	U字形		○			井戸
SK-188	2.0	1.9	0.3	円形	皿状	○				
SK-189	2.2	1.6	0.7	円形	漏斗形		○			井戸
SK-190	1.1	0.8	0.6	円形	U字形		○			井戸
SK-191	1.7	1.1	0.9	不正円形	漏斗形		○			井戸
SK-192	1.3	1.3	0.5	円形	すり鉢状		○			井戸
SK-193	1.4	1.1	0.3	隔壁丸方形	皿状	○				
SK-194	1.0	0.9	0.6	隔壁円形	すり鉢状		○			井戸。なすび形木製品・筋縫車
SK-195	0.8	0.4	0.5	円形	漏斗形		○			井戸
SK-196	2.0	1.7	0.3	円形	二段皿状	○				
SK-197	1.3	1.1	0.2	円形	皿状	○				
SK-198	2.6	2.4	0.4	円形	二段台形	○				
SK-200	3.6	1.6	0.3	不整形	皿状		○			
SK-201	0.9	0.8	0.2	円形	逆台形	○				
SK-202	1.2	0.9	0.5	隔壁円形	漏斗形	○				井戸
SK-203	1.2	0.9	0.5	円形	皿状		○			
SK-205	0.7	0.6	0.7	円形	隔壁丸方形		○			井戸
SK-206	1.0	0.8	0.3	円形	逆台形	○				

S R - 101 調査区北西端から調査区中央南までの延長80m以上にわたって検出した河跡である。幅2.5~3.5m、深さ0.4m前後を測る。堆積土は粗砂質であり、多数の弥生時代後期末~庄内式段階の土器が出土した。河跡とみられるが、人為的な用水路としての性格があった可能性は否定できない。また、この河跡の上面は古墳時代後期頃まで一段低い土地となっていた可能性があり、南半は後述する古墳時代後期の河跡S R - 103が実質的な上層堆積となっている。

S X - 153 調査区東端南で検出した、直径5m前後の範囲を周溝で囲む遺構である。溝幅は0.3m前後、深さ0.4m前後。堅穴住居状の遺構であるが、住居床面などは確認していない。布留期の井戸S K - 168に切られるが、本遺構内から南方向に伸びる小溝の先端が庄内式新段階の井戸S K - 172に接続していることから、本遺構は庄内式新段階頃に属する可能性がある。なお、S K - 172などを含め、本遺構の周囲で古墳時代初頭~前期末の井戸が計7基みつかっている。

S K - 172 調査区南東部、S X - 153の南側で検出した、直径1.2m、深さ0.7mの土坑である。庄内式新段階の土器等が出土した。土坑から北側へ延びる小溝がS X - 153内で途切れる。S X - 153に付随する井戸とみられる。

S K - 205 調査区北東部で検出した円形の井戸である。直径0.5m、深さ0.7m。下層から完形の布留甕2点、直口甕1点などが出土した。布留1式頃の遺構とみられる。

古墳時代前期後半

調査区東半の集落が継続し、土坑・溝の数も多くなる。また、玉製作関連の遺物が多数出土していることから、この時期に玉製作をおこなっていたとみられる。

S D - 157 調査区東側で検出した、幅2m前後の溝である。延長15mを検出したが、実質的には10m程度の遺構と考えられる。溝の東半では土師器および滑石・グリーンタフの小剝片や素材剥片、管玉未成品、石鋸などが出土した。玉製作関連遺物を一括投棄した遺構と考えられる。

S K - 179 調査区中央で検出した、長軸3.5m、短軸3mの不整長方形の土坑である。中央が一段深くなり、井戸としての性格が考えられる。出土遺物には完形の布留甕等が多数あり、またグリーンタフや碧玉の素材剥片も数点出土した。古墳時代前期後半に玉製作をおこなっていたことを示す遺構である。

S K - 194 調査区中央、集落域西端付近で検出した井戸である。S R - 103に切られ、S D - 201を切る。高環の坏部2点が最下層から出土し、中層からナスピ形木製品（又鉄）や木製紡錘車、自然木多數が出土した。また、上層からは高環の脚部2点が出土した。上層・最下層の高環は同一個体とみられ、上層から下層までが一連の行為により埋まった可能性がある。

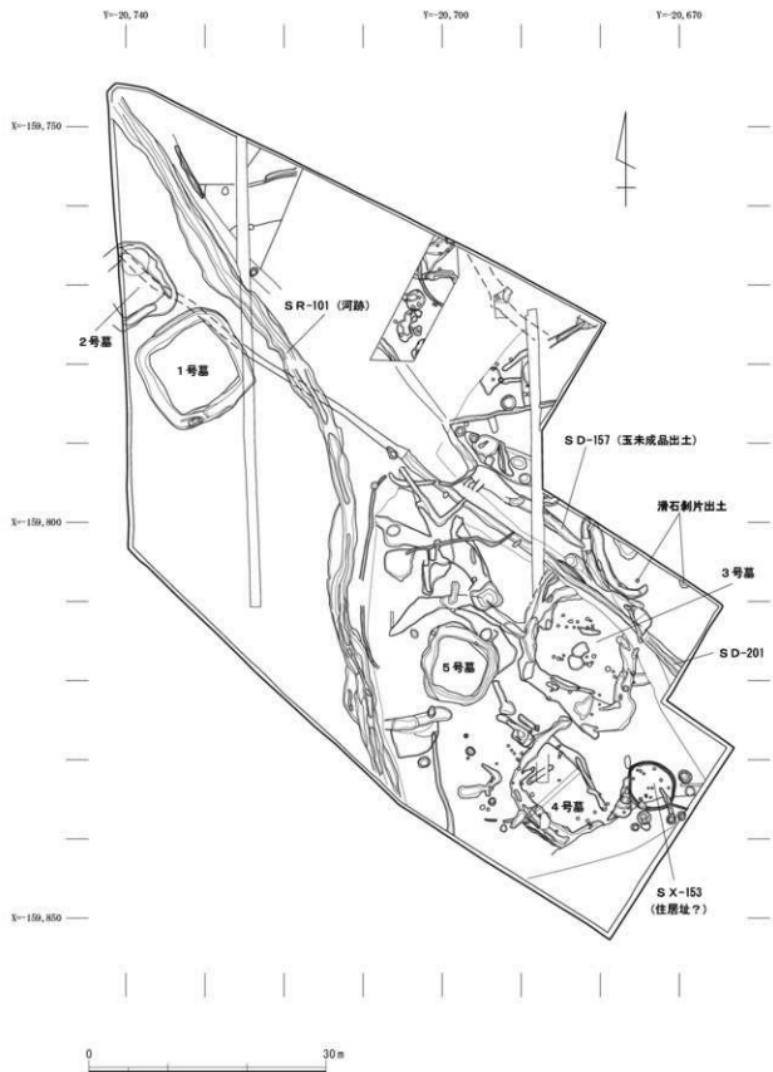
S K - 187 S D - 157の北西側で検出した、直径1m、深さ1.3mの井戸である。下層から完形の小形丸底甕が2点、上層からは高環等の土師器が出土した。布留3式頃の遺構であろうか。

S K - 185 S K - 179の北側で検出した、直径0.6m、深さ0.7mの井戸である。下層からほぼ完形の布留甕1点が出土した。布留3式頃の遺構とみられる。

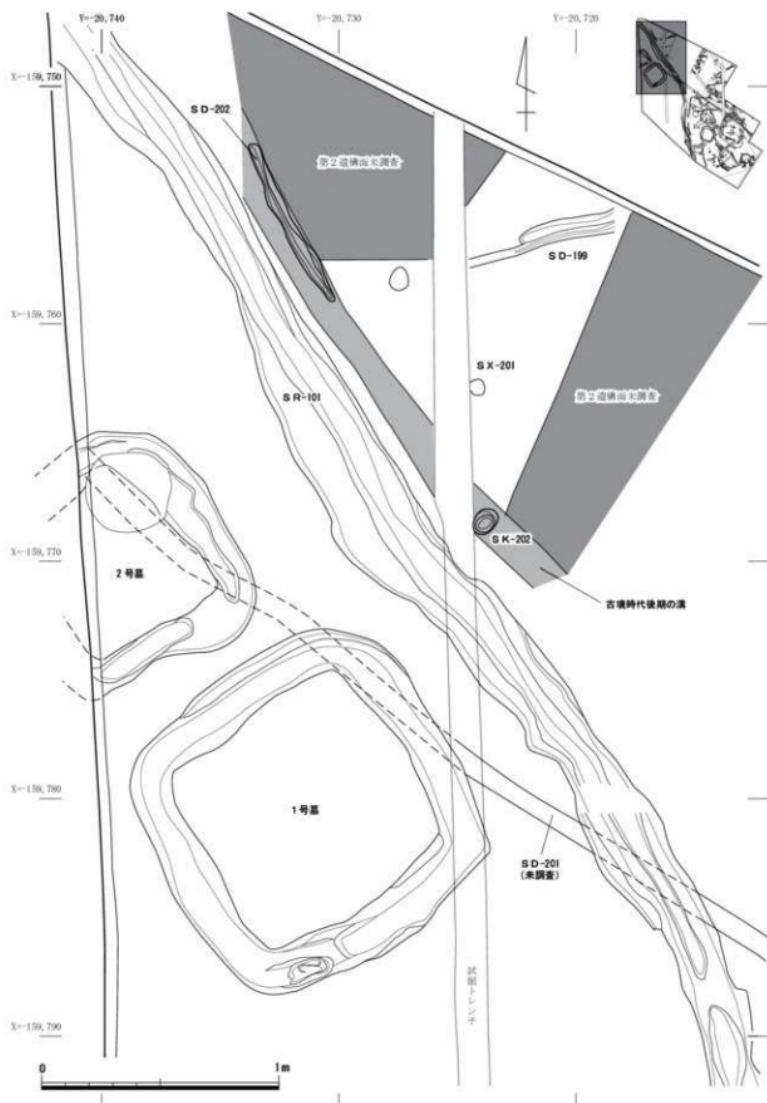
古墳時代中・後期

調査区を縱断する河跡・横断する大溝による灌漑がおこなわれたとみられ、調査区周辺が耕地となった可能性がある。

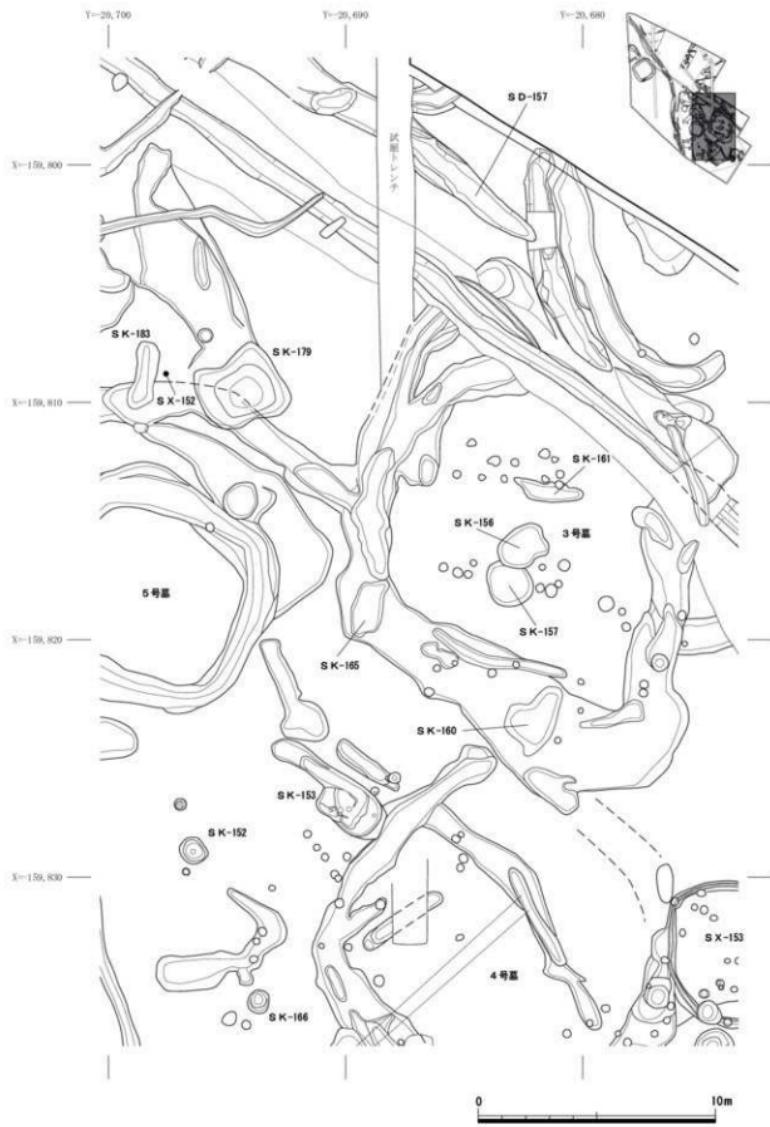
S R - 103 調査区中央で検出した、北東~南西方向の河川状遺構である。調査区中央から南と



第15図 弥生時代後期～古墳時代前期の遺構平面図 (S = 1/600)



第16図 北西部の遺構平面図 (S = 1/200)



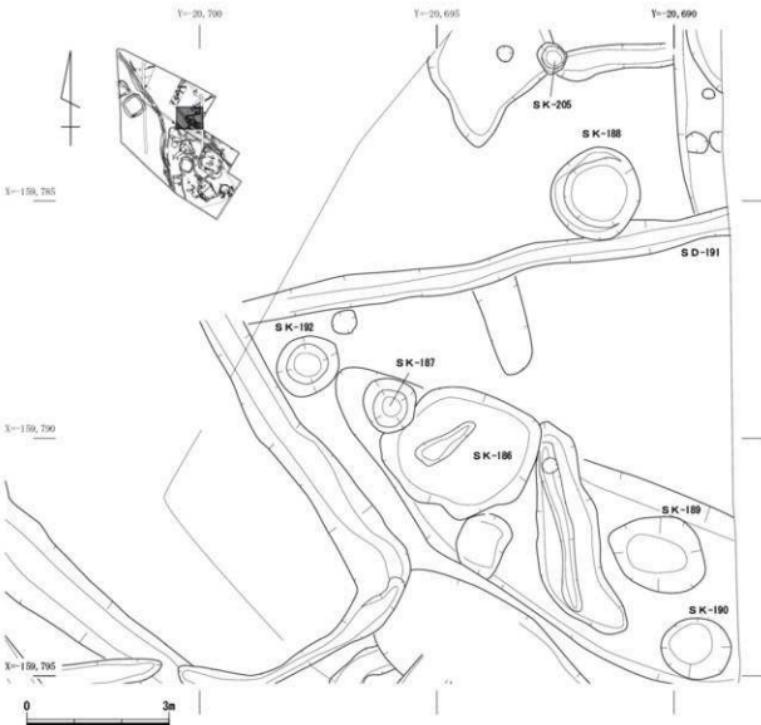
第17図 東部の遺構平面図 (S = 1/200)

南西に分岐する。幅9~12m、深さ0.4m前後を測る。南半の両岸付近では耕作の影響とみられる歓状の溝群がみられる。遺物から、古墳時代中~後期の遺構とみられる。

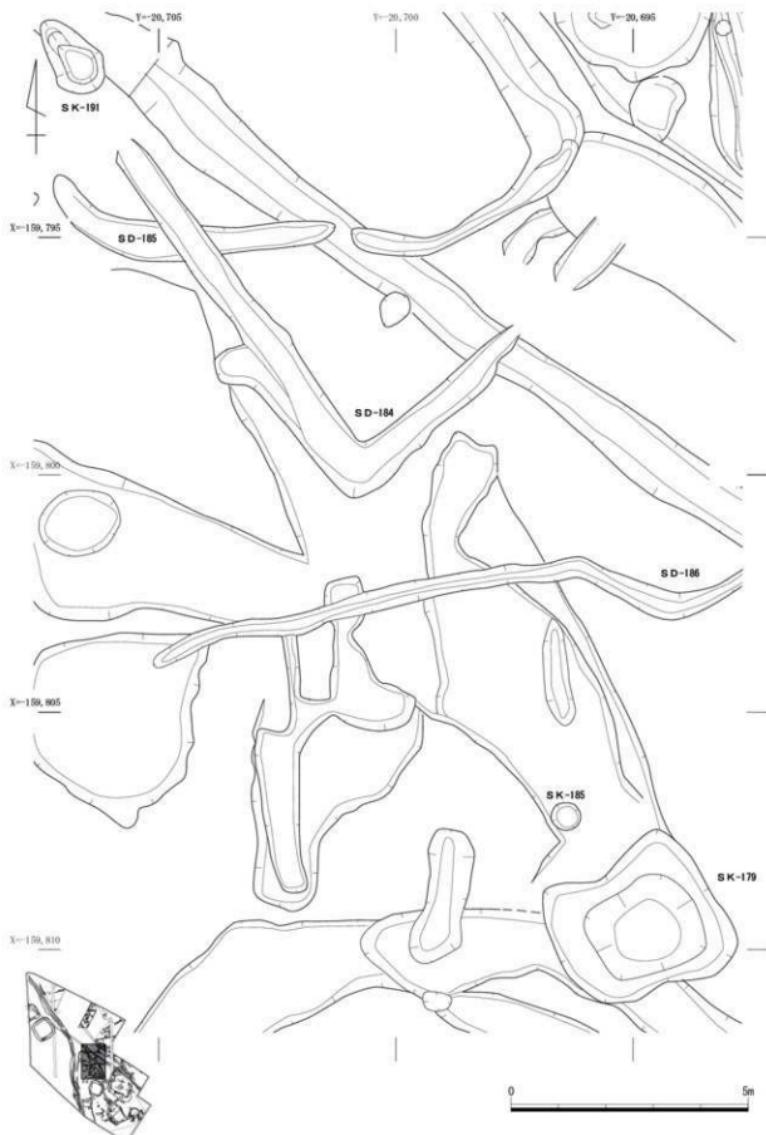
S D-101・106 調査区北西端から南東端までの延長120mにわたって検出した大溝である。幅3m、深さ0.5mを測る。調査区中央で河跡S R-103に切られる。南東側をS D-106、北西側をS D-101とする。

S D-101では、途中に水溜め状の遺構が伴う。直径2m前後の土坑状で、太さ0.5m前後の自然木が横たわった状態で出土した。また、溝内北東側底沿いにピット数基が溝主軸沿いにみられた。落ち込み2（水田状の遺構）から南西側に伸びる小溝が本遺構に接する地点にあたるが、この地点の上層から小型製鏡1点が出土した。鏡は、直径6cmで、内外区境界沿いに列点状の文様帶をもつ。このほか、完形の須恵器提瓶・蓋壺や甕など、6世紀代の土器が多数出土している。

S D-106は、下層が須恵器を伴わない砂質土堆積で、5世紀前半に遡る可能性がある。溝下面には0.5m×0.2m程度の小規模な方形土坑が2ヶ所あり、それぞれ1点ずつ滑石製の鏡形石製品が出土



第18図 北東部の遺構平面図 (S = 1/100)



第19図 中央部の遺構平面図 ($S = 1/100$)

した。鏡形石製品はそれぞれ直径3cm程度で、紐の突起を表現していた。

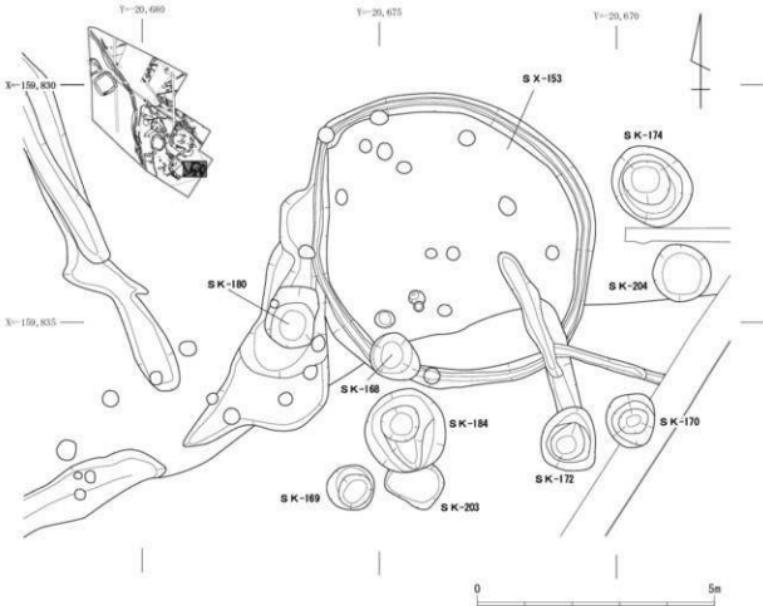
平安時代

密度は低いものの、調査区全体に遺構が点在し、特に地鎮とみられる遺構もみられた。

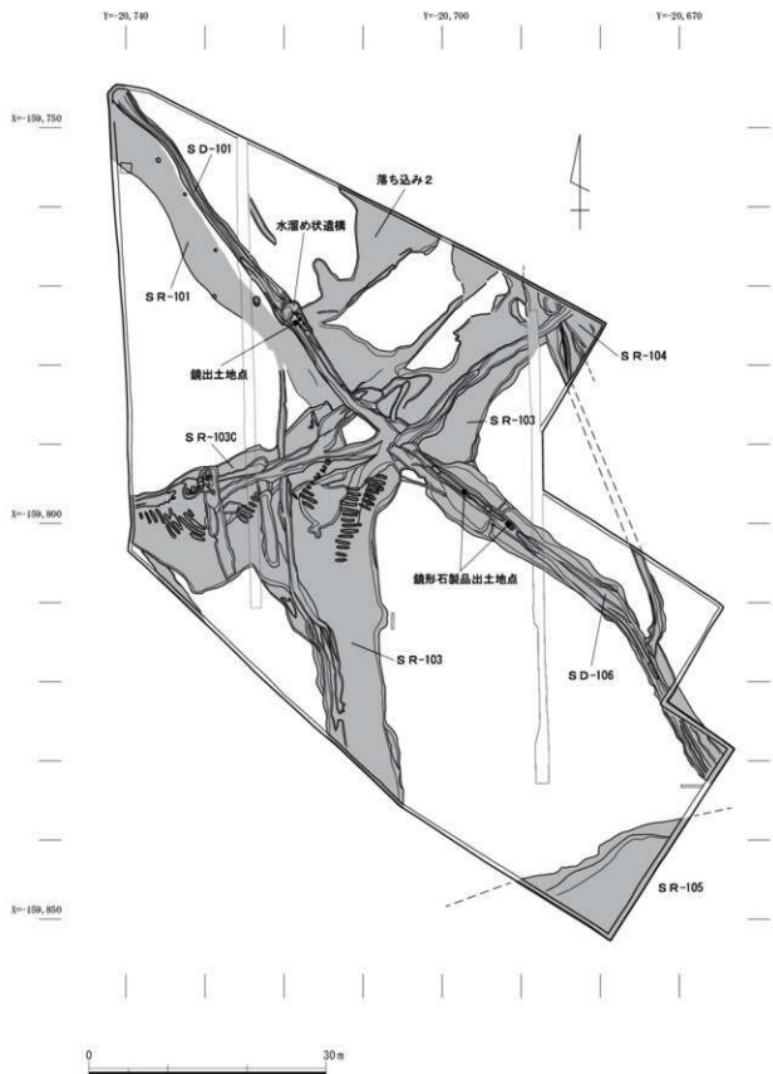
S B-01 調査区東端で検出した、2間×2間の建物跡である。東柱とみられる柱穴2基も検出している。詳細な時期は明らかでないが、周囲で検出した井戸が平安時代後期のものであり、S B-02も地鎮遺構の時期から平安時代後期頃と考えられることから、平安時代後期の建物跡となる可能性が高い。

S B-02 調査区北側で検出した建物跡である。柱穴は直径0.3m、深さ0.1m前後と小規模で、大半は素掘小溝群により削平されたとみられるため明瞭な平面形態をおさえることができなかった。後述する地鎮遺構との関係から、平安時代の遺構とみられる。

S K-10 調査区中央北側で検出した、長軸0.5m、短軸0.3mの隅丸長方形の土坑である。深さ0.5m。遺構底面付近から土師皿6点、銹化により癒着した銅錢11枚が出土した。地鎮遺構と考えられる。銅錢は銹化により判読不能であるが、直径が小さいこと、鉛質の強いものが含まれることから、皇朝十二銭の最後の方の銭貨である可能性が高い。遺物の時期から、10世紀中頃の遺構と考えられる。なお、本遺構はS B-02の南東に接して検出していることから、S B-02に伴う遺構である可能性がある。



第20図 南東部の遺構平面図 (S = 1/100)



第21図 古墳時代中・後期の遺構平面図 (S = 1/600)

SK-16 調査区東端で検出した方形の土坑である。1辺3.5m前後、深さ0.5m前後。上層から下駄や人頭大の自然石、土師皿などが出土した。11世紀前半頃の水溜め状の遺構とみられる。

SK-17 調査区南東部で検出した円形の井戸である。直径1.2m、深さ1.5mを測る。完形の土師皿および黒色土器塊などが出土した。10世紀後半～11世紀初頭の遺構とみられる。

鎌倉時代

大形の井戸・土坑があるものの、遺物が希薄で耕地内の灌漑を目的としたものである可能性が高い。調査区全面にわたり素掘小溝が拡がる。

SX-51 調査区北端で検出した、東西3m、深さ0.6mの長方形の土坑である。延長10mにわたって検出したが、北端は確認していない。現在北側隣接地を東南東～西北西方向に河が流れているが、これが中世に遡るものであるならばこの河に直接接続していた可能性も考えられる。本遺構の南東隅が小溝状に伸びるため、河からこの土坑を経て周囲の水田に水を引くような役割を果たしていた可能性がある。完形の瓦器塊や土師皿などが出土した。鎌倉時代の遺構とみられる。

SK-11 調査区西端で検出した、1辺3m前後の隅丸方形の井戸である。2段掘りとなっており、下段の平面形は1辺約1mの正方形である。遺構全体の堆積土は基本的に人为的な埋め立てを想定させるブロック土であった。遺物も僅少であるが、北宋銭とみられる銅銭1枚が出土した。鎌倉時代の遺構とみられる。

中世素掘小溝 調査区全体で東西方向および南北方向の小溝を多数検出した。大きく3時期に分かれるとみられる。うち、古段階の溝群から13世紀代の瓦器塊などが出土している。鎌倉時代～近世の遺構であろう。なお、調査区北東部などで数条の斜行する小溝を確認しているが、平安時代以前に遡る遺構となる可能性が高い。

3.まとめ

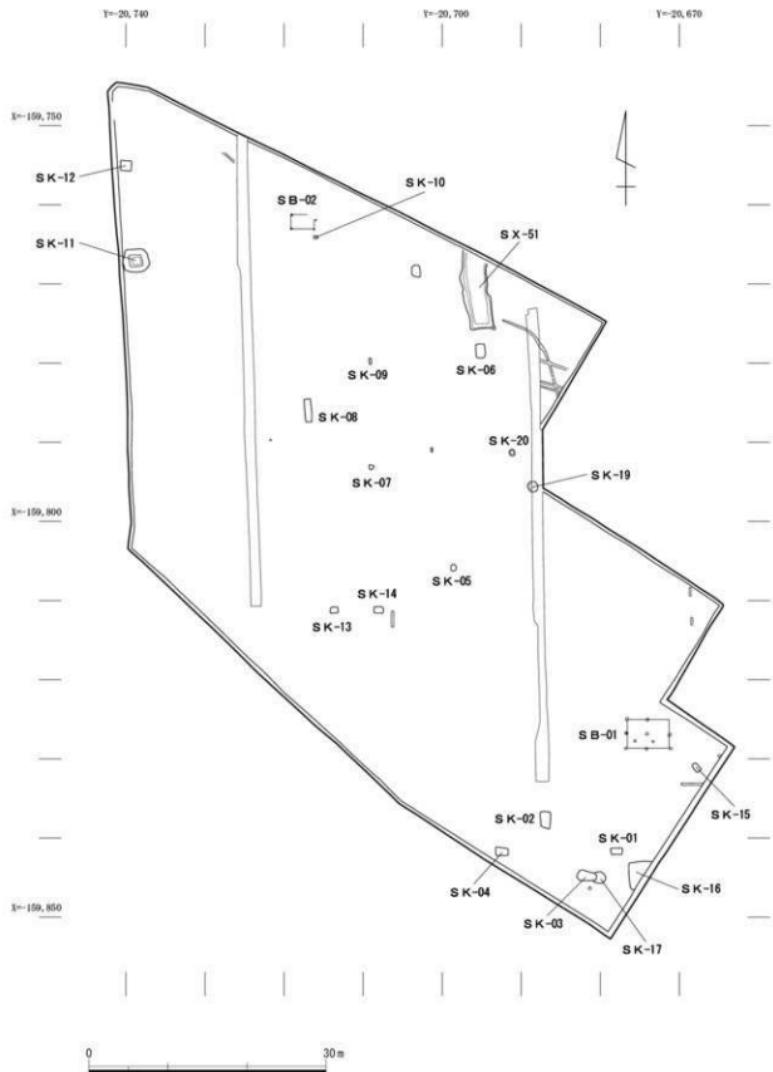
今回の調査では、縄文時代から中世に亘る、様々な成果を得ることができた。特に、古墳時代前期後半の玉製作関連遺物、古墳時代中・後期の水路と青銅鏡・鏡形石製品、平安時代の地鎮遺構など、重要な成果が数多くあり、遺物量も弥生土器を中心にして約300箱に及んだ。

本調査地は、遺跡範囲としては北西端であり、調査前には遺構密度が希薄な場所である可能性を考えていたが、これまで本遺跡では確認されていなかった弥生時代前期末頃の集落遺構が本地から北西に拡がることが確認され、また保津・宮古遺跡や宮古北遺跡などと密接な関連をもつとみられる古墳時代前期の集落遺構が確認されたことで、本地の遺跡範囲は大幅に見直す必要があると考えられる。

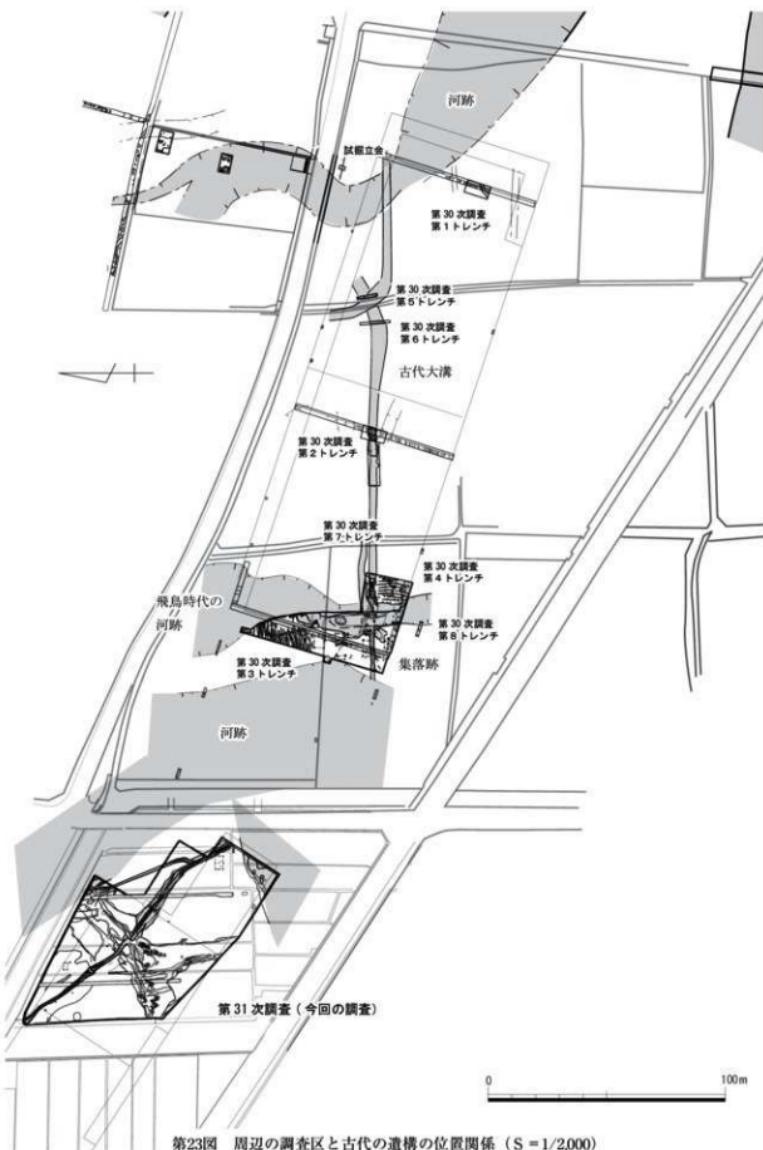
平安時代の遺物の時期については、以下の方々からご教示を賜りました。記して感謝いたします。
(敬称略)

松村恵司・尾野善裕・神野恵・小田祐樹・芝康次郎（奈良文化財研究所）

森下恵介・池田裕英・三好美穂（奈良市教育委員会埋蔵文化財調査センター）



第22図 古代の遺構平面図 (S = 1/600)



第23図 周辺の調査区と古代の遺構の位置関係 (S = 1/2,000)



第24図 中世～近世の遺構平面図（S = 1/600）



1. 弥生時代後期～古墳時代前期空撮（上が北）



2. S X-201弥生時代前期壺出土状況（西から）



3. 井戸群完掘状況（東から）



4, 5号墓完掘状況（南から）



5. 5号墓出土状況（南西から）



6. 1・2号墓完掘状況（北西から）



7. 1号墓出土状況（北西から）



8. SK-179上層出土状況（東から）



9. SK-179中層出土状況（北から）



10. SD-157出土状況（西から）



11. SK-194ナスビ形木製品出土状況（北から）



12. 古墳時代中・後期空撮（上が北）



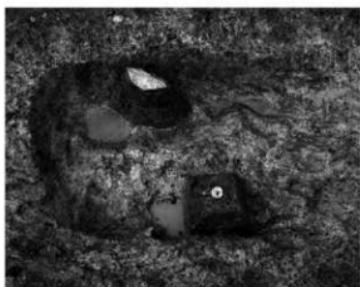
13. SD-101出土状況（南東から）



14. SD-101須恵器等出土状況（北西から）



15. SD-101青銅鏡等出土状況（北東から）



16. 鏡形石製品出土状況（南西から）



17. 中近世全景（北西から）



18. 地鎮遺構出土状況（北から）



19. S X - 51完掘状況（北から）



20. S K - 11完掘状況（東から）



21. 調査風景



22. 現地説明会説明風景（南から）

4. 十六面・薬王寺遺跡 第32次調査

1. 遺跡・既調査の概要

十六面・薬王寺遺跡は、奈良盆地の中央、標高48m前後の沖積地に立地する。遺跡北西部の弥生時代～古墳時代前期の集落跡、遺跡南部の弥生時代後期～古墳時代中期の墓域、遺跡南西部の古墳時代中期～後期の集落跡、遺跡中央部の中世屋敷地（保津氏居館跡推定地）等からなる複合遺跡である。

今回の調査地は、保津氏居館跡推定地の東端にあたる。賃貸住宅の建設に伴っておこなわれる擁壁工事の掘削が遺構面ちかくまで達するため、擁壁部分について発掘調査で対応することとなった。

2. 調査の成果

(1) 縮序

調査地の現状は畑地と水田の境界となる傾斜部である。調査区は擁壁工事部分の平面プランに則ってクランク状となっている。調査区の延長47m、幅1.6m。

I：黄褐色砂礫土〔検出標高46.9m、以下数値のみ記す〕、II：青灰色土〔46.4m〕、III：灰茶色土〔46.25m〕、IV：灰褐色粘質土〔46.1m〕、V：暗褐色土〔46.0m〕、VI：黒褐色土〔45.8m〕、VII：黒色粘土〔45.5m〕、VIII：淡青灰色シルト〔44.8m〕

第I層が現代造成層、第II～III層が現代水田耕土・床土、第IV層が中世遺物包含層、第V・VI層は绳文時代～古代の堆積層である可能性があるが不明、第VII層以下はベースである。中世後期の遺構は第V層上面で検出される。調査では、第IV層までを重機により除去し、以下を人力により掘削した。

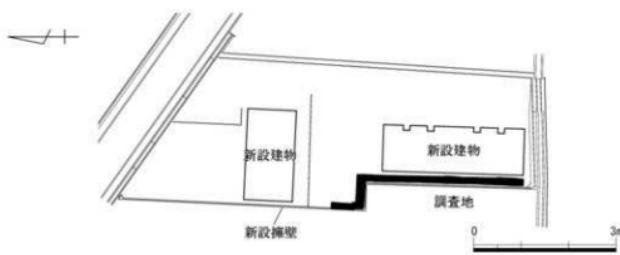
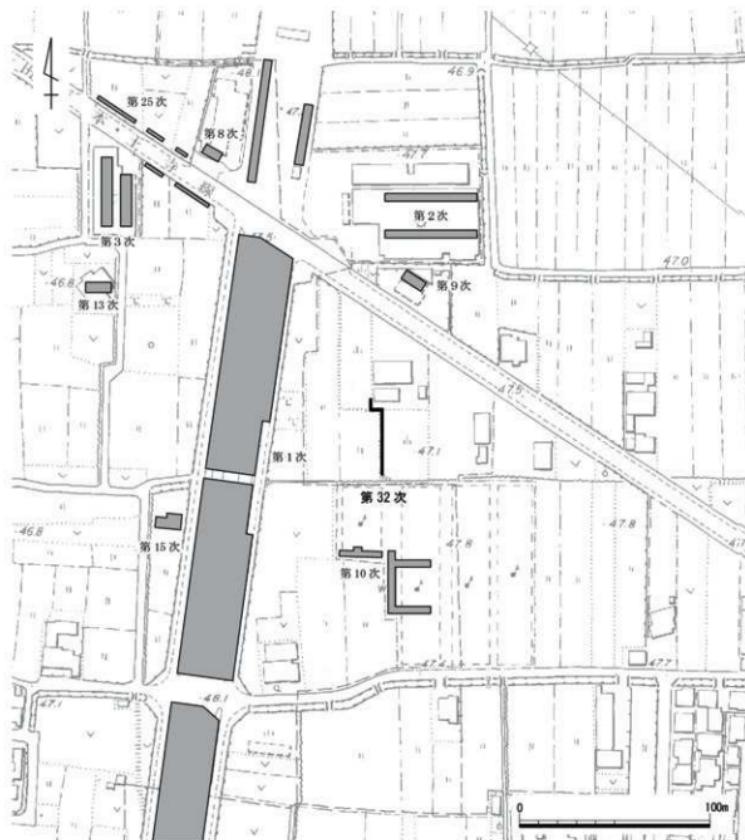
(2) 遺構と遺物

室町時代

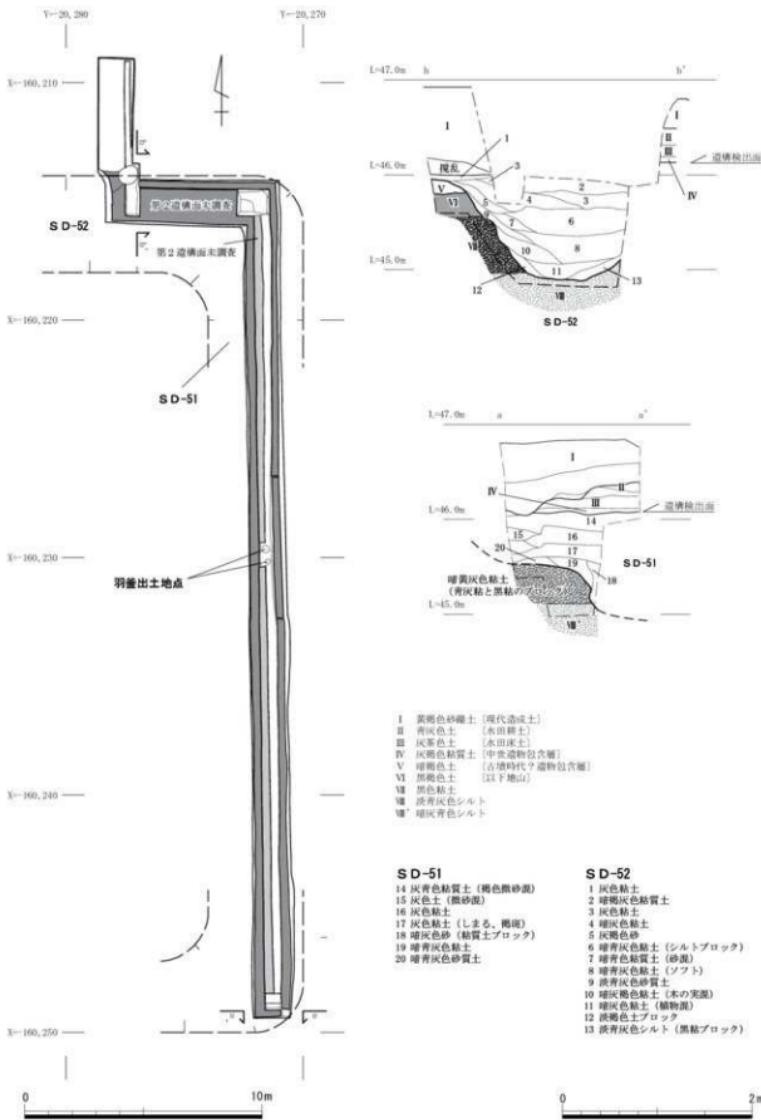
SD-51・52　　調査区のほぼ全体が南北方向の大溝内であった（SD-51）。幅不明、深さ1m以上だが不詳。検出面が工事掘削予定面よりも深くなったため、調査区両端などで掘り下げをおこなったのみである。この大溝は、土地境界に沿って設定された調査区の屈曲部に一致する形で北端が西へと屈曲している（SD-52）。溝幅は明らかでないが、深さ約1.2mを測る。調査の結果、室町時代の遺物が出土した（第27図）。このうち、4・6は半完形の土師器羽釜である。

3. まとめ

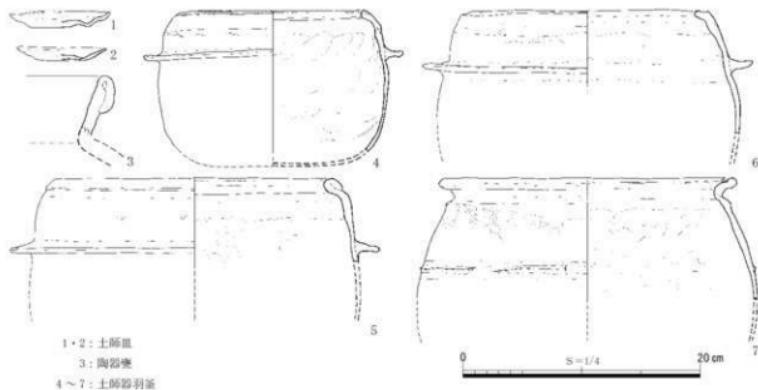
今回の調査では、南北方向の大溝が土地境界に沿って設定した調査区の屈曲部に一致する形で西へと屈曲することを確認することができた。過去の土地境界が現代にも痕跡を残している事例となる。



第25図 調査区位置図（上：S = 1/2,500、下：S = 1/1,000）



第26図 造構平面図および断面図（左：S=1/200、右：S=1/50）



第27図 出土土器

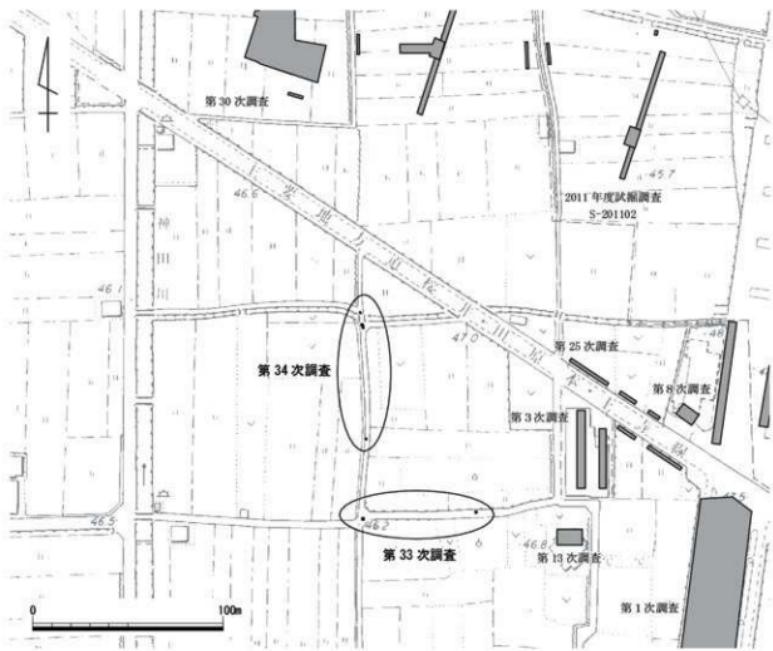


5. 十六面・藥王寺遺跡 第33・34次調査

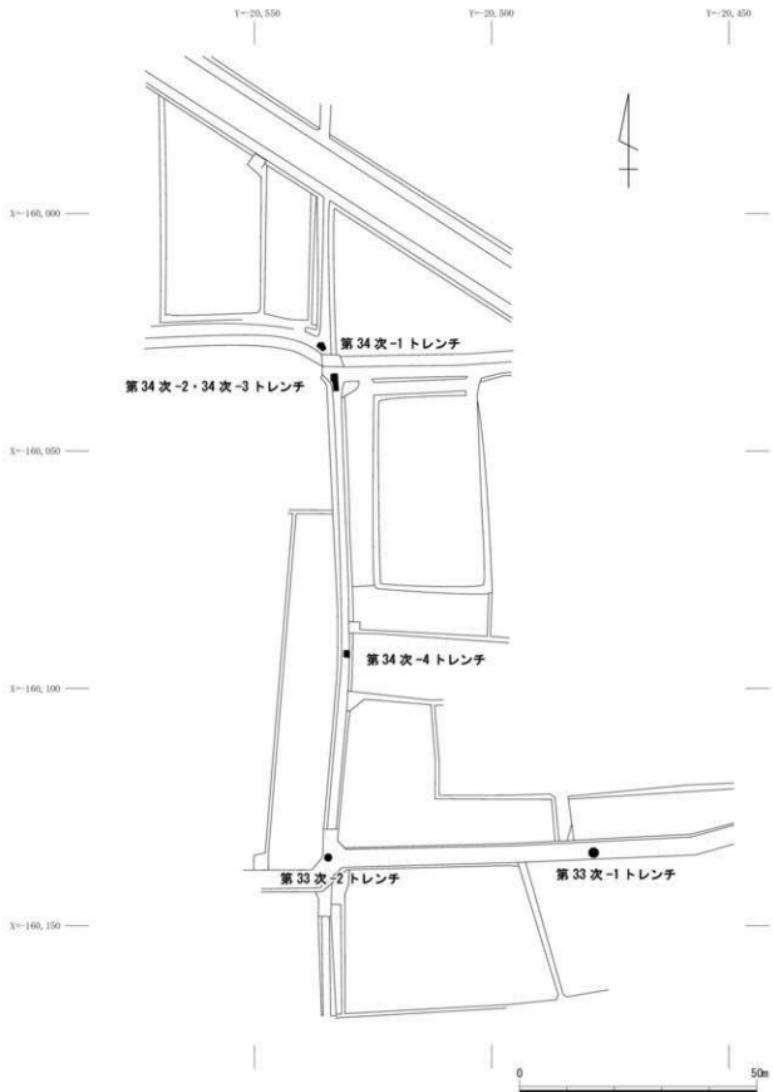
1. 遺跡・既調査の概要

十六面・薬王寺遺跡は、奈良盆地の中央、標高48m前後の冲積地に立地する。これまでの調査で、弥生時代から近世にかけての複合遺跡であることが判明している。その内容は、弥生時代前期の集落、弥生時代後期後半～古墳時代前期の集落および方形周溝墓群、古墳時代中期～飛鳥時代の集落および耕地、奈良時代の建物群、中世の環濠屋敷跡等である。中世の環濠屋敷跡は、周囲の小字名から、保津氏の居館跡と推定されている。

今回の調査地は、遺跡北西部に位置する。付近では、東側の第3・13次調査で古代の水田遺構等を検出しているほか、北側の第30次調査で飛鳥時代の河跡・奈良時代の建物群等を検出している。特に、第30次調査の飛鳥時代の河跡は南南東-北北西方向に流れており、その位置関係から今回の調査区付近でも同一の河跡が検出される可能性が考えられた。



第28図 調査地位置図 (S = 1/2,500)



第29図 調査区位置図 (S = 1/1,000)

2. 調査の成果

(1) 層序

調査地の現状は舗装された道路および簡易舗装された里道である。今回の調査は下水道工事に伴うもので、第1工期の人坑2ヶ所（第33次調査）、第2工期の人坑4ヶ所（第34次調査）について発掘調査を実施した。第1工期は東から第33次-1・33次-2トレンチ、第2工期は北から順に第34次-1～34次-4トレンチとする。ただし、第34次-2・34次-3トレンチについては近接しているため、結果的に一体となっている。また、第34次-1トレンチは南側に隣接する水路の改修工事時に廃棄されたコンクリート擁壁塊および工事攪乱の影響で、実質的にはわずかな面積しか調査できなかった。ここでは、第34次-2・34次-3トレンチの層序を示す。

I：アスファルト〔検出標高46.4m、以下数値のみ記す〕、II：クラッシャー〔46.35m〕、III：茶灰色土〔46.25m〕、IV：茶灰色土（青みがかる）〔46.1m〕、V：暗茶灰色土〔46.0m〕、VI：茶灰色土〔45.9m〕、VII：淡褐色粘質土〔45.8m〕、VIII：灰色粘質土〔45.7m〕、IX：淡灰褐色粗砂〔45.6m〕、X：暗褐色土〔45.5m〕、XI：橙褐色土〔45.35m〕

第III・IV層が里道盛土、第V～VII層が近世遺物包含層、第VIII層が中世遺物包含層である。第IX層は古代の洪水による堆積層とみられ、第X層が古墳時代遺物包含層。第XI層以下はベースである。第VI層上面が近世の遺構検出面、第VII層上面が中世の遺構検出面、第VIII層上面が古代頃の遺構検出面となる。なお、調査地点の里道を挟んで東側の水田が西側の水田より約30cm高くなっている、西側に向かって地形が落ち込む様相と考えられる。

(2) 遺構と遺物

a. 第33次調査

古代

S R -1101 第33次-1トレンチで検出した河川堆積である。幅および深さ不明。遺物は確認していないが、周囲の調査成果から、飛鳥時代頃の河川堆積である可能性が高い。

中世

秦掘小溝群 第33次-1・33次-2トレンチで東西方向・南北方向の小溝を各3条検出した。遺物が少ないため詳細な時期は不明だが、中世の耕作に伴う遺構とみられる。

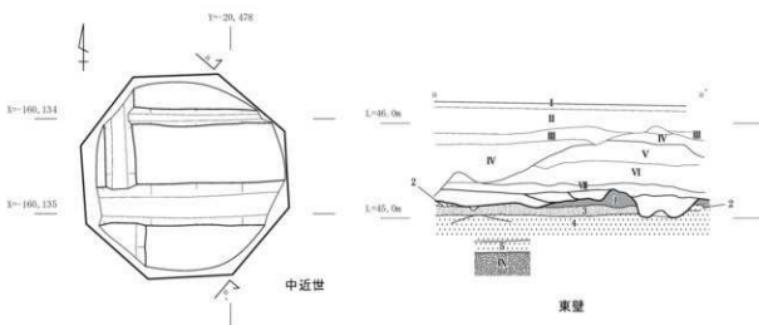
b. 第34次調査

飛鳥時代

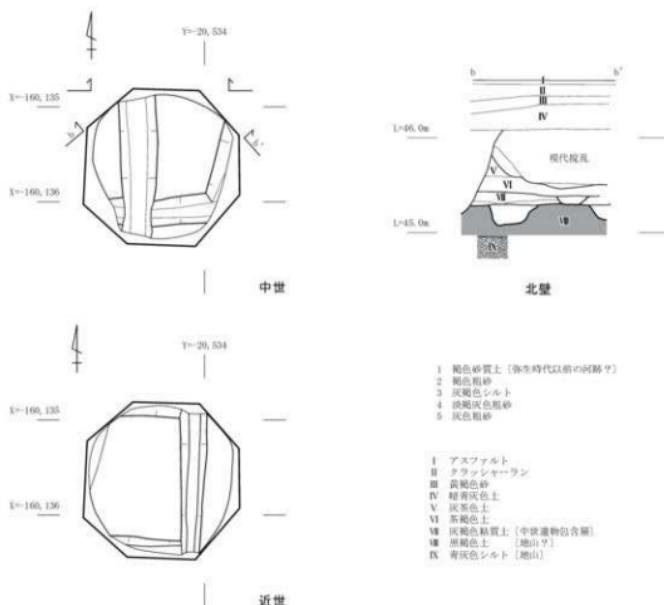
S D -2101 第34次-2トレンチ西端で検出した南北方向の溝跡である。西肩が調査区外となるため正確な規模は不明であるが、幅1m前後となる可能性がある。深さ0.3m。当初の掘削は洪水砂堆積以前とみられるが、粗砂で埋没したのちに再掘削をおこなっているとみられる。遺物が僅少であるため正確な時期は不明だが、飛鳥時代前後の遺構とみられる。

古代

S R -1101 第34次-1トレンチで検出した粗砂堆積を調査区中央で検出した。掘削した面積が狭小であり、遺物も僅少であるため、遺構の時期や性格・規模を明らかにすることはできなかった。ただし、周囲の調査成果等から、古代の河跡の一部である可能性が考えられる。



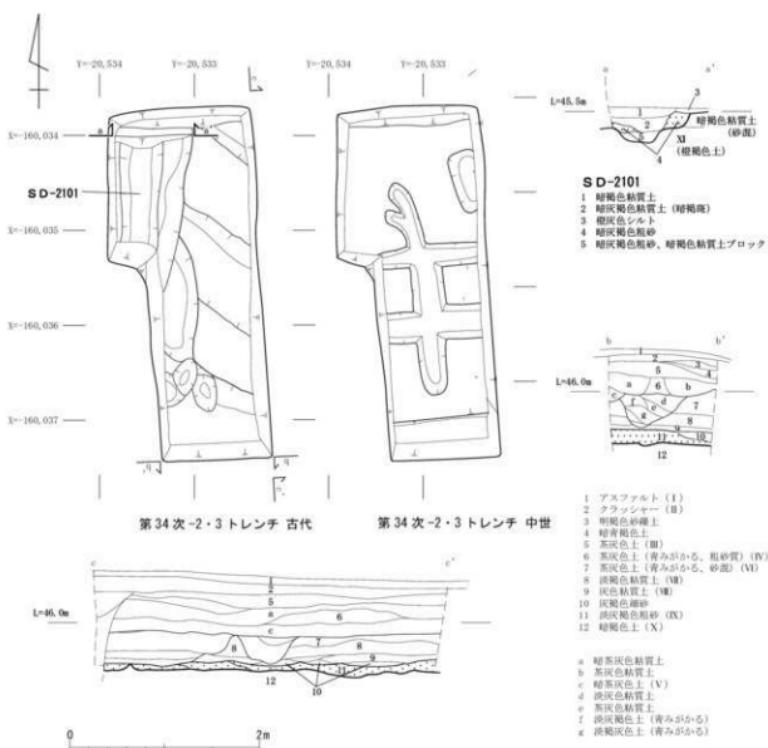
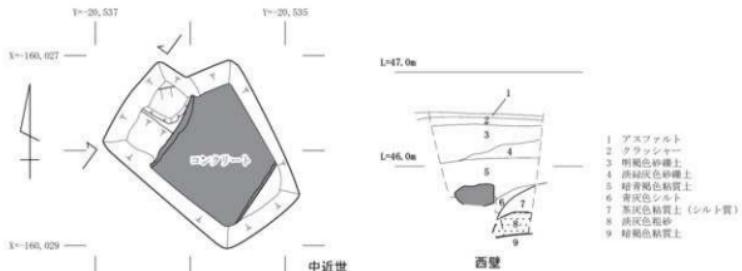
第33次-1トレンチ



第33次-2トレンチ



第30図 第33次調査造構平面図および断面図 (S = 1/50)



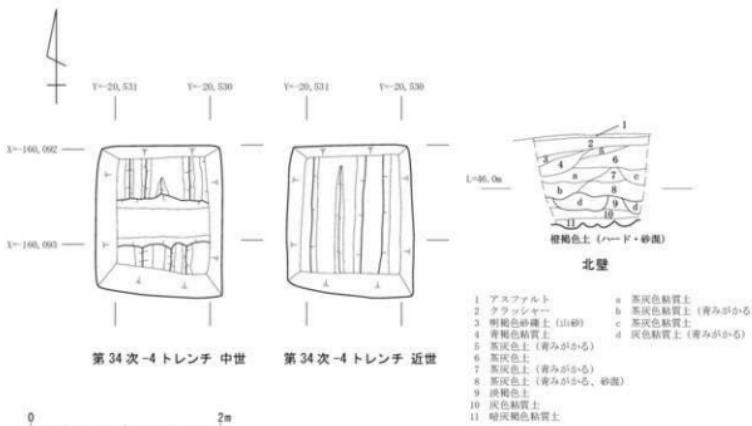
中世

素掘小溝群 第34次-4トレンチの第2遺構面で南北方向4条および東西方向1条の素掘小溝を検出した。遺物が少ないため詳細な時期は不明だが、鎌倉時代頃の遺構とみられる。

3.まとめ

今回の下水道工事に伴う調査では、第30次調査で確認した飛鳥時代の河跡に伴って形成された可能性がある粗砂堆積を確認することができた。河跡の本体は第33次-1トレンチ周辺になる可能性があるが、南西部の第33次-2・34次-4トレンチでは粗砂堆積を確認していないため、河跡の想定ラインを絞り込むことができそうである。なお、第34次-2・34次-3トレンチの洪水砂下では明確な水田遺構を検出することができなかったが、周辺には水田面が残存する可能性が考えられる。

なお、調査地付近には一段高い島畠状の土地が点在し、中世屋敷地関連の痕跡である可能性も考えられたが、今回の調査では中世屋敷地に関わる遺構・遺物を検出することはできなかった。



第32図 第34次調査第34次-4トレンチ遺構平面図および断面図 (S = 1/50)



1. 第33次-1 トレンチ全景（西から）



2. 第33次-2 トレンチ全景（西から）



3. 第34次-1 トレンチ全景（南から）



4. 第34次-2・3 トレンチ全景（北から）



5. 第34次-2・3 トレンチSD-2101完掘状況（南から）



6. 第34次-4 トレンチ全景（南から）

6. 小阪里中遺跡 第5次調査

1. 遺跡・既調査の概要

小阪里中遺跡は、奈良盆地の中央、標高49m前後の沖積地に立地する。これまでの調査で、弥生時代中期後半の遺構と古墳時代後期の古墳群、中・近世の環濠をもつ屋敷地の遺構を検出している。

今回の調査地は、遺跡北端にある。付近では下水道工事時の立会調査を実施しており、弥生時代後期頃の落ち込み、墳形不明ながら埴輪を伴う古墳周濠等を検出している。これらの成果から、本調査地においても小阪里中古墳群に関わる遺構・遺物、あるいは弥生時代関連の遺構が拡がる可能性が考えられた。

2. 調査の成果

(1) 層序

調査地の現況は宅地である。今回の調査は、建築をおこなう建物部分ではなく、敷地内の畑部分で実施した。調査では、近世末～近代とみられる厚い盛土層とその下の中世遺物包含層を検出した。
I：暗褐色土〔検出標高49.3m、以下数値のみ記す〕、II-a：茶灰色粘質土〔49.1m〕、II-b：茶灰色土〔砂多し〕〔48.7m〕、III-a：淡灰褐色粘質土〔シルト質〕〔48.4m〕、III-b：淡灰褐色土〔48.2m〕、IV：暗灰褐色粘質土〔砂多し〕〔48.1m〕、V：淡黄灰色粘土〔47.9m〕

第I層は現代の耕作土である。第II・III層は近代遺物包含層、第IV層は中世の落ち込みで、第V層以下がベースである。第II層上面が近代の遺構検出面、第IV層上面が中世の遺構検出面となる。

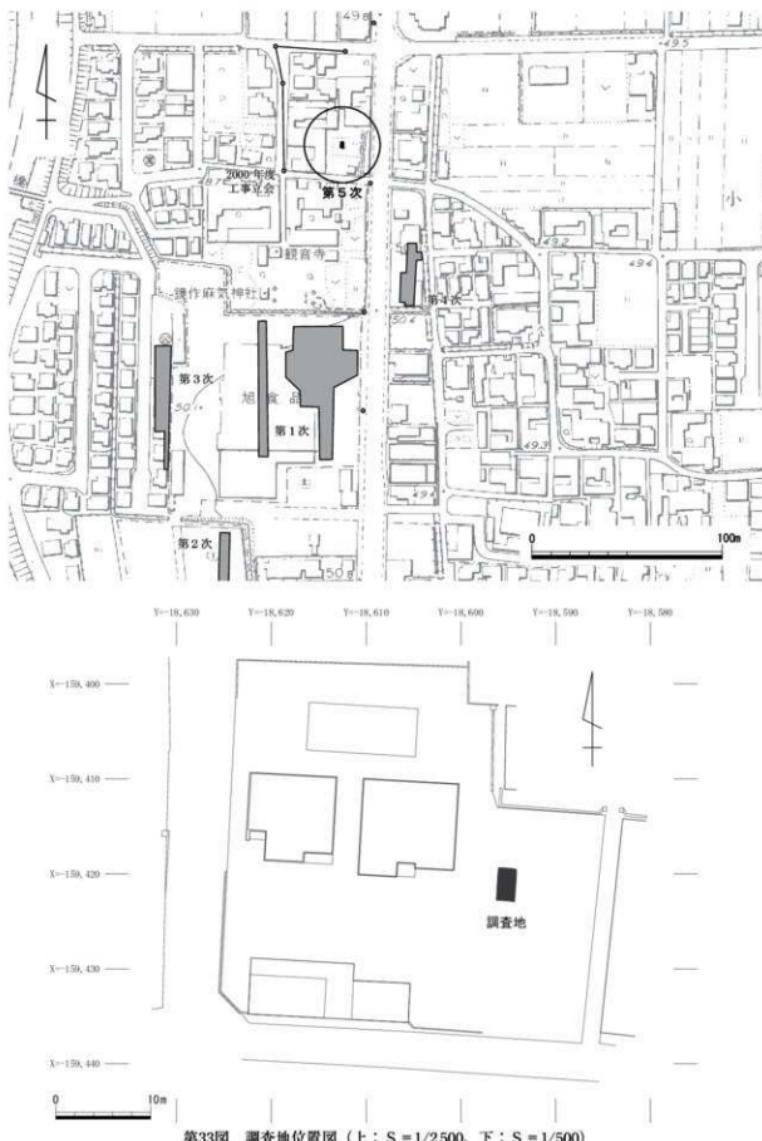
(2) 遺構と遺物

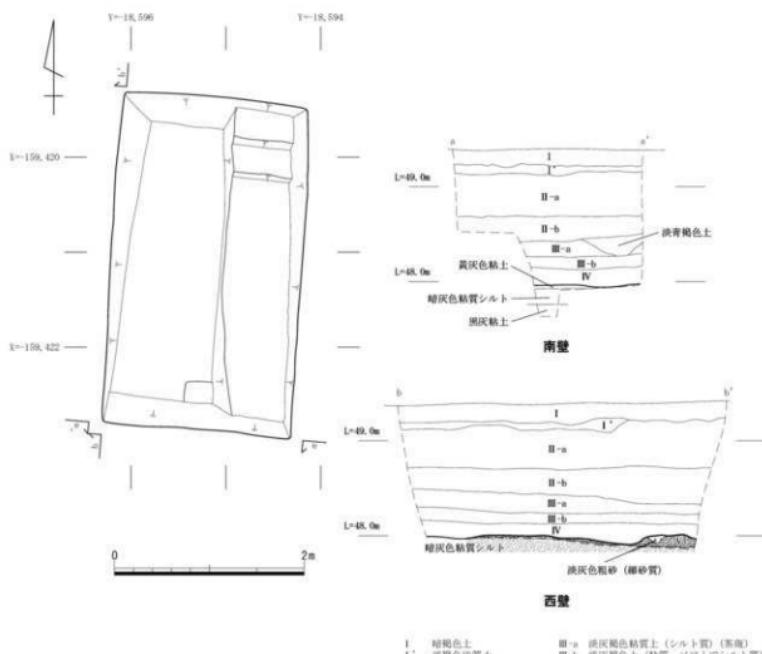
中世

落ち込み1　　調査区全体が中世頃の落ち込みとみられる。厚さ0.2mの堆積で、中世の水田耕土等の可能性もある。

3.まとめ

今回の調査では、中世の落ち込み状の堆積層を確認した以外は顕著な遺構を確認することができなかった。近世末～近代にかけて宅地造成されたとみられるが、調査地自体は畑となっていたためか屋敷地関連遺構は検出していない。なお、周囲の下水工事に伴う立会調査では調査地北側で弥生時代後期の落ち込みを、調査地西側で古墳時代の古墳周濠を検出しているが、これらに関連する遺構は確認できなかった。





第34図 遺構平面図および西・南壁断面図 (S = 1/50)



1. 西壁層序 (東から)



2. 完掘状況 (北から)

7. 金剛寺遺跡 第6次調査

1. 遺跡・既調査の概要

金剛寺遺跡は、奈良盆地の中央、標高46m前後の沖積地に立地する。史料にみられる「金剛寺城」に関わる遺跡である。これまでの調査で、遺跡北部に六重の大溝を掘削し、東側にも南北方向の大溝を掘削していることを確認している。

今回の調査地は、金剛寺城の南東隣接地に位置する。金剛寺城推定範囲の外ではあるが、北東部を六重の大溝で防護していたことから、南東部にも何らかの施設が存在する可能性が考えられた。

2. 調査の成果

(1) 層序

調査地の現状は水田である。携帯電話基地局の建設に伴い、南北6m、東西8mの調査区を設定した。

I : 暗青灰色土〔検出標高45.35m、以下数値のみ記す〕、II : 青灰色土〔45.2m〕、III : 灰褐色粘質土〔45.0m〕、IV : 灰色粘質土〔44.75m〕、V : 黄褐色土〔44.55m〕、VI : 暗灰色粘質土〔44.4m〕

第V層がベース層で、中・近世の遺構検出面となる。調査では、重機により第IV層まで除去し、以下を人力で調査した。

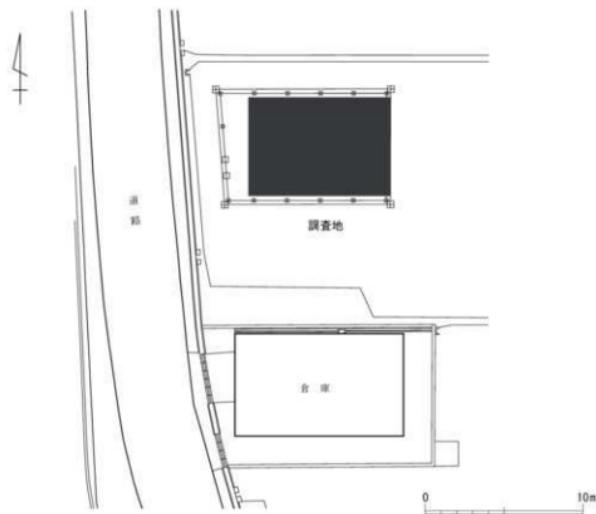
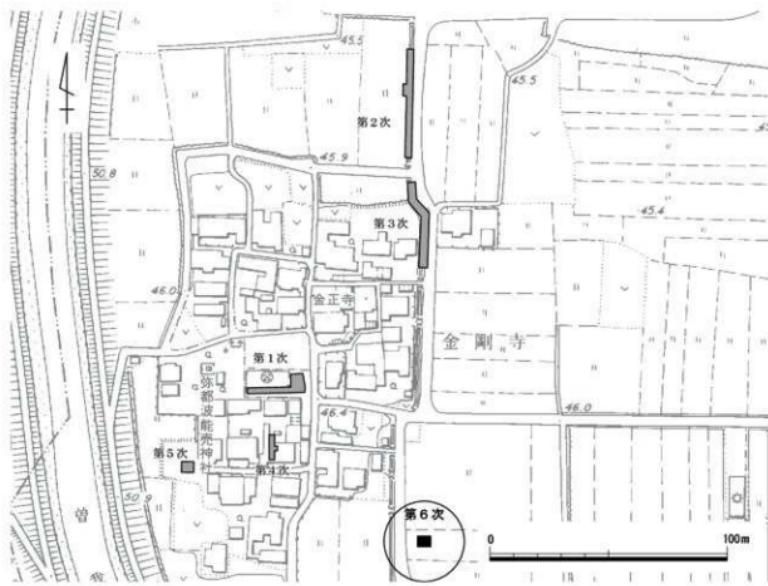
(2) 遺構と遺物

中世

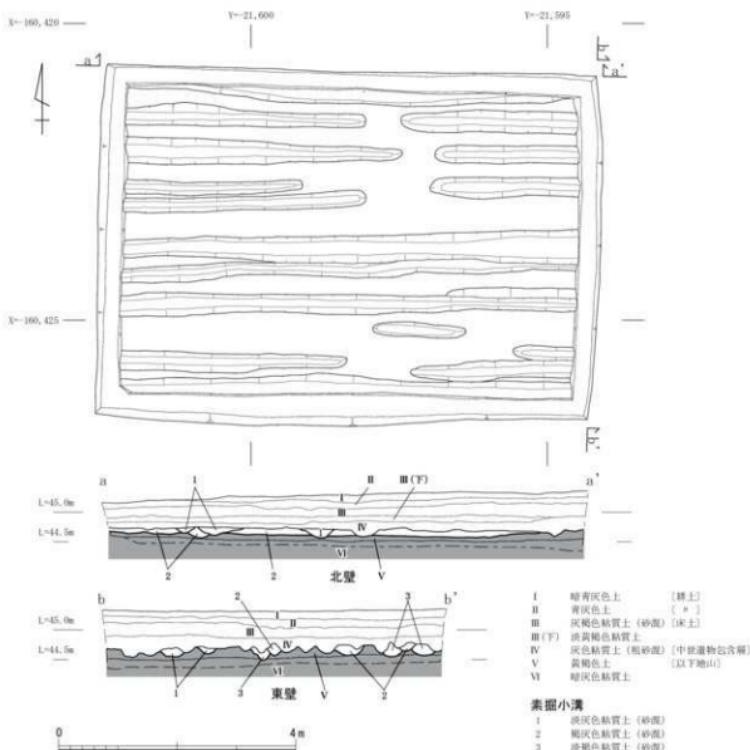
素掘小溝群　調査区全体で東西方向の小溝群を検出した。幅0.3~0.4m、深さ0.1m前後。鎌倉時代～室町時代の土器片が一定量出土している。

3.まとめ

今回の調査では、金剛寺城に直接関わる遺構を検出することができなかった。本地は中世以来継続的に耕地としての土地利用がなされていたものと考えられる。中世の土器片が多く出土していることは、調査地が金剛寺城に近接する立地であることを反映しているものであろう。



第35図 調査地位置図（上：S = 1/2,000、下：S = 1/300）



第36図 遺構平面図および北・東壁断面図 (S = 1/80)



1. 完掘状況（西から）

2. 北壁土層堆積状況（南東から）

8. 金剛寺遺跡 第7次調査

1. 遺跡・既調査の概要

金剛寺遺跡は、奈良盆地の中央、標高46m前後の沖積地に立地する。史料にみられる「金剛寺城」に関わる遺跡である。金剛寺城は、箸尾氏配下の金剛寺氏の本拠であり、室町時代～戦国時代にかけて機能していた。しかし、大和に進出してきた松永久秀との抗争の過程で、永禄五年（1562）に破城となった。箸尾城へ勢力を集約するためだったとされる。

これまでの調査で、遺跡北部に六重の大溝を掘削し、東側にも南北方向の大溝を掘削していることを確認している。西側に接する曾我川を含めて防御を固めていた可能性がある。また、中央付近でも東西および南北方向の大溝を確認しており、内部の区画が存在したとみられる。

今回の調査地は、金剛寺城の北端付近、第2次調査で確認している大溝群の南側隣接地と推定される地点である。周囲の水田面から約12mの盛土がなされており、金剛寺城に関わる何らかの施設が検出されることが予想された。

2. 調査の成果

（1）層序

調査地の現状は宅地である。近所の方の話では、60年前までは畑であったとのことである。
I：暗褐色土〔検出標高46.7m、以下数値のみ記す〕、II：褐色砂質土〔46.6m〕、III：茶灰色粗砂〔46.4m〕、IV-1：茶灰色粘質土〔46.0m〕、IV-2：茶灰色粘質土〔45.75m〕、IV-3：茶灰色質土〔45.5m〕、IV-4：茶灰色粘質土〔45.2m〕、IV-5：茶灰色土（シルト質）〔44.75m〕、V：暗褐色粗砂〔44.7m〕

第I・II層は近代の耕土・整地層である。第III・IV層が中世造成土層、第V層は周囲の調査成果から古代の河跡に関わる堆積層とみられる。

第III～V-5層はいずれも非常に固く締まっており、人為的な造成土であるとみられる。調査では、第V層上面までを重機で掘削して面的な調査をおこない、南半について最大2mまで掘り下げて層序の確認をおこなった。

（2）遺構と遺物

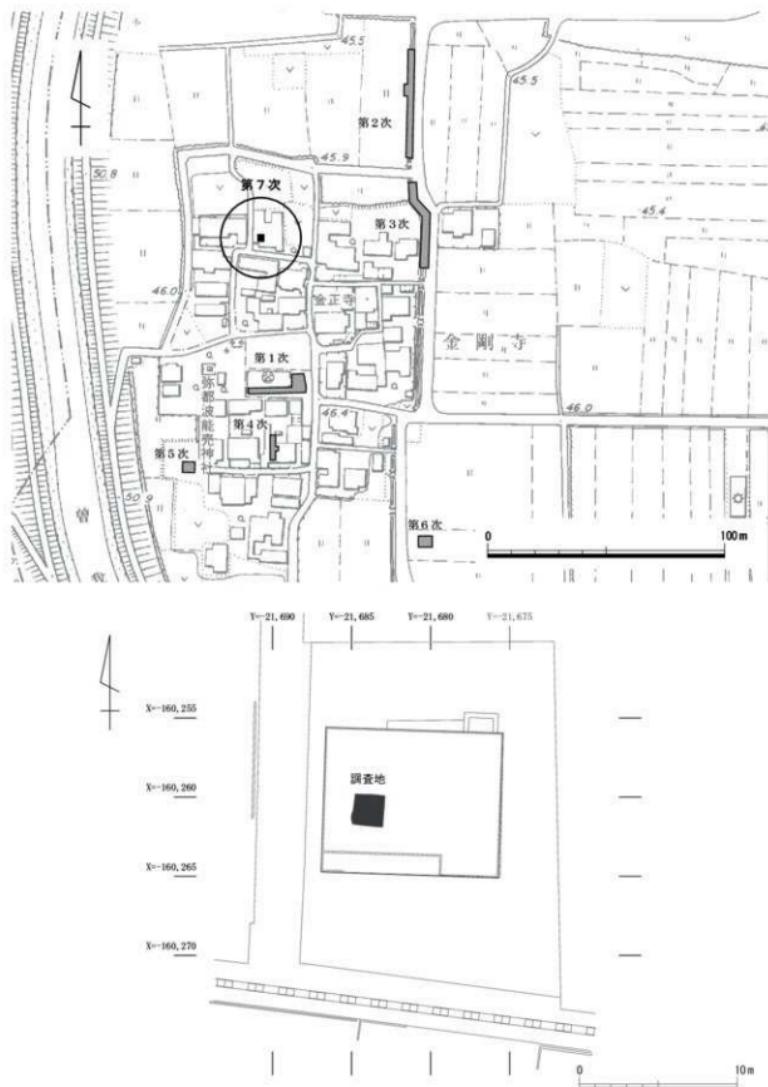
中世

土壘状遺構　調査区全体が厚さ1.5m前後の中世造成土で形成されていた。造成土はややシルト質の粘質土で、若干の中世土器細片を含む。

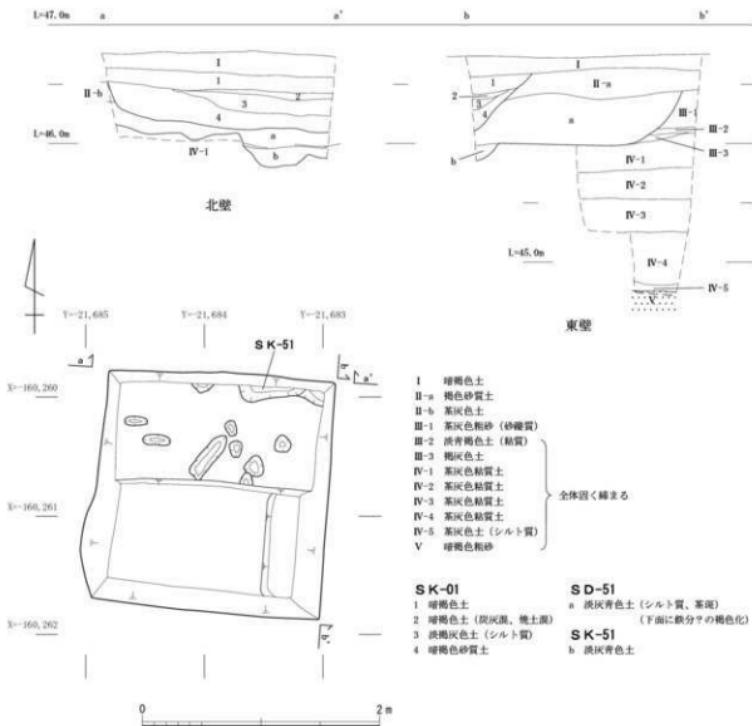
中近世

S D-51　調査区全体が東西方向の溝状遺構であったとみられる。南肩のみ確認した。幅不明、深さ0.4m前後を測る。単層で埋没していることから、人為的に整地するような形で埋められたと考えられる。遺物は少ないが、中世末～近世の遺構とみられる。

S K-51　調査区北端、SD-51下面で確認した土坑である。調査区外に拡がるため規模は不明。遺物も少ない。中世末～近世前半頃の遺構とみられる。



第37図 調査位置図（上： $S = 1/2,000$ 、下： $S = 1/300$ ）



第38図 遺構平面図および北・東壁断面図 (S = 1/40)



1. 遺構検出状況（西から）



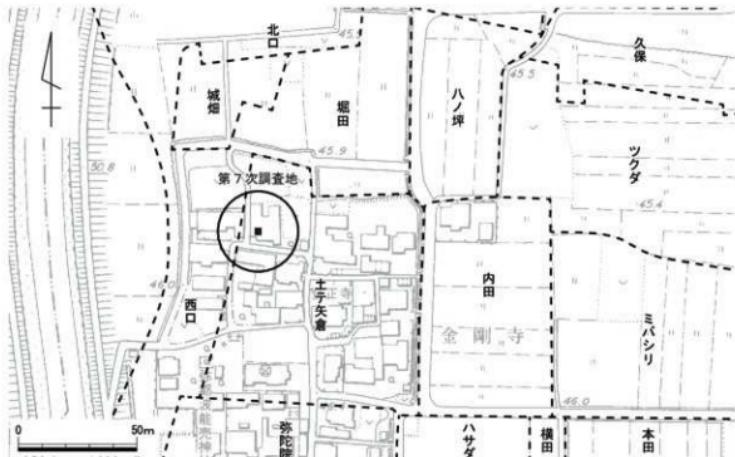
2. 完掘状況（西から）

近代

S K-01 調査区北端で検出した、炭灰層を含む土坑である。一部の検出にとどまるため規模は不明。近代の陶磁器片等が出土した。ごみを処理した穴と考えられる。

3.まとめ

今回の調査では、金剛寺城内北部の状況についての情報を得ることができた。かなり固く縮まつた粘質土による盛土がなされており、小字名の「土テ矢倉」のとおり土塁が築造されていた可能性が高い。盛土に含まれる土器には14～15世紀のものが目立つが、一部黒色土器や鎌倉時代の瓦器も含む。付近に平安時代後期から続く集落が存在した可能性を示すとともに、主要な造成の時期が14～15世紀頃であったことを知ることができる。



第39図 調査地周辺小字図 (S = 1/2,000)



3. 小字「土テ矢倉」遠景（北西から）



4. 小字「土テ矢倉」遠景（北東から）

9. 佐味遺跡 第2次調査

1. 遺跡・既調査の概要

佐味遺跡は、奈良盆地の中央、標高46m前後の沖積地に立地する。弥生時代～中世の遺物散布が認められる埋蔵文化財包蔵地として遺跡地図に登録されている。佐味遺跡では、弥生時代中期・後期の遺物が出土していることから、拠点集落の候補地とされたこともあるが過去に埋蔵文化財発掘調査が実施されたのは1977年の1回のみであり、その実態についてはほとんど判っていない。

古墳時代～古代の佐味遺跡については、1970年代の河川改修工事での採集資料に古墳時代中期頃の円筒埴輪や古代の土器等がみられ、付近に古墳時代～古代の集落が存在した可能性があるものの(本書第IV部-2「佐味遺跡採集の遺物」参照)、遺構としてとらえるには至っていない。

中世の佐味遺跡は、史料にみられる「佐味城」に関わる遺構が存在する可能性が考えられていた。佐味城は、箸尾氏配下の佐味氏の本拠であり、室町時代～戦国時代にかけて機能していた。しかし、大和に進出してきた松永久秀との抗争の過程で、永禄五年(1562)に破城となった。箸尾城へ勢力を集約するためだったとされる。佐味遺跡北端の小字名に「中佐味」があり、この付近が佐味氏居館に関わる地区である可能性が考えられた。この「中佐味」の東側隣接地は現在満田領の小字「アテノ木」となっているが、この地区には50m四方の土壇状の土地がある。中世屋敷地の痕跡とみられるが、かつて「東佐味」という村がこの地にあり、それが移転して現在の満田集落となったという話が地元に伝わる。

史料では、「慶長郷帳」(1600年頃)では佐味村の石高を約1,053石とし、これが「寛永郷帳」(1639年)まではほぼ同じ石高となっている。これが、「元禄郷帳」(1702年)では佐味村638石、東佐味村514石の2村に分かれ、さらに「天保郷帳」(1843年)では東佐味村が満田村に改称されている。ただし、現満田集落が現在の位置に「移転」した時期については史料から明らかにすることはできない。

今回の調査地は、佐味遺跡の北端付近、地元でかつて「東佐味」の村があったと伝えられる土壇の南側に隣接する。その位置から、「東佐味」の屋敷地に関わる何らかの遺構が検出されることが予想された。

2. 調査の成果

(1) 層序

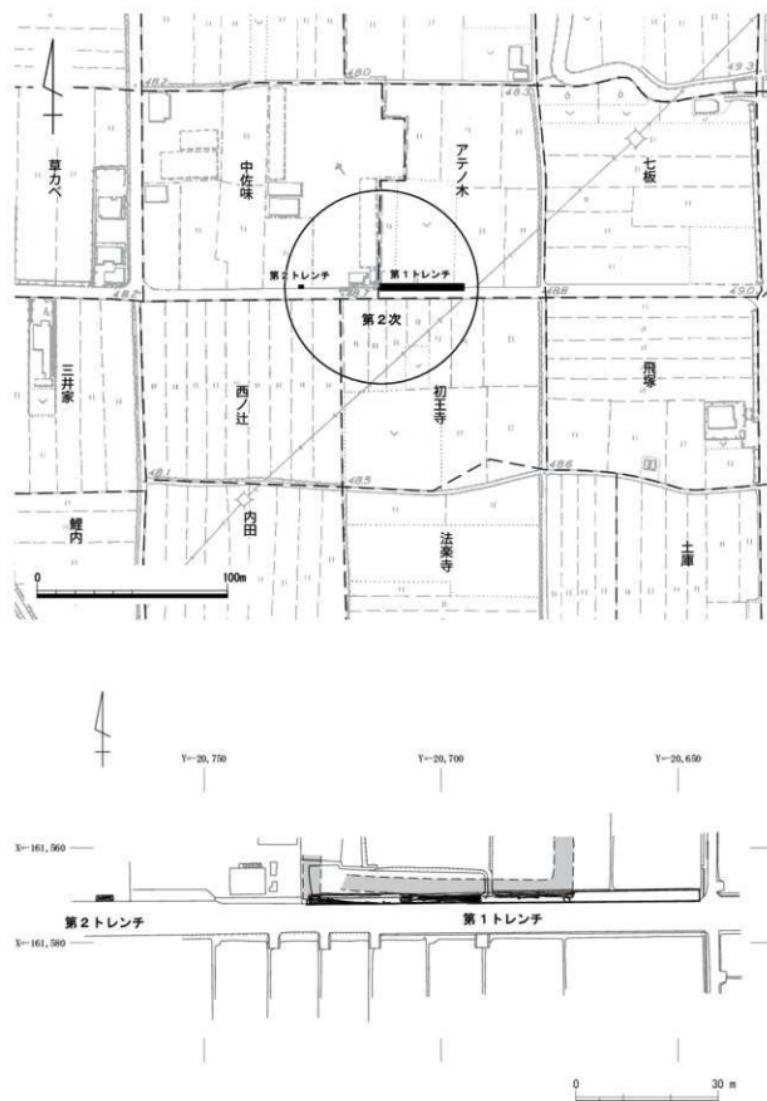
調査地の現状は道路と水田の境界となる傾斜地である。ここでは、水田部分となる第1トレンチ北壁の層序を示す。

I : 暗褐色土〔検出標高48.3m、以下数値のみ記す〕、II : 暗褐色粘質土〔48.15m〕、III : 淡褐色土〔48.0m〕、IV : 淡褐色粘質土〔47.8m〕、V : 黄褐色シルト〔47.7m〕、VI : 淡灰青色粘土〔47.4m〕

現水田面から深さ0.6mの第V層上面が弥生時



1. 土壇状の鳥塙(南西から)



第40図 調査地位置図（上：S = 1/2,500、下：S = 1/1,000）

代～中世の遺構検出面となる。第1トレンチでは、第V層上面までを重機で掘削し、以下を人力で調査した。また、西側工区に設定した第2トレンチは、全て人力で掘削をおこなった。

(2) 遺構と遺物

a. 第1トレンチ

弥生時代

SD-1101 調査区中央西で検出した南北方向の溝である。幅0.7m、深さ0.15mを測る。遺物が僅少であるため、時期は明らかでない。堆積土が黒色土であることから、弥生時代頃の遺構と考えられる。

1号墓 調査区中央、SR-1102とは重複する位置で検出した方形周溝墓とみられる遺構である。推定墳丘長8m前後。周濠幅1m前後、深さ0.4m前後を測る。周濠北西コーナー付近から細頸壺3点、広口長頸壺2点等の供獻土器が出土した(第44・45図-1~5)。4・5は胎土・文様構成がほぼ同一であり、同一作者である可能性も考えられる。また、胴部下半に丁寧な穿孔がみられる。3は若干胎土に砂粒が多い。なお、第45図-6もこの遺構付近で出土したことから本周溝墓の供獻土器となる可能性が高い。出土土器の時期から、大和第III-2様式頃の遺構とみられる。

SR-1101 調査区西側で検出した南北方向の河跡である。幅4m前後、深さ0.4mを測る。調査区南端付近で東に分岐する。堆積土は褐灰色粗砂を中心とする。遺物は少ないが、上層から弥生時代中期頃の甕が出土した。

SR-1102 調査区中央付近で検出した、北北東～南南西方向の河跡である。幅10m前後、深さは確認していない。この遺構が埋没したのちに方形周溝墓(1号墓)が掘削されていることなどから、弥生時代中期以前の遺構とみられる。

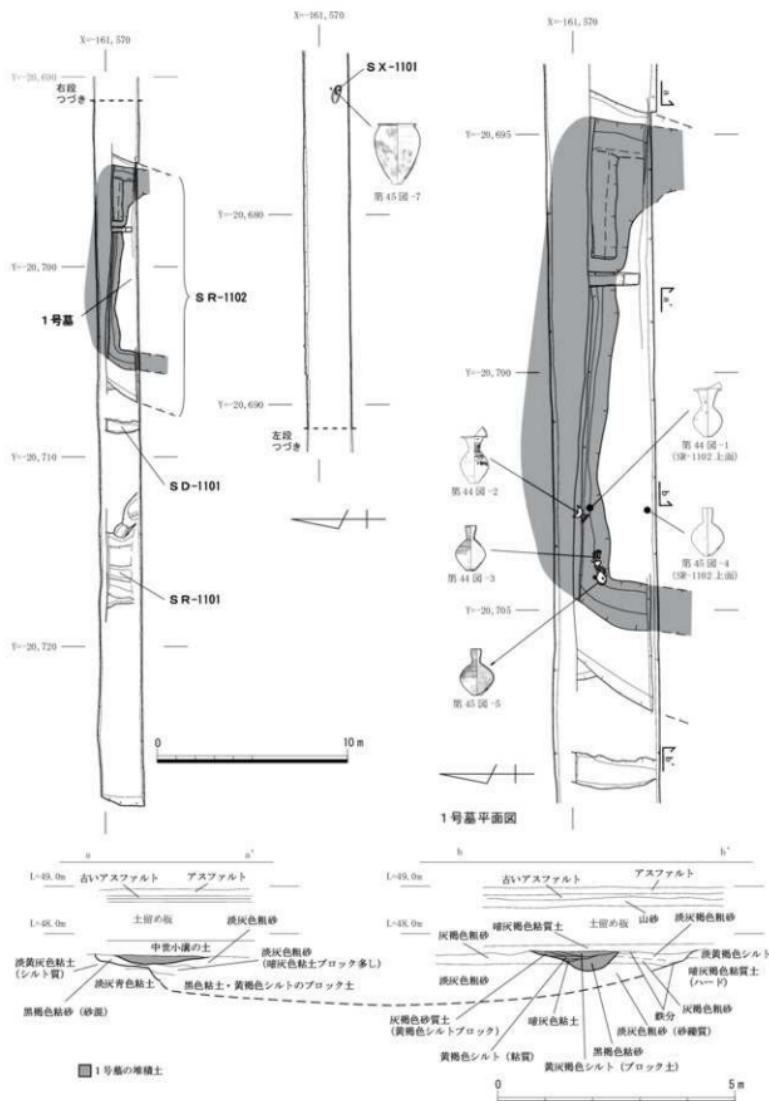
SX-1101 調査区東端で検出した小規模な土坑である。口縁部側をやや下向けに横置した甕1点が出土しており(第45図-7)、甕棺である可能性がある。ただし、中世の耕作関連遺構による削平を受けており、骨や副葬品等は確認できなかった。

中世

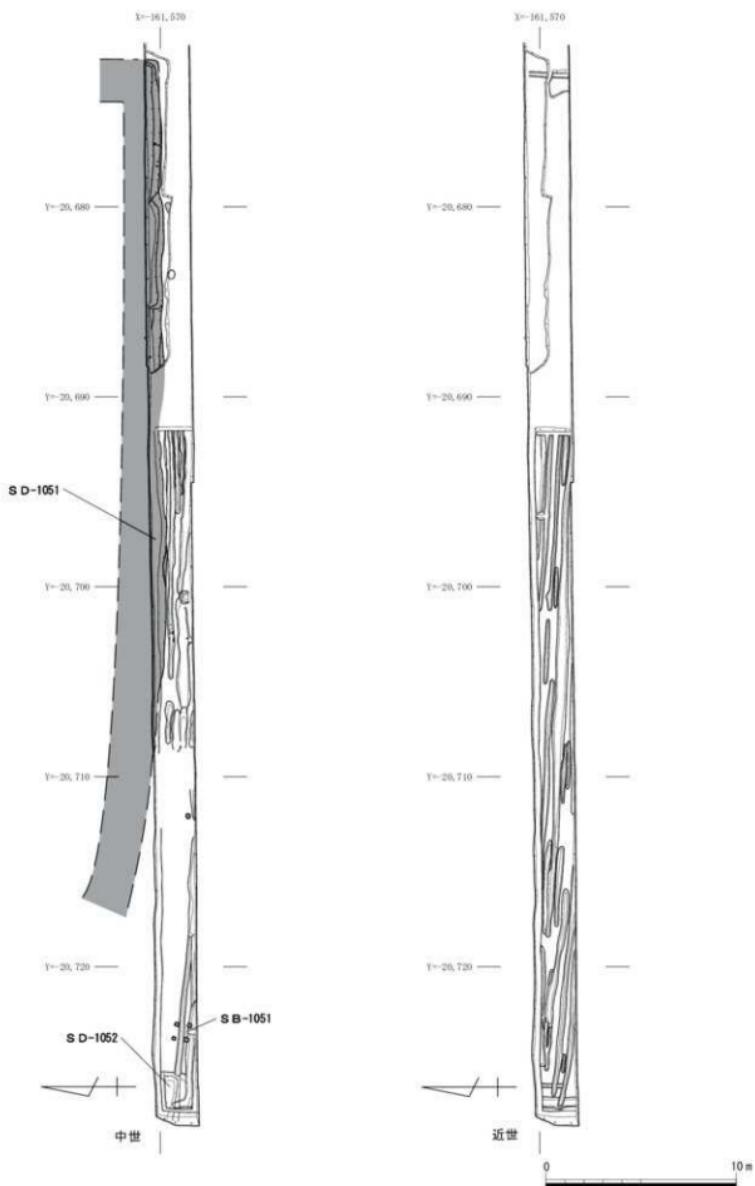
SD-1051 第1トレンチ北端の大半で確認した東西方向の大溝である。深さ0.8mを測るが、北肩が調査区外となるため溝幅は明らかでない。調査区東側で北側に屈曲するとみられる。調査区東半で羽釜を主体とする土器が多数出土した(第46図-8~20)。13は土師器の土釜で、口縁は広口状となる。2個体程度が出土しており、今回の組成では最も少ない器形である。14・15は口縁部を外面側に折り返す竈口状口縁の土師器羽釜である。今回の組成では4個体程度と少数である。最も多く出土したのが8~12の内側に折り返す竈口状口縁の土師器羽釜である。なお、本遺構では土師皿・瓦器塊がごく少数しか出土しておらず、残存が良好なものは今回図化した数点のみである(第46図-16~20)。

SD-1052 第1トレンチ西端で検出した溝状遺構である。溝は南東角付近を検出し、検出幅約2m、深さ0.3m前後を測る。東西方向の溝の南東端か、南北方向の溝の南端となる可能性がある。遺物は少なく、詳細な時期は明らかでない。

SB-1051 SD-1052の東側で柱穴4基を検出した。柱間が0.8m程度ときわめて小規模であり、



第41図 第1トレンチ弥生時代の遺構・1号墓平面図および断面図 (平面図左: S = 1/250、平面図右・断面図: S = 1/100)



第42図 第1トレンチ中・近世の遺構平面図 (S = 1/250)

南側の2基が深さ0.12m、北側の2基が深さ0.06mと穴の深さに差がある。建物跡ではない可能性が考えられる。堆積土から中世の遺構と考えられるが、詳細な時期は不明。

素掘小溝 第1トレンチ全体で東西方向の小溝群を検出した。耕作に伴うものとみられる。なお、溝の堆積土から平安時代～鎌倉時代の土器が多数出土している。溝群には大きく2時期があるとみられるが、古い溝群については先述の中世大溝に先行する鎌倉時代頃の遺構となる可能性も考えられる。

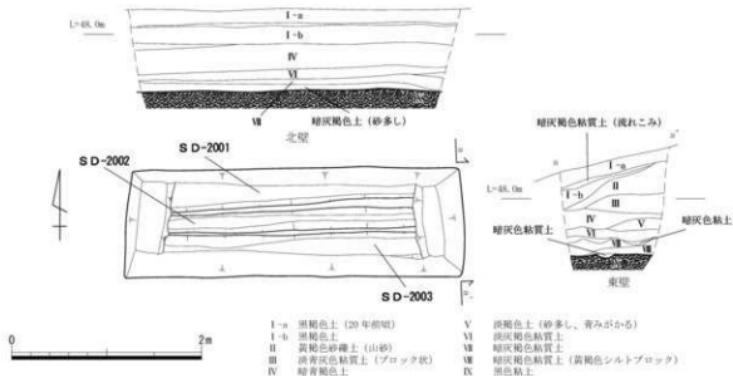
b. 第2トレンチ

中世

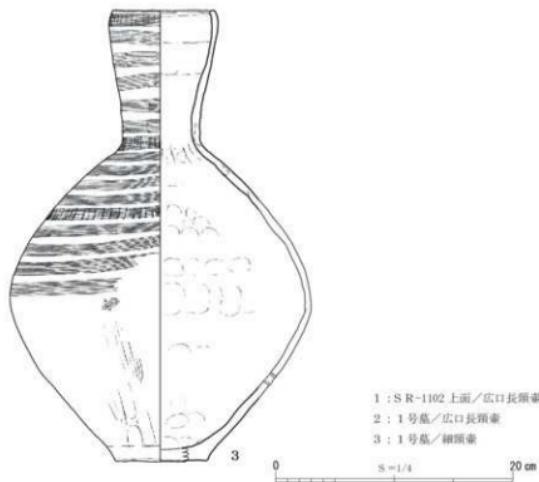
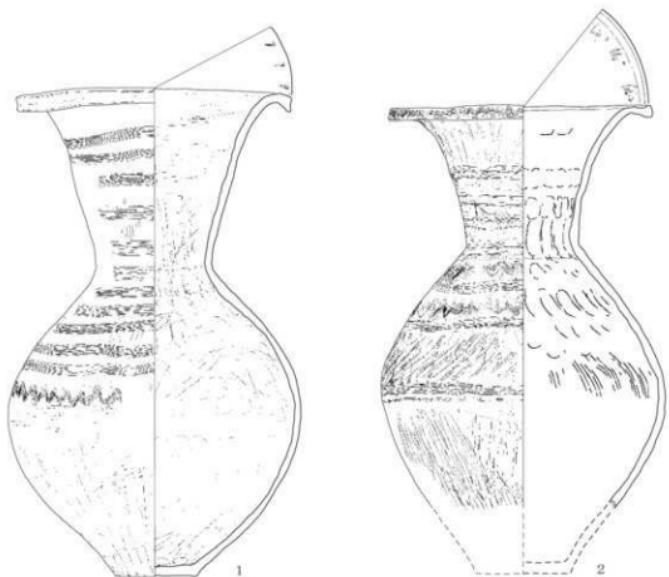
素掘小溝 第2トレンチでも東西方向を基本とする小溝群を確認している。ただし、遺物は僅少で、詳細な時期は明らかでない。第1トレンチよりも遺構検出面が深く、落ち込み状の遺構内に相当する可能性もある。

3.まとめ

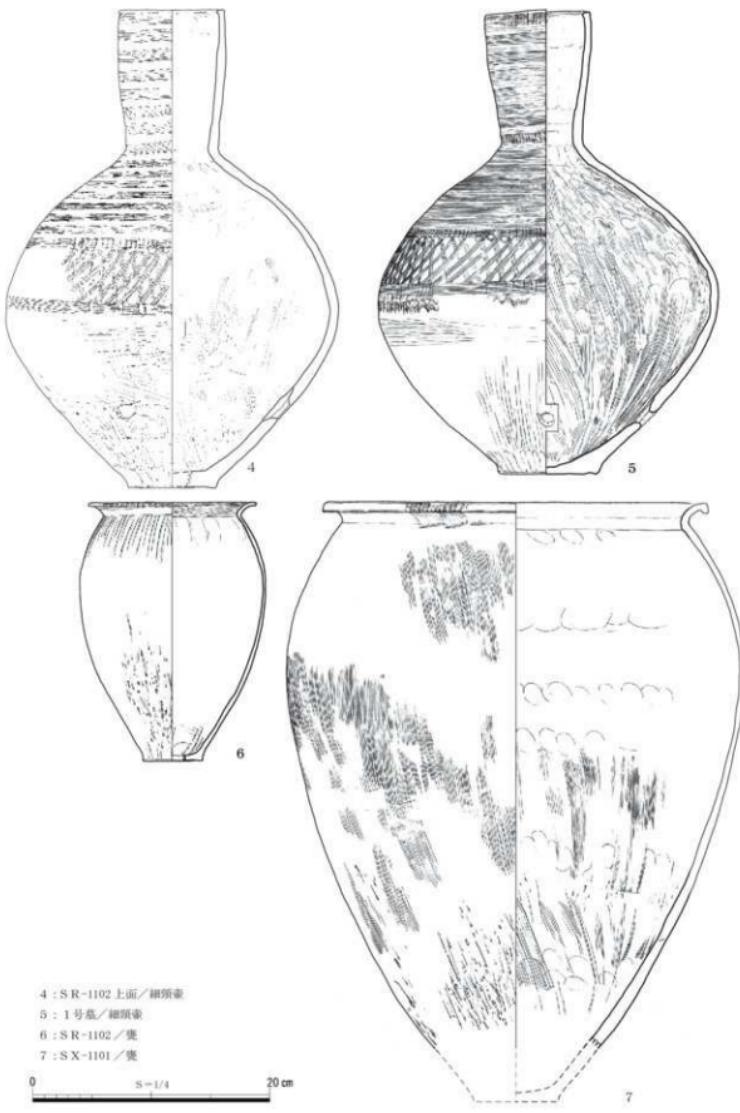
今回の調査では、佐味遺跡の北端にある中世屋敷跡と推定される鳥畠の周間に室町時代後期頃の大溝が巡っていたことを確認することができた。屋敷跡推定地の南側10mの位置に設定した今回の調査区により、延長50m程度にわたって東西方向の大溝南肩を検出することができた。この大溝は鳥畠に対応する部分よりも大きく東側に膨らんだ形で北側へと屈曲しているとみられ、東側については二重の環濠をもっていた可能性も考えられる。なお、出土した土器の大半は土師器の羽釜で、半完形の個体だけでも10点ちかくある。一方、土師皿・瓦器塊は少量で、瓦質土器も破片が数点出土したのみである。一般的な屋敷地での遺物組成としてはやや特異であり、このような遺物組成となった原因について検討する必要があるかもしれない。なお、羽釜が集中して出土した調査区東半では、溝の堆積土がブロック状の土で形成されており、人為的な埋め立ても想定される。箸尾氏配下で活動していた佐味氏の居城「佐味城」は、永禄五年（1562）に「金剛寺城」とともに松永氏の



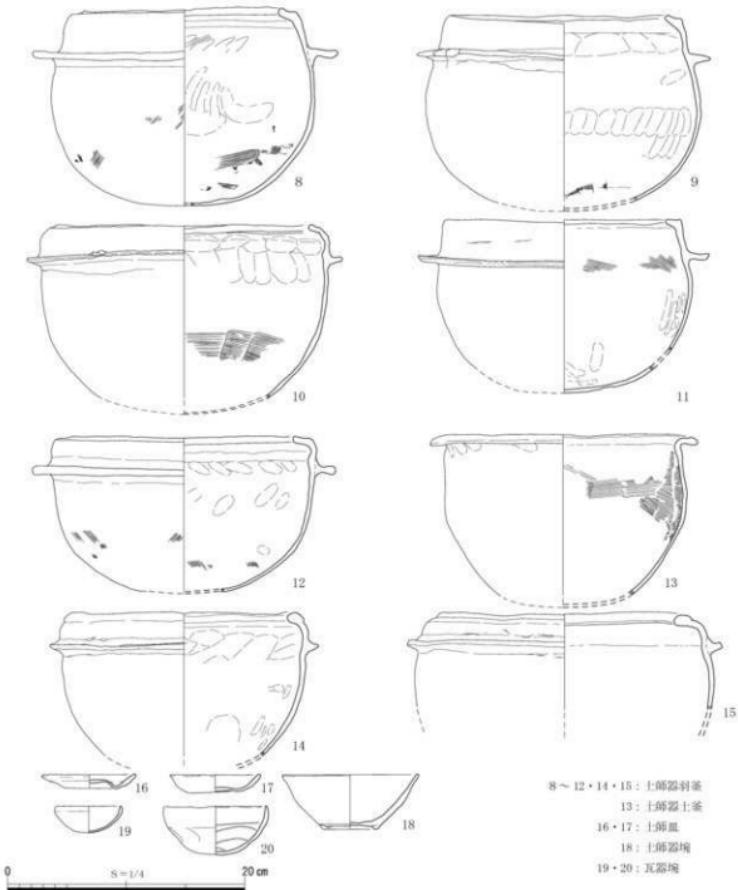
第43図 第2トレンチ遺構平面図および北・東壁断面図 (S = 1/50)



第44図 1号墓出土土器



第45図 1号墓・SR-1102・SX-1101出土土器



第46図 SD-1051出土土器

大和進入に対抗するための勢力結集に際して破壊されたという。今回検出した溝の存続期間は14世紀後半～15世紀初頭までとみられ、この話と年代的にあわない。本調査地は、佐味城そのものではなく、その分村または出城のような施設であった可能性がある。これが東佐味、そして溝田へと変遷していったのかもしれない。一方、字「中佐味」の南端で設定した第2トレンチでは顕著な遺構を検出していない。調査区が狭小であったため偶然遺構にあたらなかった可能性もあり、次年度に予定されている本格的な調査で再度検証する必要がある。

今回のもう一つの調査成果が弥生時代中期の方形周溝墓である。佐味遺跡では、これまで調査が少ないために弥生時代の状況が不明のままであった。今回の調査で弥生時代中期の方形周溝墓を検出したことで、少なくとも墓域については本調査地付近に展開していたと考えることができそうである。



2. 1号墓完掘状況（北西から）



3. 1号墓遺物出土状況（北から）



4. SD-1051遺物出土状況（南から）



5. 第2トレンチ完掘状況（西から）

10. 保津・阪手道 第2次調査

1. 遺跡・既調査の概要

保津・阪手道は、奈良盆地の中央を横断する西北西－東南東方向の古代道路跡である。文献にはみられないものの、保津・宮古遺跡や羽子田遺跡で奈良時代の道路側溝を確認したことでの存在が明らかとなった。西は田原本町大字富本付近からその痕跡が確認できるようになり、大字保津と宮古の境界を通り、大字阪手まで続いていると考えられる。さらにその南東側にある村屋神社付近までその痕跡とみられる地割りが残る。宮古付近で筋道と交わり、阪手の西で下ツ道と交差し、さらに村屋神社で中ツ道と交差する。壬申の乱では上ツ道沿いの箸幕付近から村屋神社付近まで大海人皇子側の軍が移動していることから、上ツ道とも直結していた可能性がある。

今回の調査は、大字宮古地内での下水道工事に伴って実施した。平成9年頃に建設された道路であるが、当時は遺跡外となっていたこともあり発掘調査での対応はおこなっていなかった。今回の下水道工事については新たに発見された「保津・阪手道」に該当する場所での工事となるため、人坑部分について発掘調査で対応した。

2. 調査の成果

(1) 層序

調査地の現状は道路である。東西110mの区間に設置された3基の人坑について調査をおこなったため、地表面の標高を含めて層序が異なる。ここでは、中央の第2トレンチの層序を示す。

I : アスファルト〔検出標高46.4m、以下数値のみ記す〕、II : 黄褐色砂礫土〔46.3m〕、II (下) : 灰黒色土〔46.15m〕、III : 淡茶灰色土〔46.0m〕、2-1 : 灰青色土〔45.6m〕、2-2 : 灰青色粘土〔45.3m〕、IV : 褐色粗砂〔45.0m〕、VI : 黄灰色土〔44.9m〕、VII : 灰色粘土〔44.8m〕

第I～IV層は平成9年頃の道路工事に伴う造成土である。第2・3トレンチでは第V・VI層（近現代水路層）がみられるが、第1トレンチでは灰褐色粘質土の中世遺物包含層が拡がっていた。中世の遺構は第V層上面が検出面となる。調査では、第VI層までを重機で除去し、以下を人力で調査した。

(2) 遺構と遺物

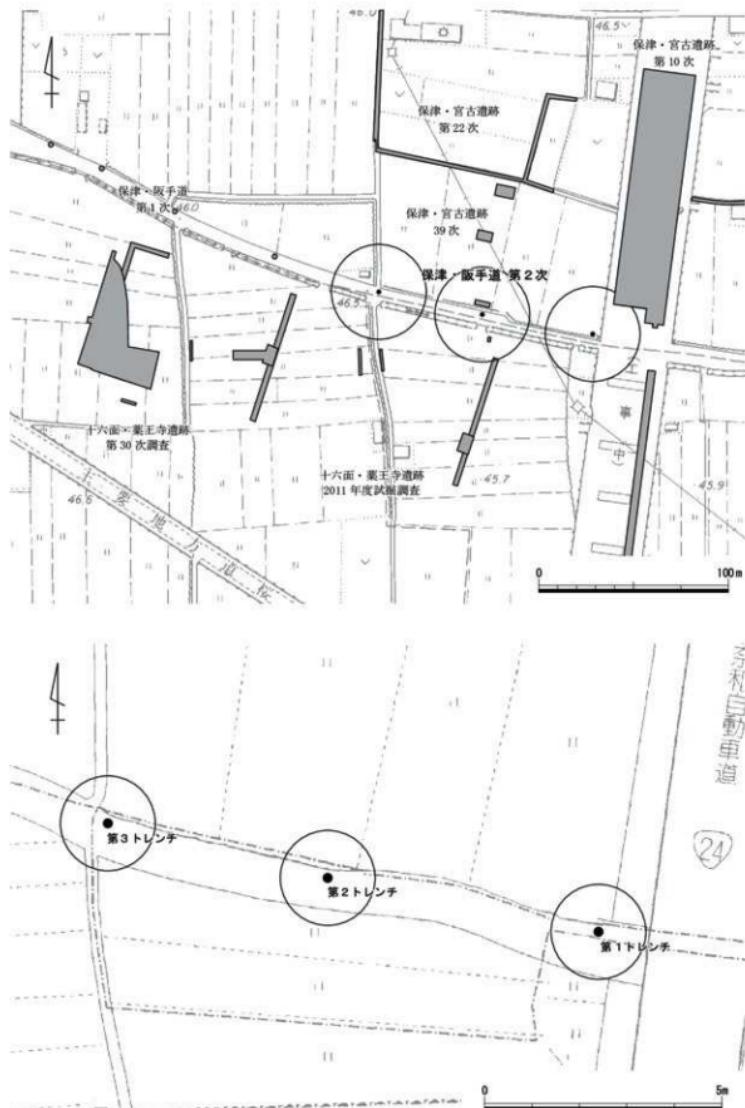
中世

S D - 1051 第1トレンチで検出した、西北西－東南東方向の溝である。幅0.9m、深さ0.2mを測る。顯著な遺物は出土していないが、中世素掘小溝を切ることから、中世後期頃の遺構である可能性が考えられる。

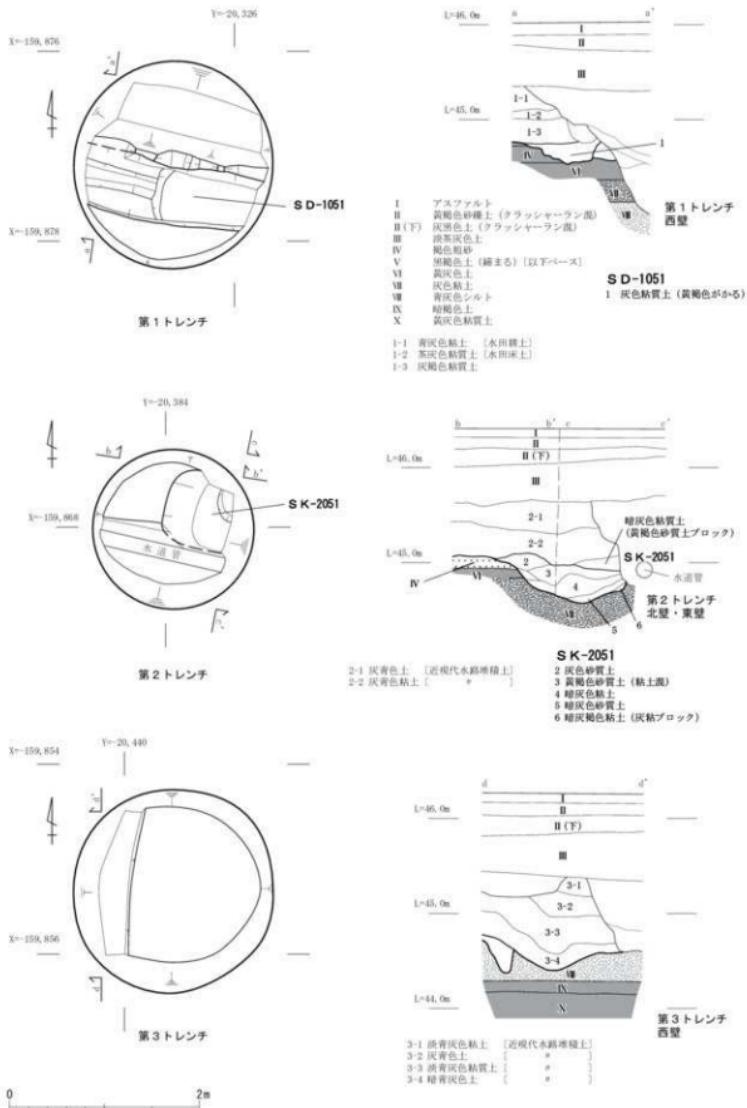
S K - 2051 第2トレンチで検出した、直径0.9m前後、深さ0.5mの土坑である。遺物は僅少で、詳細な時期は明らかでない。中世頃の遺構とみられる。

近現代

S D - 2001・3001 第2・3トレンチで検出した近現代の溝状堆積である。調査区外に拡がるため、溝幅は明らかでない。第3トレンチでの深さは0.9mを測る。出土遺物は僅少であり、詳細な時期は明らかでない。



第47図 調査地位置図（上：S = 1/2,500、下：S = 1/1,000）



第48図 遺構平面図および断面図 (S = 1/50)

3. まとめ

今回の調査では、中世頃の土坑1基、溝1条を検出した。土坑については、北側隣接地で実施した保津・宮古遺跡第39次調査でも平安時代前後の土坑を検出しており、調査地周辺には平安時代～鎌倉時代の集落遺構が散漫ながら分布している状況と考えられる。また、西北西～東南東方向の溝は、保津・阪手道と主軸が一致している。この古代道路跡を踏襲した地割りに沿って掘削された遺構であり、里道側溝のような性格が想定される。ただし、調査区が狹小なこともあり、今回の調査成果のみで断定することは難しい。



1. 調査地全景（西から）



2. 第1トレーニチ全景（東から）



3. 第2トレーニチ全景（西から）



4. 第3トレーニチ全景（東から）

11. 筋違道 第3次調査

1. 遺跡・既調査の概要

筋違道は、奈良盆地中央西の斑鳩から南端の飛鳥までを直線的に結ぶ古代道路跡である。特に大字宮古付近で現道路としてその痕跡が明瞭に残るほか、断片的な地割りとして薬王寺・新木・多等で痕跡を確認することができる。また、発掘調査では保津・宮古遺跡第14・19次調査や多新堂遺跡第3～5次調査等で側溝を確認しており、飛鳥時代頃には存在していたこと、部分的には中世にも溝が機能していたことが判明している。

薬王寺集落付近では、薬王寺東遺跡第1次（十六面・薬王寺遺跡第7次）調査で西側溝とみられる河川状の遺構を検出しているほか、第2次調査で東側溝の可能性がある不明瞭な浅い落ちを確認している。また、第1次調査地の北側でも試掘調査で西側溝とみられる溝を確認している。

今回の調査は、薬王寺東遺跡第1次調査により宅地開発された土地での個人住宅の建て替えに伴って実施した。

2. 調査の成果

(1) 層序

I : 淡茶褐色土〔検出標高48.6m、以下数値のみ記す〕、II' : 暗灰茶色土〔47.9m〕、II''(下) : 暗緑灰色土〔47.8m〕、IV : 茶灰土〔47.7m〕、V : 灰色粘質土〔47.6m〕、VI : 黄褐色土〔47.55m〕、VII : 暗褐色土〔47.5m〕、VIII : 黄灰色土〔44.4m〕、IX : 灰色シルト〔47.0m〕

調査地は、薬王寺東遺跡第1次調査後に約0.7～0.9mの造成がおこなわれた結果、宅地となっている。第II～IV層が旧水田耕土と床土層、第V層は中世遺物包含層、第VI層はベースである。古代～中世の遺構は第VI層上面で検出した。調査では、第V層までを重機で除去し、以下を人力で調査した。

(2) 遺構と遺物

古代?

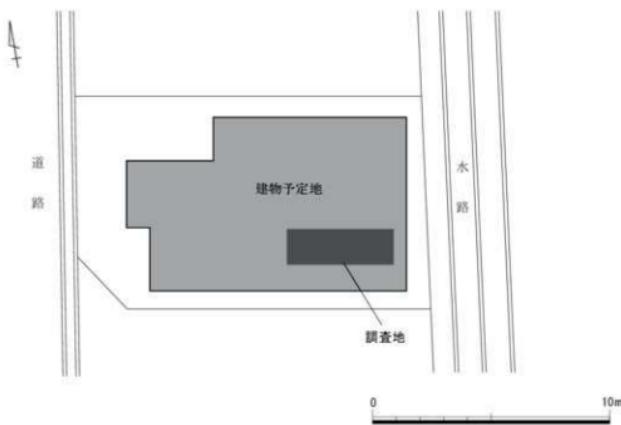
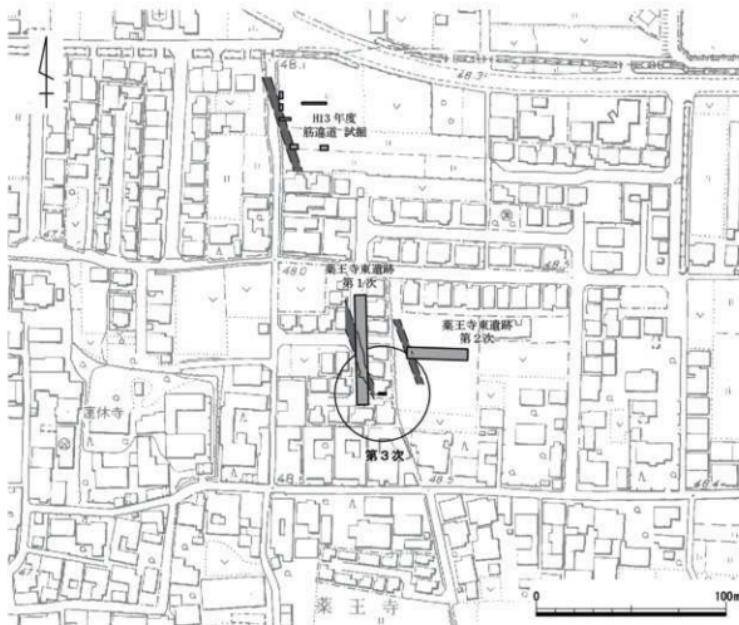
S D -101　調査区西半で検出した、北北西～南南東方向の溝である。東肩のみの検出であり、幅は不明。緩やかに西側へと落ち込む。調査区内での最大深さ0.3m。中世素掘小溝群に切られる。本遺構は深さも浅く、粘質土堆積である点が薬王寺東遺跡第1次調査での筋違道西側溝と異なるが、位置関係からすると本遺構も筋違道西側溝である可能性が考えられる。遺物が出土していないため、詳細な時期は不明。

中世

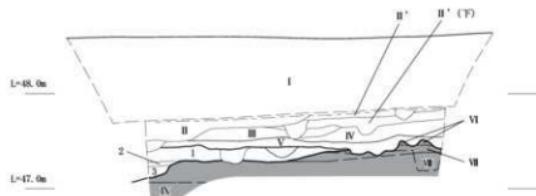
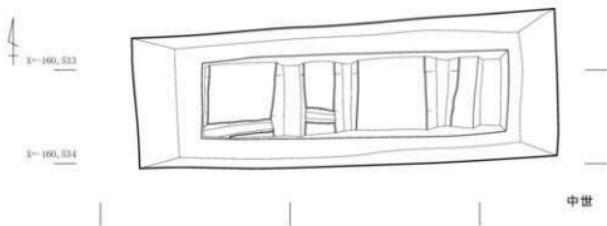
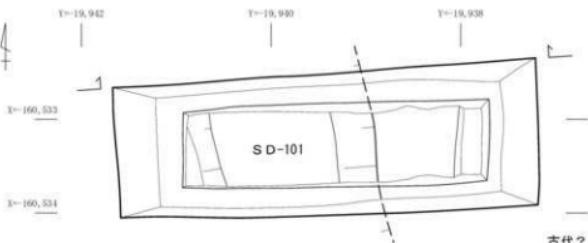
素掘小溝　南北方向4条、東西方向1条の計5条を確認した。幅0.3m前後、深さ0.1～0.15mを測る。遺物が少ないため詳細な時期は明らかでない。中世頃の遺構とみられる。

3.まとめ

今回の調査では、筋違道西側溝の可能性がある溝の肩を検出した。ただし、過去の付近の調査成果と比較すると堆積土が異なるため、粗砂堆積の河川状堆積と時期差を想定する必要がある。筋



第49図 調査位置図（上：S = 1/2,500、下：S = 1/20）



I	淡茶褐色土	V	黄褐色土 [以下シルト]	SD-101
II	青灰色土 [II脚上]	VI	暗褐色土	1 带褐色色粘質土
III	暗灰茶色土	VII	黄褐色土	2 黄褐色シルト
IV	灰褐色土	IX	灰色シルト	3 灰青色粘質土 (炭斑)
V	灰褐色土 [旧床土]			
VI	灰褐色土 [中层遺物包含層]			



第50図 遺構平面図および北壁断面図 (S = 1/50)

違道は相当の期間維持管理されたというよりも、側溝の一部が後世に用水路などの目的で転用された可能性があり、これに伴って溝の位置が多少移動することもあっただろう。また、道路部分を徐々に浸食して耕地が拡がったとみられるため、本来道路面部分だった場所にも道路側溝に併行して小溝を掘削することもあった可能性がある。いずれにしても、今回の調査成果で筋違道の方位に一致する溝状遺構の肩を検出したことで、筋違道についての情報を一つ追加することができた。



1. 調査区全景（東から）



2. SD-101完掘状況（南から）

12. 寺内町遺跡 第14・15次調査

1. 遺跡・既調査の概要

寺内町遺跡は、奈良盆地の中央、標高49m前後の沖積地に立地する。豊臣秀吉から田原本の地を与えられた平野権平長泰は、自身は領地入りせずに浄土真宗教行寺に寺内町を築かせることで領地の振興を図った。しかし、2代長勝が領地の直接經營に乗り出した際に支配権を巡って教行寺と対立し、教行寺は箸尾に退転することとなった。教行寺の跡地には浄土真宗淨照寺と平野氏の菩提寺となった本誓寺が置かれた。寺内町の北東部に陣屋がおかれ、教行寺の建設した町場は平野氏の陣屋町として引き継がれたが、地城の商工業の中心地として栄えることとなった。

寺内町の南西部には、平安時代頃に流行した祇園信仰により勧進されたとみられる神社があり、これが平野氏の出身地にある三河の津島神社と同じ祭神である縁から平野氏の崇敬を得た。近世を通じて祇園社と呼ばれ、明治の神仏分離を機に「津島神社」として改名されたのはこの縁による。津島神社の社伝によると、当初の祇園社に加え、近世の間に2柱の祭神が順次追加され、現在は3柱の祭神を祀る本殿3棟が高さ3m前後の基壇上に置かれている。

津島神社境内では、平成20年に拝殿の改修工事にともなって発掘調査を実施しており、17世紀代には2柱に対応する拝殿だったものが、18世紀代には3柱に対応する形で南側に拡幅され、18世紀末および19世紀中頃にも基壇の大規模な改修がおこなわれたことが判明している。

第14次調査は、津島神社の本殿基壇上で実施した。本殿の基礎改修工事が計画され、これに伴って津島神社側から本殿基壇の発掘調査をおこなってほしい旨の依頼があった。工事自体は明治20年頃に建設された本殿をジャッキアップし、基礎部分を改修する工法であるため、本殿基礎そのものを発掘調査することは困難と考えられた。従って、本殿基壇の2段目にあたる平坦部で2×1mの調査区を設定し、基壇の築造時期と構造について確認するための調査を実施した。また、基壇上の工事時にも隨時立会調査を実施した。

また、第15次調査は、社叢となっている津島神社本殿西側の石垣の補強工事に伴って実施した。これは盛土部分を囲む石垣が樹木の生長により傷んでいることをうけて石垣の補強がおこなわれることとなったためである。社叢北側の東西12.5m、社叢南側の東西30mを石垣に沿って開削し、コンクリート擁壁を立ち上げて石垣を埋め込むという内容の工事であり、掘削が近世末の遺構面を大きく削る設計であるため発掘調査で対応することとなった。

2. 調査の成果

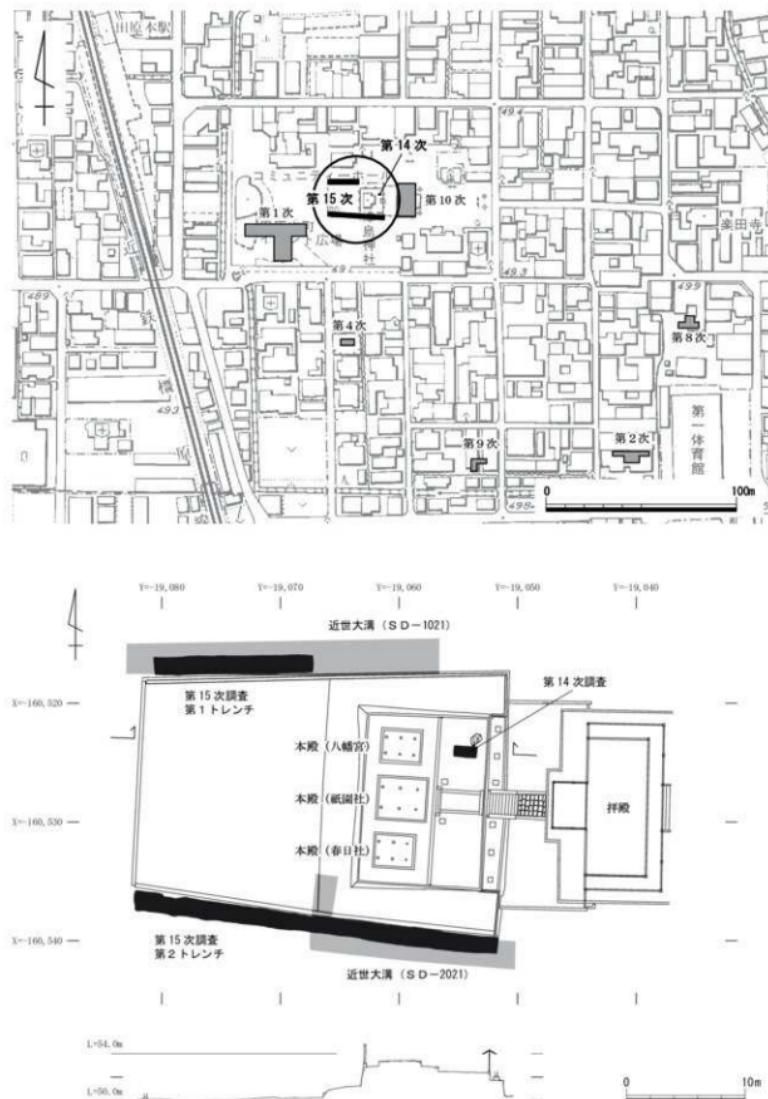
(1) 第14次調査

a. 層序

調査地は近世頃とみられる神社本殿基壇の盛土上である。平坦部との比高差は2.5mに及ぶ。

I：黒褐色砂礫土〔検出標高52.4m、以下数値のみ記す〕、II：暗茶灰色土〔52.35m〕、III：淡褐色粗砂〔52.15m〕、IV：淡褐色土〔51.85m〕、V：淡褐色砂質土〔51.6m〕、VI：淡褐色砂質土〔51.5m〕

第II層は近代整地層、第III層以下は近世の造成層である。調査はすべて人力による手掘りで実施した。調査区内西端で1段階古い基壇造成土（第III層）を確認し、これを肩とする幕末～明治時代

第51図 調査位置図および本殿断面図（上： $S = 1/2,500$ 、下・断面図： $S = 1/400$ ）

頃の造成層を掘削することで基壇の築造過程の調査をおこなった。

b. 遺構と遺物

近世

S X-01 本殿基壇を構成する盛土を S X-01とする。掘削の結果、近世の本殿基壇を幕末頃に2.6m前後東側へ拡張したことが判明した。近世基壇の石垣に使用されていたとみられる石（裏込め石か？）が一部残存していた。ただし、今回の調査範囲では、本殿の壝で囲まれた部分の拡張を確認したのみであり、灯籠等が並ぶ壝の中段部分がどのような形であったのかは不明のままである。

S K-01 雷神が落ちたという伝承をもつ立石が本殿敷地内にあり、その埋設状況を確認した。石は全長約1.2mで、地上部分が0.8m程度露出し、深さ約0.4m程度の根入れで立てられていた。S K-01は立石設置のために掘削された穴で、直径0.8m前後、深さ0.4m前後を測る。礎石・栗石等はみられない。顯著な遺物は出土していないため、詳細な時期は不明であるが、幕末の造成層上から掘削されているため、現状は近代になってからの設置と考えられる。なお、立石は北東方向に大きく傾いており、添え木により安定している状態である。

c. 第14次調査立会部分

本殿基壇上において、既存の延べ石を置き直す工事がおこなわれた。この部分の工事については発掘調査が困難な工事内容であったため立会で対応したが、深さ0.8mの掘削となつたため、基壇上部の横断面が確認できる状態となった。工事立会の結果、基壇築造が大きく3段階に分かれることが判明し、その図化をおこなった。当初中央部分の黄褐色粘土部分の築造がおこなわれ、次いで北側の淡褐色土部分の造成により北側へ拡大され、また南側の暗褐色粗砂部分の造成により南側への拡張がなされたとみられる。

(2) 第15次調査

a. 層序

調査地の現状は神社境内地および公園である。過去の公園整備事業などにより整地されている。調査は、北側の東西12.5m、幅1.5mの調査区を第1トレンチとし、南側の東西30m、幅1.5mの調査区を第2トレンチとして実施した。ここでは、第1トレンチ西端の層序を示す。

I：灰色砂礫土〔検出標高49.9m、以下数値のみ記す〕、II：灰色砂礫土〔漆喰混〕〔49.8m〕、III：暗褐色土〔砂混〕〔49.7m〕、IV：茶灰色土〔49.6m〕、V：暗褐色土〔49.3m〕、VI：明褐色粗砂〔49.15m〕、VII：淡灰青色シルト〔49.0m〕

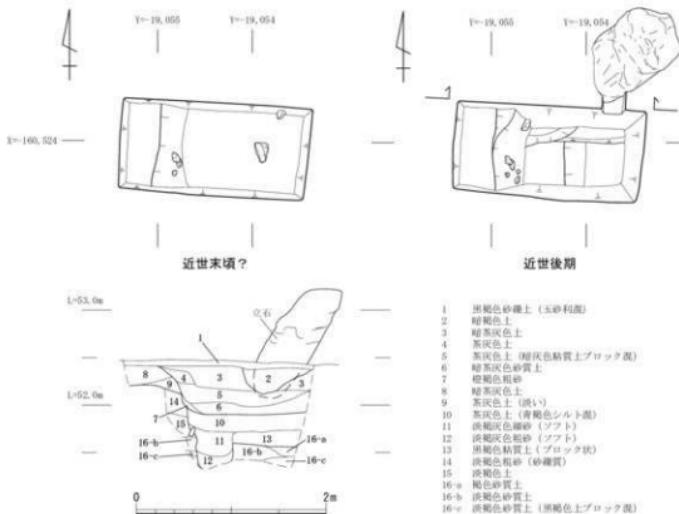
第III～V層は近世～近代の整地層、第VI層以下はベースである。調査では、第IV層までを重機により除去し、第V層上面で近世～近代の遺構検出をおこなった。

b. 遺構と遺物

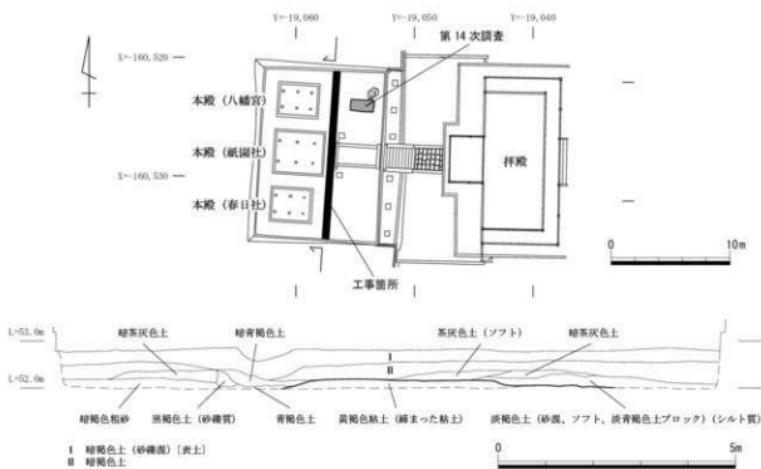
ア. 第1トレンチ

近世後期

S D-1021 第1トレンチ全体が東西方向の近世大溝内であった。南肩のみの検出であり、溝幅は明らかでない。深さ0.8m。上層堆積には瓦片が多数含まれ、棟瓦を含むことから幕末前後に最終的な埋め立てがおこなわれた可能性が考えられる。一方、下層堆積はベースの黄褐色粘土ブロック



第52図 第14次調査 遺構平面図および北壁断面図 (S = 1/50)



第53図 工事立会 工事位置図および西壁断面図 (上: S = 1/400、下: S = 1/100)

クが多く混入し、土器量自体も少ない。近世後半頃の掘削である可能性があるが、当初の掘削時期は不明である。

近世末～近代

S K - 1001・1002 第1トレンチ東半で検出した浅い土坑状の遺構である。後述するS K - 2002・2003と同様に、近世大溝の埋没後に形成された窪みのような性格の遺構である可能性がある。遺物は近世末頃のものが中心であるが、近代頃の遺物を含む。

イ、第2トレンチ

中世末

S D - 2051 第2トレンチ中央西で検出した、南北方向の溝状遺構である。幅3.8m前後、深さ0.4m前後を測る。中世後期の土器等が出土したが、土器量は僅少である。

近世後期

S D - 2021 第2トレンチ東半で検出した、東西方向の大溝である。深さ0.8～1mを測る。北肩のみの検出であり、溝幅は明らかでない。上層から多数の瓦・近世陶磁器が出土した。特に調査区東端の上層からは完形の土師皿が多数出土しており、その大半は灯明皿として使われたものであった。また、中層から出土した瓦には棟瓦が多く、19世紀頃に埋没した可能性がある。なお、本殿基壇の西端付近で本溝は北側に屈曲している。西端より北へと伸びる部分の溝幅は1.6m、深さ0.6mを測る。下層からも近世後期～末の陶磁器・土師器等が多数出土しており、近世後期を中心とする時期の掘削である可能性が考えられる。

近世末～近代

S K - 2001 第2トレンチ東端で検出した土坑である。幅2m前後、深さ0.4m前後を測るが、調査区外に拡がるため、詳細な規模は明らかでない。S D - 2021の最上層堆積である可能性があり、同遺構と同じく灯明皿が多数出土している。

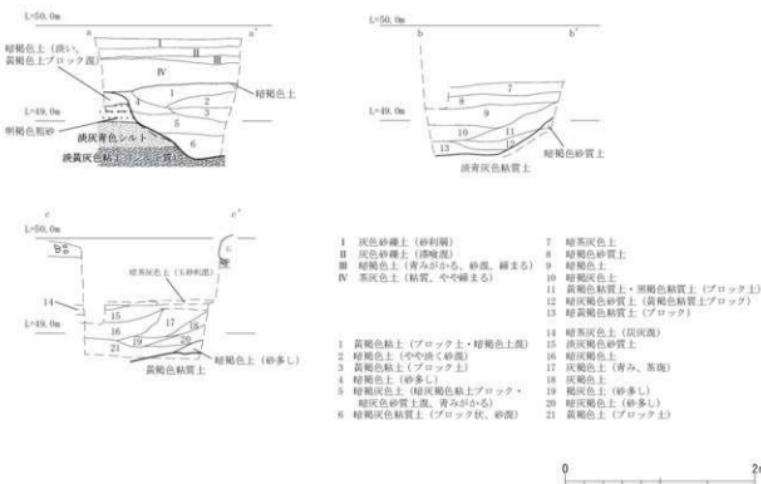
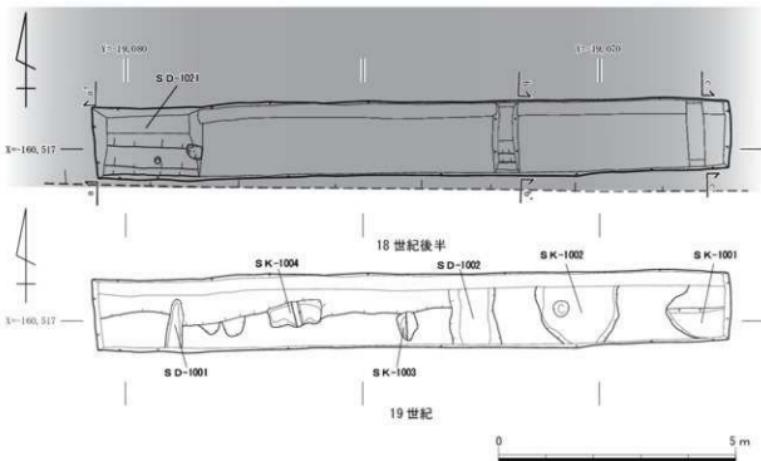
S K - 2002・2003 第2トレンチ東半で検出した土坑状の遺構である。近代頃の瓦や陶磁器・ガラス容器等を含む。近世大溝 S D - 2021の最上層堆積である可能性もある。

S K - 2004・2007 第2トレンチ西半で検出した浅い楕円形の土坑である。長軸1.4m前後、深さ0.1m前後を測る。近代頃の遺構とみられるが、詳細な時期と性格については明らかでない。炭灰混じりの堆積土で、近世～近代頃の陶磁器の小片が出土している。

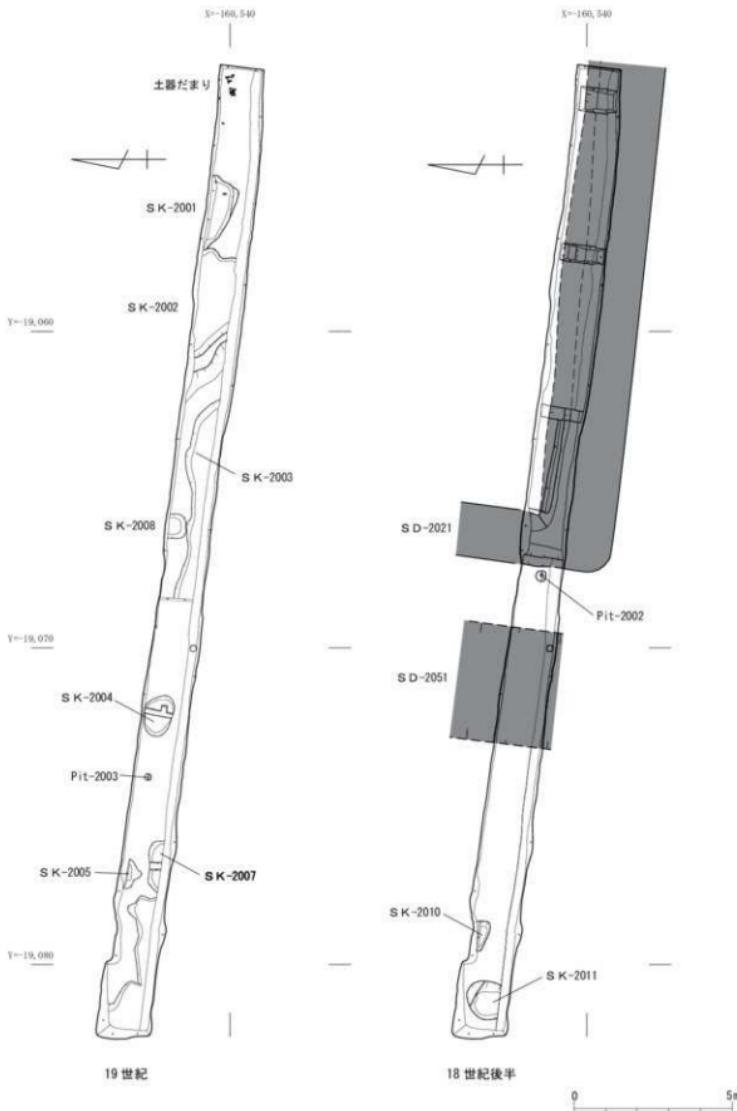
S K - 2005 第2トレンチ西端で検出した土坑である。北半が調査区外であるため正確な規模は明らかでないが、東西0.9m、深さ0.3m前後を測る。近世末～近代頃の遺構と考えられる。遺物は少ないが、近世～近代の陶磁器等が出土している。

本調査で出土した遺物は土坑S K - 2003やトレンチ南側の排水溝のものを含むが、大半は溝S D - 2021から出土している（第57図）。

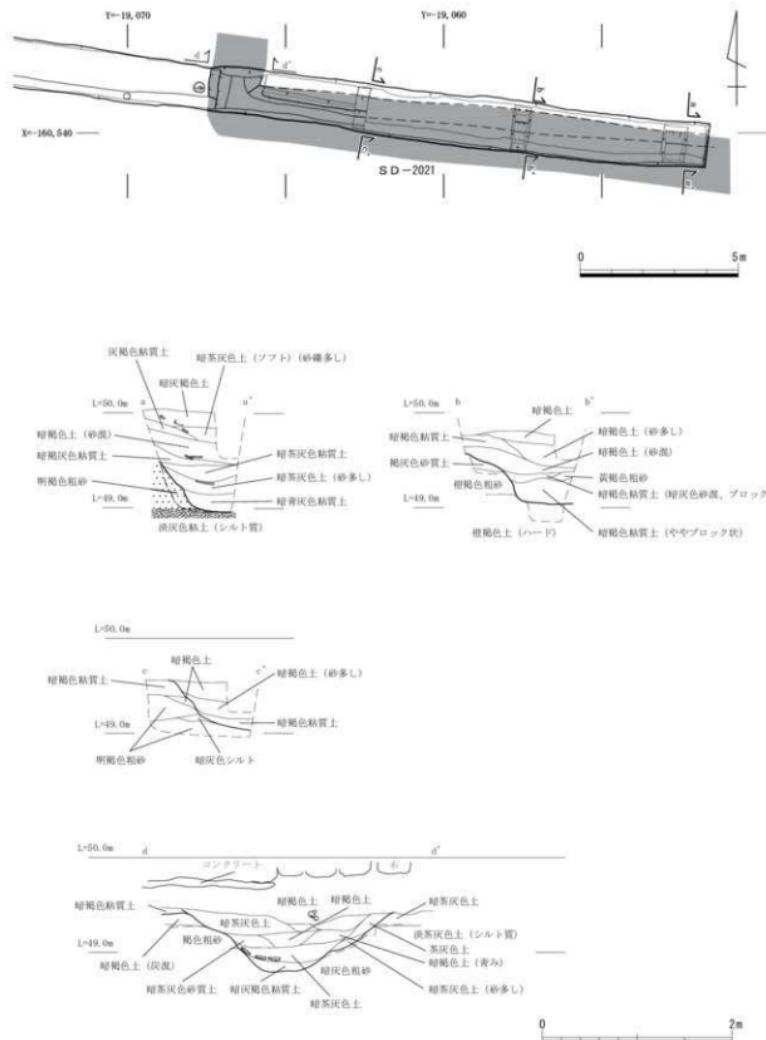
溝S D - 2021では土師皿が多数出土しており、完形品は約30個に及ぶ。灯明皿として使用されたと考えられ、このうち灯心跡が明瞭な6点の図化をおこなった（第57図-1～6）。第57図-7～10は施釉陶器の火道具で、7・8が上皿、9・10が下皿（受皿）である。第57図-11は柿釉を施した陶器の小皿で、灯心跡は残っていないが、同様の小皿は灯明皿として使用されている。第57図-12は二枚貝を模した白磁の紅皿で、灯明皿に転用されたため口縁部に灯心跡が残っている。



第54図 第15次調査第1トレント構造平面図および東・西壁断面図（上：S=1/100、下：S=1/50）



第55図 第15次調査第2トレンチ遺構平面図 (S = 1/150)



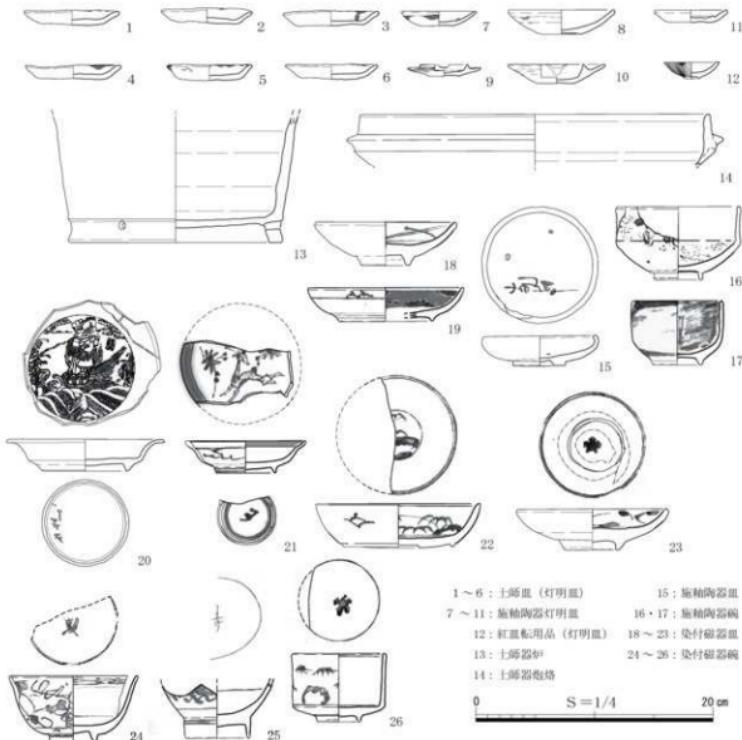
第56図 第15次調査 SD-2021平面図および断面図 (平面図: S = 1/150、断面図: S = 1/50)

第57図-13・14は土師器の炉・炮烙、15～17は施釉陶器の碗・皿である。土師器炉(13)と施釉陶器碗(16)は茶道具と思われる。第57図-18～26は国産染付磁器の皿・碗である。ガラス接ぎによる修復(20)、蛇の目四型高台(22)、コンニャク印判による五弁花(23・26)、広東碗(25)など、幕末期の特徴が多くみられた。

3.まとめ

第14次調査では、津島神社本殿基壇が現状の規模になる過程の一部を解明することができた。また、本殿基壇北東に立てられた雷神が落ちたとされる立石についても設置状況を確認することができた。

基壇は、出土遺物などから幕末頃に大きく拡張される形で改修されたことを確認した。基壇の階段脇の石に彫られた年号から、安政年間に現状の姿となった可能性があり、基壇の大規模改修が安



第57図 出土遺物

政年間に遡るものであった可能性が考えられる。なお、この本殿基壇は古墳を利用してつくられた可能性も指摘されているが、今回の調査では古墳築造時にみられる版築の痕跡までは確認することができなかった。基壇周縁部などでの今後の調査により解明されることが期待される。

なお、第14次調査に付随して本殿東側での延べ石再設置工事の立会をおこなった。本殿側からみて深さ0.8m程の掘削がおこなわれたため、本殿基壇の層序を確認することができた。社伝では、祇園社に加えて八幡社が北側に勧進され、さらに春日社が南側に加わったとされるが、これを土層の堆積状況から追認することができた。

第15次調査では、津島神社本殿基壇の周囲を大溝で囲んでいたことが判明した。また、大溝が最終的に埋没した時期は近代になるとみられることも判明した。

本殿南側の近世大溝からは多量の日常生活に用いられる土器が出土している一方で、北側の大溝は瓦は多いものの土器の量がやや少ないようである。また、南側の大溝の調査区東端では完形の土師皿が多数出土しており、神社での祈祷や祭祀で使われた土師皿が繰り返し捨てられる場所となっていた可能性がある。なお、土師皿には煤痕をもつものが多く、灯明皿として用いられたのであろう。陶器製の灯火具も付近でまとまって出土しており、社務所と本殿を結ぶ最短ルート上で、使用済の灯明皿が日常的に破棄されていたのかもしれない。



1. 第14次調査完掘状況（東から）



2. 第14次調査北壁上層堆積状況（南から）



3. 第15次調査第1トレンチS D-2021近景（東から）



4. 第15次調査第1トレンチ19世紀の遺構（西から）



5. 第15次調査第2トレンチ18世紀後半の遺構（東から）



6. 第15次調査第2トレンチ19世紀の遺構（東から）

13. 十六面・薬王寺遺跡 試掘調査 (S-201301~201303)

1. 遺跡・既調査の概要

十六面・薬王寺遺跡は、標高48m前後の沖積地に立地する、弥生時代～中世の複合遺跡である。遺跡北西部には弥生時代末～古墳時代中期頃の集落が拡がり、遺跡南部には弥生時代末～古墳時代中期の集落と墓が拡がる。また、遺跡中央には中世の環濠をもつ屋敷地が確認されており、保津氏居館跡の推定地となっている。

今回、十六面・薬王寺遺跡西端での開発行為についての協議が相次いで3件もたらされた。十六面・薬王寺遺跡北西部では京奈和道田原本IC設置を視野に開発が近年相次いでおり、実際に第30・31次調査では重要な成果が得られているが、今回の土地は遺跡範囲の境界付近であり、過去の付近の調査では顕著な遺構を確認していない。このことから、試掘調査により地下遺構の分布状況を確認した上で対応を検討することとなった。3件の試掘調査では概ね同様の結果が得られたため、ここでは3件の成果をまとめて報告する。

2. 調査の成果

(1) 層序

3ヶ所の調査地はいずれも現状が水田である。ここではS-201301試掘調査第2トレンチにおける層序を示す。

I：暗灰色土〔検出標高45.4m、以下数値のみ記す〕、II：暗青灰色粘質土〔45.25m〕、III：茶灰色粘質土〔45.2m〕、IV：灰色粘土〔45.0m〕、V：暗灰色粘土〔44.85m〕、VI：暗褐色土〔44.7m〕、VII：灰色粘土〔44.5m〕、VIII：暗褐色粘土〔44.4m〕

S-201301試掘調査地は全体が落ち込み状の堆積だった可能性がある。第VI層上面が中世までの遺構検出面となる。一方、S-201302・S-201303試掘調査地では、いずれも第VII層相当の高さで安定した黒褐色土と黄褐色シルトのベース層の拡がりを確認している。

いずれの調査区も、深さ0.6～0.7mまでを重機で掘削して遺構検出をおこなった。

(2) 遺構と遺物

a. S-201301試掘調査

中世

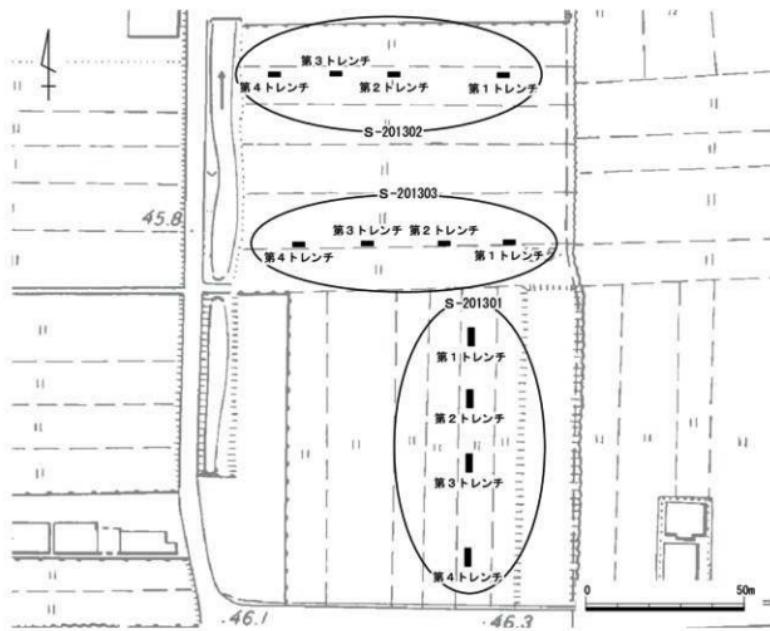
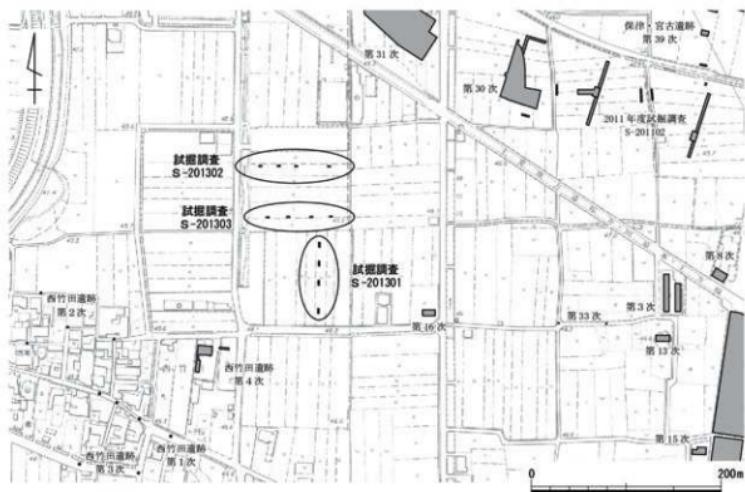
素掘小溝群 S-201301試掘調査では、北半の2調査区で東西・南北の小溝群を検出しているが、南半の2調査区では南北方向の小溝群のみを検出した。

b. S-201302試掘調査

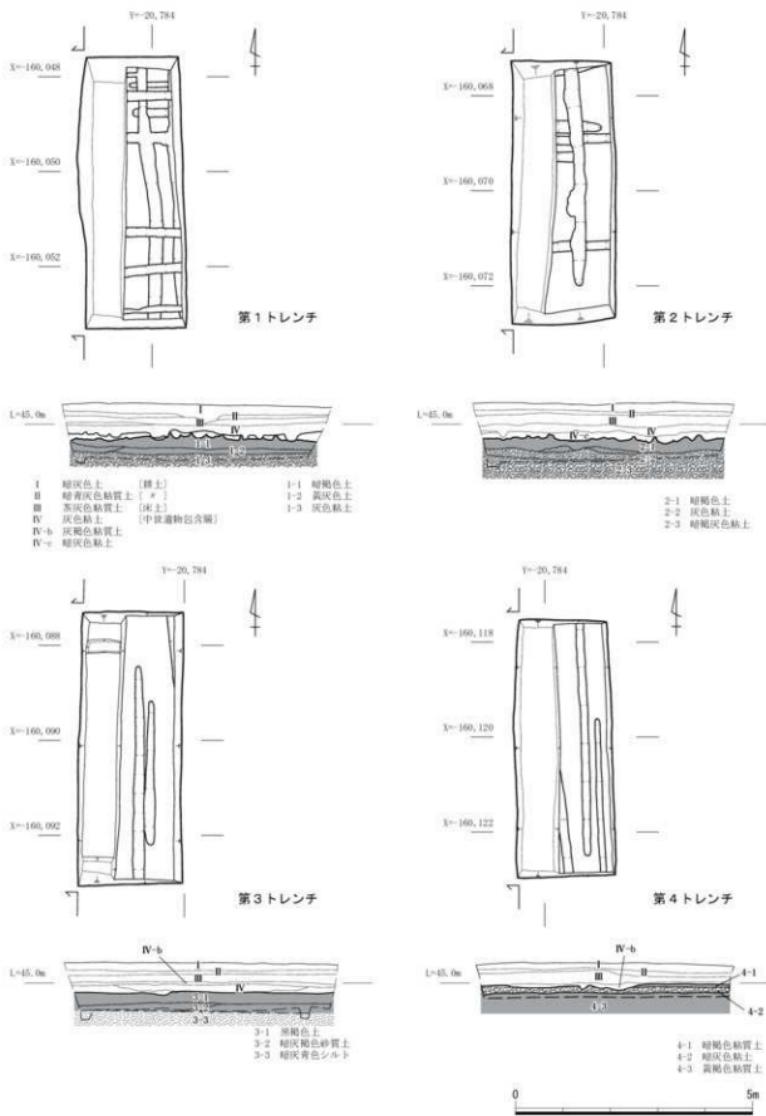
古代

SD-2051 S-201302試掘調査の第2トレンチでは、西北西～東南東方向の小溝を1条検出した。周囲で古代頃の遺構として確認される地割りに沿った耕作関連の遺構とみられる。遺物はほとんど出土していない。

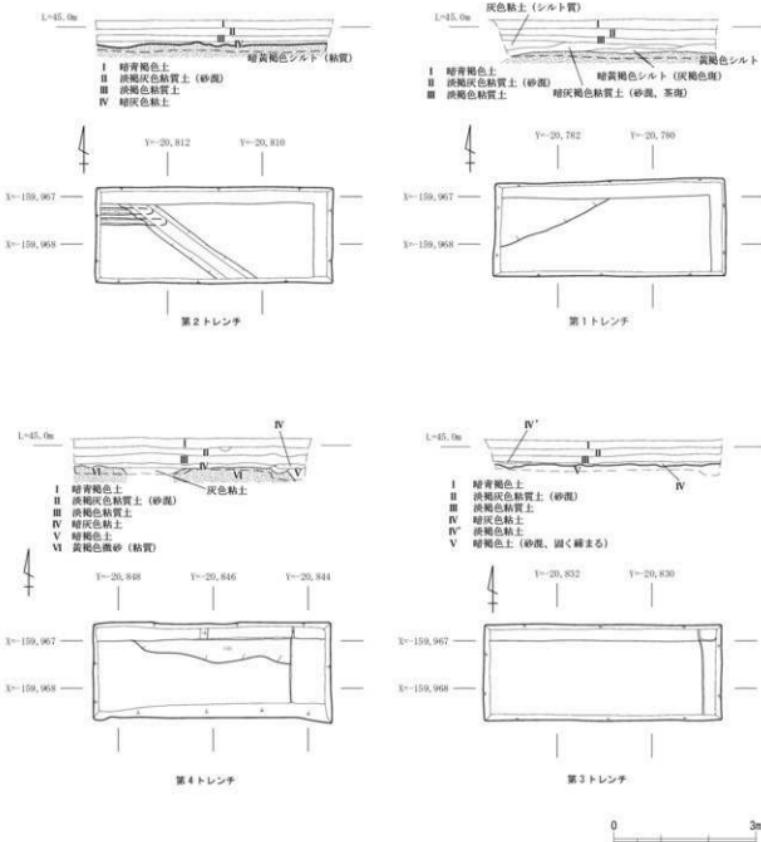
素掘小溝群 S-201302試掘調査では表土掘削をやや深めにおこなったため、東西方向の小溝2条を第2トレンチで検出している程度である。



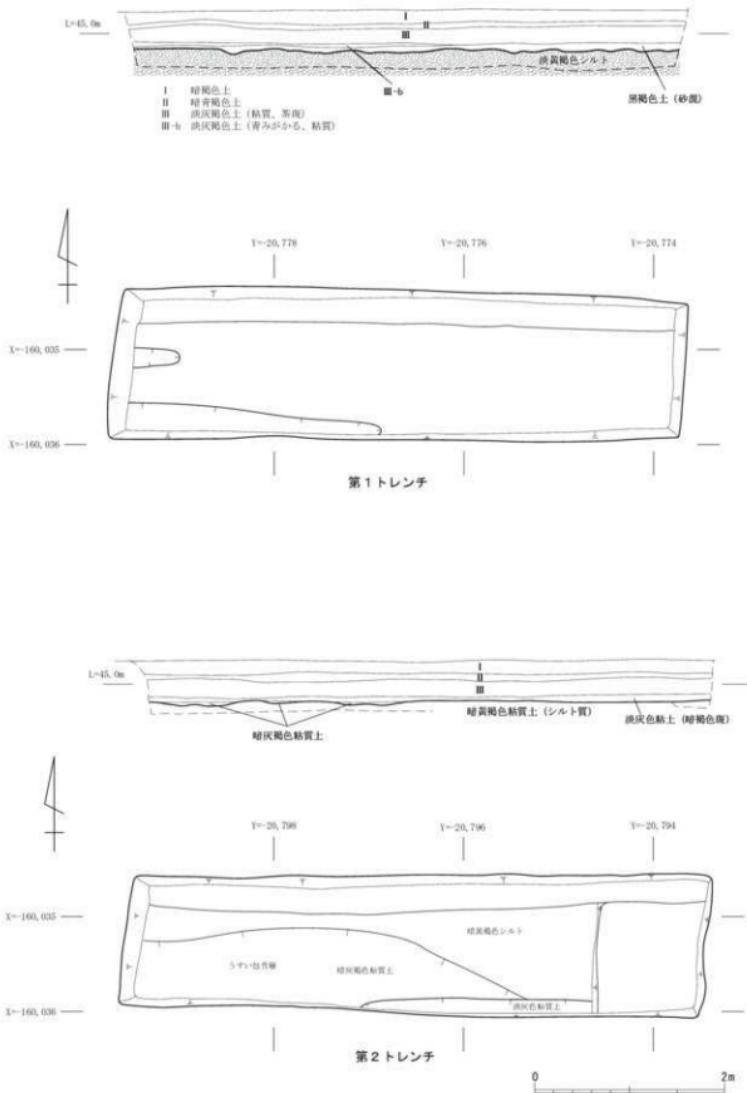
第58図 調査地位置図（上：S = 1/5,000、下：S = 1/1,500）



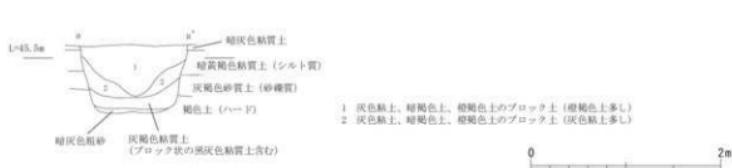
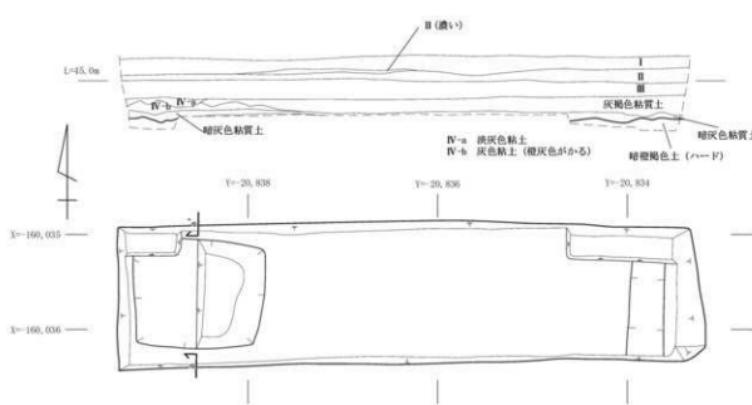
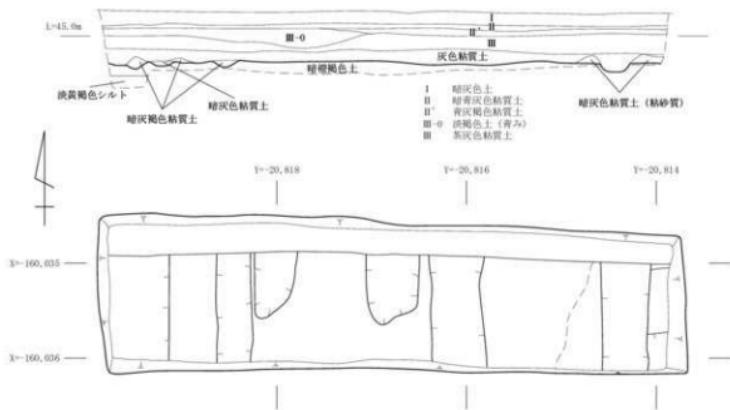
第59図 S-201301試掘調査遺構平面および西壁断面図 (S = 1/100)



第60図 S-201302試験調査遺構平面および北壁断面図 (S = 1/100)



第61図 S-201303試掘調査第1・2トレンチ遺構平面および北壁断面図 (S = 1/50)



第62図 S - 201303 試掘調査第3・4トレンチ遺構平面および北壁断面図 (S = 1/50)

c. S-201303試掘調査

素掘小溝群 S-201303試掘調査では、東側の第1・2トレンチで東西方向、西側の第3・4トレンチで南北方向の小溝群を検出した。遺物は少なく、詳細な時期は不明。

中近世

S K-4051 S-201303試掘調査では、1.4×1.1mの方形の土坑1基を検出した。深さ0.7mを測るが、遺物は土師器細片が出土したのみであり、時期を特定できる資料は得られなかった。中世素掘小溝群を切ることから、中世後期～近世の遺構となる可能性が考えられる。

3.まとめ

十六面・薬王寺の西端で実施した今回の3件の試掘調査では、いずれも顕著な遺構を確認することができなかった。S-201303試掘調査では中世末～近世とみられる方形の土坑1基を確認したが、耕地の中に設けられる耕作関連の遺構である可能性が高く、顕著な遺物は出土していない。

なお、遺跡外となるS-201301試掘調査地の西側隣接地でおこなわれた擁壁工事の立会で、北東～南西方向の小溝2条を検出している。本遺構の存在から、本地周辺は古代以降耕地としての土地利用がなされていたものと考えられる。ただし、本遺跡の中央から東部にかけては古代水田面の残存も確認されているが、今回の試掘調査成果では水田を覆う洪砂は確認できなかった。おそらく中世以降の削平によるものと考えられる。

これらの調査成果を踏まえて、平成26年3月に遺跡の異動届を県に提出し、本調査地周辺を周知の埋蔵文化財包蔵地から除外する手続きをおこなった。



1. S - 201301第1トレンチ全景（南から）



2. S - 201301第2トレンチ全景（南から）



3. S - 201301第3トレンチ全景（南から）



4. S - 201301第4トレンチ全景（南から）



5. S - 201302第1トレンチ全景（南から）



6. S - 201302第2トレンチ全景（南から）



7. S - 201302第3トレンチ全景（西から）



8. S - 201302第4トレンチ全景（西から）



9. S - 201303第1トレンチ全景（東から）



10. S - 201303第2トレンチ全景（東から）



11. S - 201303第3トレンチ全景（東から）

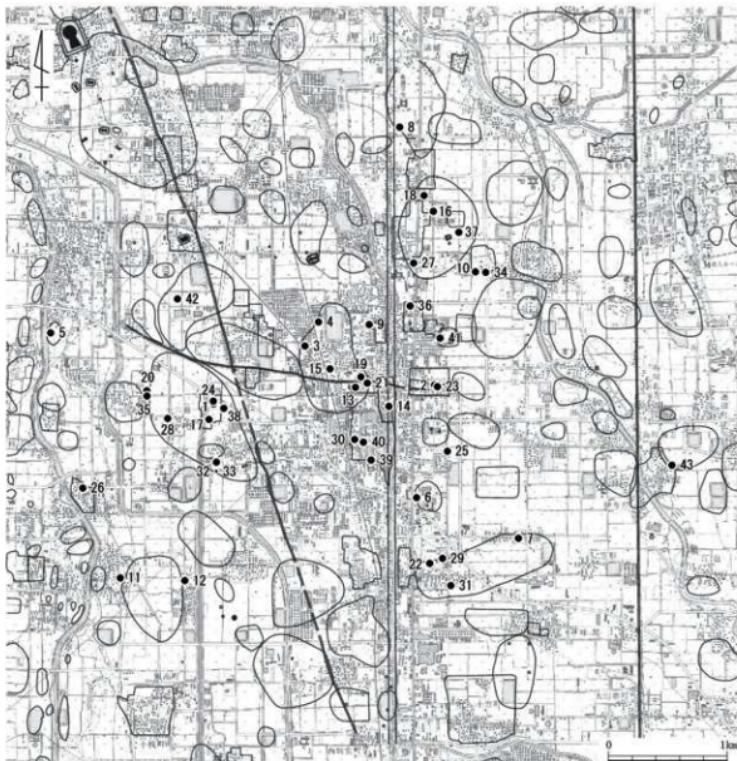


12. S - 201303第4トレンチ全景（東から）

(2) 工事立会の概要

2013年度に実施した工事立会は43件である（第9表）。史跡整備事業に伴う唐古・鍵遺跡の工事立会が2件、公共上下水道工事に伴う工事立会が8件、個人住宅建築に伴う工事立会が17件、その他の民間開発等が16件である。

史跡整備事業に伴う唐古・鍵遺跡の工事立会については、唐古池堤防の築造過程を調査することができたため、後述する。



第63図 田原本町の遺跡と工事立会地点 (S = 1/40,000)

第9表 2013年度 工事立会一覧

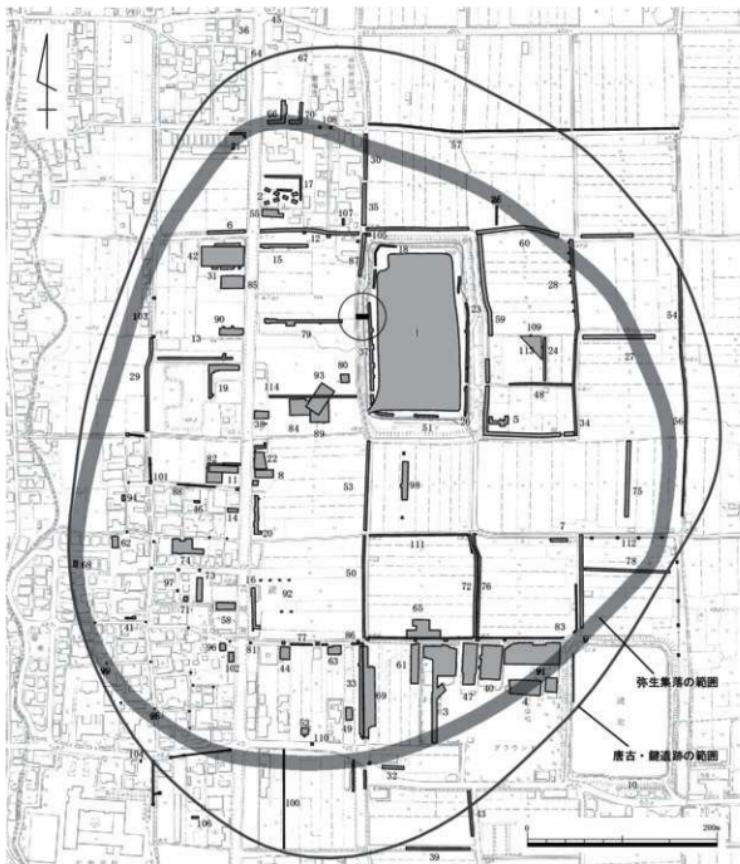
通 路 名	調査地	原 因 者	工事の目的	立会者	調査日	内 容
1 十六面・薬王寺 (R-281301)	田原本町大字保津270番1	個人	賃貸住宅の建築	奥谷	2013. 4. 10	既設掘削の廻去時に立会。-0.5～-0.6m程度で中世包含解。遺構・遺物不明。
2 鳥手北造塗・阪手北 (R-281302)	田原本町大字阪手282番	個人	農業用倉庫の建築	清水	2013. 4. 10	未届け工事を確認したため、土地所有者に声をかけ立会。基礎工事が完了していたため、遺構・遺物は廻削は浅かったと思われる。早な届出が歓迎される旨を伝えた。
3 羽子田 (R-281303)	田原本町大字八尾尾686番1・832番9・832番3 の各一部	個人	個人住宅の建築	奥谷	2013. 4. 10	桜井設置時に立会。-0.95mまでの削削、現代水路から瓦礫堆積1点出土。
4 羽子田 (R-281304)	田原本町大字尾尾430番48 地	個人	個人住宅の建築	奥谷	2013. 4. 15	基礎掘削時に立会。-0.3mまで削削。削削直後に立会。遺構・遺物不明。出土物はさきほどの工事着手であつたため、施設江戸。
5 遺物堆积地 (R-281305)	田原本町大字松木459番33	個人	個人住宅の建築	奥谷	2013. 4. 19	状況改善工事時に立会。削削深度-1.3m程度まで削削。現代成土があり、それ以下も土か。遺構・遺物不明。
6 鳥手 (R-281306)	田原本町大字千代737番1	㈱アライの森	リサイクル古紙 回収場の建設	奥谷	2013. 5. 15	フェンス設置工事時に立会。-0.3～-0.4m程度の削削で、現代成土内におさまる。遺構・遺物なし。
7 平代・新堀寺跡 (R-281307)	田原本町大字平代726番2・ 727番1・727番2の各一部	個人	個人住宅の建築	奥谷	2013. 5. 21	有基礎削削時に立会。造成上0.5m程度で、削削は-0.6mまでと造成土内におさまる。遺壙・遺構・遺物なし。
8 清水窯 (R-281308)	田原本町大字唐古119番1	㈱土田豊園	農業用倉庫の建築	清水	2013. 6. 3	有基礎削削時に立会。造成上0.5m程度で、削削は-0.6mまでと造成土内におさまる。遺壙・遺構・遺物なし。
9 織作社内構築地 (遺跡) (R-281309)	田原本町大字八尾尾582番1	㈱柳谷設計	デイサービス センターの建設	奥谷	2013. 6. 12	南端外であるが、隣接地のため構築基礎の地下工事終了時点で立会。-1.3m程度の削削。遺構・遺物なし。
10 丹波山 (R-281310)	田原本町大字丹波寺 961番1 南側道路	田原本町長 (下水道課)	公共下水道工事	奥谷	2013. 6. 29 + 7. 1	人孔試掘時に立会。2地点ともそれぞれ-0.8mと-0.98m程度で定期的河岸堆積確認。別の1地点で近代成土水路確認。遺構なし。
11 佐味 (R-281311)	田原本町大字佐味256番1 西側道路地	田原本町長 (下水道課)	公共下水道工事	清水	2013. 7. 8	下水道浚渫工事時に立会。-1.5m程度の削削で、現代成土内におさまる。出土物は少く、陶器片・瓦片・漆器等の遺構・遺物なし。
12 佐味遺跡東側接続地 (R-281312)	田原本町大字浜田178番1 東側道路地	田原本町長 (下水道課)	公共下水道工事	清水	2013. 7. 8	人孔試掘時に立会。-1.2～-1.4m程度の削削。一部近世以前の堆積層を確認。遺構・遺物なし。
13 羽子田 羽子田1号塚 (R-281313)	田原本町376番5	個人	個人住宅の建築	奥谷	2013. 7. 9	有基礎削削時に立会。-0.45m程度の削削で、現代造成土内にとどまる。遺構・遺物なし。
14 平野北神屋跡 (R-281314)	田原本町811番2	個人	個人住宅の建築	奥谷	2013. 7. 9	砂化層の削削時に立会。-0.3～-1.3m程度まで近代造成し上。遺構・遺物なし。
15 羽子田 (R-281315)	田原本町大字新町 70番1・70番9 北側道路	穂山農事振	宅地分譲	奥谷	2013. 8. 29 + 8. 31	下水道引込込み管の設置工事時に立会。東側では-0.9mまで中世以前の堆積層で、以下は遺構整理上・底層・古墳は現況水路により見出され、更側で-0.4mの削削で出土・内傾の柱穴を確認。遺物少量。
16 唐古・鶴 (R-281316)	田原本町大字唐古225番1地	田原本町長 (総合政策課)	史跡公園整備に 伴う造作工事	清水 奥谷	2013. 9. 29 2014. 3. 14	耕土の下を取りはり、-0.15m程度の削削で、現況水路の柱穴を確認。柱穴は、中世古墳西側の外縁の外縁で、造作工事時に土から土石を運び出されたもの。堤防の前面を直線とみなす。断面を成す柱穴を造成(削削報告通り)。水路設置工事時に、-0.6m～-0.9mの削削で、柱穴を確認。既設水路より土を取り除いたところに、柱穴を立てる。柱穴を立てる前に把差しき柱穴がほぼ完了した時点で立会となつた。
17 十六面・薬王寺 (保津氏居跡) (R-281317)	田原本町大字十六面 196・197番	個人	個人住宅の建築	奥谷	2013. 9. 12	往復改良工事時に立会。-1.0mまで削削で、現代造成土。その下は削削はできず。遺構・遺物不明。
18 唐古・鶴 (R-281318)	田原本町大字唐古80番5地	㈱中本舗	工場建築に伴う 掘削・施工上工事	清水 奥谷	2013. 9. 18 ~ 11. 8	桜井の撤去および新設に伴う立会。異なる遺構・遺物なし。一部事前踏査と異なる結果があり、生糸代包含層の上面を削削するまで削削をやめになっていたため、施設復元。
19 羽子田 (R-281319)	田原本町大字新町53番1	大和郡山市役所 大和郡山半野農業 水利事務所	農業用 ハイブリット 新設・改修・撤去	清水	2013. 10.	既対応の予定であったが、開削工事に見合わせたため立会。土上まで-0.1～-0.6m程度の削削。
20 十六面・薬王寺 (R-281320)	田原本町大字西竹田 38番1・39番1・40番1	かづらぎ運輸㈱	工場の建築	清水	2013. 10.	桜井基礎工事時に立会。木根本上から-0.45m程度の削削で、古墳の漢文2文字を確認するため、遺物復元。
21 羽子田 (R-281321)	田原本町宇カジヤ組内 256番	㈱きんでん 高岡営業所	基礎杭打の建築	清水	2013. 10. 28	先発施の通路を前面に受けながら、施設の前面で立会。施工上に現地確認。埋め直し後そのため、遺構・遺物不明。

22	千代（勝美寺跡） (R-201322)	田原本町大字千代113番3	個人	賃貸住宅の建築	美谷	2013.11. 5	右基礎削削時に立会。-0.3m程度の掘削で、芥上・臼杵内にとどまる。道橋・道物不明。
23	坂手北環造・坂手北 (R-201323)	田原本町大字坂手280番 南側道路	田原本町長 (下水道課)	水道工事	藤田	2013.11.11	既設水道管の入算工事。既設水道管埋設の削削時に立会。道橋・道物不明。
24	十六面・薬王寺 (R-201324)	田原本町大字保津270番1	個人	集合住宅の建築	清水	2013.11. 12	既設廻壁壁面工事および基礎削削工事時に立会。過去の削削範囲内にとどまる。道橋・道物不明。
25	坂手ホウズミ (R-201325)	田原本町大字坂手877番1 西側道路	田原本町長 (下水道課)	水道工事	清水	2013.11. 16	既存水道管の入算工事。既存水道管上部で削削で、過去の削削範囲内にとどまる。道橋・道物不明。
26	大岡 (R-201326)	田原本町大字大岡 247番・286番2	個人	個人住宅の建築	奥本	2013.11. 20	柱状改良工事時に立会。屋式のため状況不明。道橋・道物不明。
27	唐古・磯 (R-201327)	田原本町大字體125番1	個人	店舗付住宅の建築	清水	2013.11. 29	裏削削時にバッタ基礎のみであったが、着手する際は土木科・道橋科・道物科を実施していたため立会。道橋・道物不明。幼苗の撤出を求める。
28	十六面・薬王寺 (R-201328)	田原本町大字保津309番 北側道路	田原本町長 (建設課)	農業用取水施設の 改修	清水	2013.12. 19	通水管埋設工事時に立会。-1.2m程度の削削。既設以降の水路に切られるやや大きめの掘削。道橋・道物専用。
29	千代（勝美寺跡） (R-201329)	田原本町大字千代 873番13・873番14	個人	個人住宅の建築	清水	2013.12. 24	柱状改良工事時に立会。道橋・道物なし。
30	寺内町 (R-201330)	田原本町558番1他	個人	個人住宅の建築	清水	2013.12. 24	排水管埋設工事時に立会。-0.5m程度の削削。既設以降の水路に切られるやや大きめの掘削。道橋・道物専用。
31	千代（勝美寺跡） (R-201331)	田原本町大字千代 1014番1・1014番3	個人	個人住宅の建築	清水	2013.12. 25	柱状改良後の埋め戻し時に立会。道橋・道物不明。
32	十六面・薬王寺 (R-201332)	田原本町大字薬王寺 377番16・377番15の一部	個人	個人住宅の建築	清水	2013.12. 25	溝地の一部の際、工事を行っていたため立会。基礎工事は完了。削削は各土石などである。
33	十六面・薬王寺 (R-201333)	田原本町大字要寺 377番22	個人	個人住宅の建築	清水	2013.12. 26	柱状改良工事時に立会。屋式のため状況不明。道橋・道物不明。
34	丹青山 (R-201334)	田原本町大字法華寺 963番2 北側道路	田原本町長 (下水道課)	公共下水道工事	清水	2014. 1. 13	既設部分の試削時に立会。近代以前の水路を検査。道物なし。
35	十六面・薬王寺 (R-201335)	田原本町大字西竹田 248番1号 南側道路	田原本町長 (下水道課)	公共下水道工事	清水	2014. 1. 21	既設部分の試削時に立会。道橋・道物なし。
36	小阪里中 (R-201336)	田原本町大字小阪83番4	個人	個人住宅の建築	清水	2014. 1. 23	柱状改良工事時に立会。屋式のため状況不明。道橋・道物不明。
37	唐古・磯 (R-201337)	田原本町大字體22番1	田原本町長 (総合政策課)	既存名所の整芸 および改修	清水	2014. 1. 24	平成23年1月移設既水路の再設置工事。 0.3~0.5m程度の削削で、前回の削削深度内にとどまる。道橋・道物なし。
38	十六面・薬王寺 (R-201338)	田原本町大字十六面 156番1 北側水路	田原本町長 (下水道課)	公共下水道工事	清水	2014. 2. 3	人孔頭削削時に立会。-1.6m程度の削削。 道橋・道物なし。
39	寺内町 (R-201339)	田原本町55番9	個人	個人住宅の建築	清水	2014. 2. 21	柱状改良工事時に立会。屋式のため状況不明。道橋・道物不明。
40	寺内町 (R-201340)	田原本町54番9	津島神社	神社本殿の基礎 改修	清水	2014. 2. 23	冠へ右名器工事時に立会。本殿脚からみて-0.8mの削削で、全体が近世～近代の造成層。本殿基礎の整芸過程を確認。柱貫道物が見受けられる。
41	小阪繩糸 (R-201341)	田原本町大字小阪319番7	個人	個人住宅の建築	清水	2014. 2. 24	柱状改良工事時に立会。屋式のため状況不明。道橋・道物不明。
42	宮古北 (R-201342)	田原本町大字宮古 124番1他	市民生活協同組合 ならヨーピー	倉庫兼事務所の 建築	清水	2014. 2. 24	調整池の削削時に立会。-0.6~0.8mの削削。既設土木～古墳初期の上層が僅かに出土。事前の届出より深め削削であつたが、柱貫道物については宮古北道跡第17次調査として対応。
43	為川両方 (R-201343)	田原本町大字纏葉3番	個人	個人住宅の建築	清水	2014. 2. 25	沿成工事および排水工事時に立会。 -0.3~0.1m程度の削削。河底か？道物なし。

1. 唐古・鍵遺跡 工事立会（R-201316）

1.はじめに

唐古・鍵遺跡の史跡整備事業に伴う唐古池吐水口の改修工事が実施され、工事時に立会をおこなった。この工事は、近世の築堤であることが判明している唐古池堤防を掘削するもので、弥生時代の造構面には及ばない形で設計されている。ただし、近世の唐古池堤防の断面を観察できる絶好の機会であったため、工事立会時に層序観察・図化をおこなった。



第64図 工事立会位置図 (S = 1/5,000)

2. 工事立会の成果

唐古池の堤防は、周囲の水田より2.5m以上の高さをもつ。今回、西側堤防の上面から深さ2mまでを断ち割る形で工事がおこなわれた。既存吐水口を除却した上での工事であり、また堤防の池側となる東端は過去の護岸工事による影響を受けていたため、観察できたのは堤防の西側2/3程度である。

堤防の築堤は大きく3段階に分けて考えることができる。当初の堤防（11～18層）は現状より約1m低かったとみられる。この段階の築堤方法は、東端の18層を芯として斜位の盛土を西側に向けて繰り返したとみられ、版築のような築堤方法はとっていなかったようである。基本的には弥生時代包含層となる黒色土・黒褐色土と黄褐色土・暗褐色土が交互に盛られ（13～18層）、最後に上面を整地する形で11・12層を盛ったとみられる。この築堤がいつの段階の工事であるかは遺物から判断することができないが、後述するように18世紀初頭となる可能性が考えられる。

この堤防は、おそらく近世後期に嵩上げされたとみられる（4～10層）。堤防幅を約2m西側に拡げ、高さを0.5m程度高くしている。西側への拡幅部分の10層は砂を多く含む淡褐色土で、やや軟質である。その上に黒褐色土層（7層）を含む4～9層を盛ったと考えられる。時期決定の根拠となる遺物は出土していないが、唐古池拡幅工事に伴う嵩上げであった可能性もある。

現状の唐古池は、黄褐色砂礫土とクラッシャーで0.5mの嵩上げがされた状態である。池からの土取り工事や第37次調査後の護岸工事などに際して整地を兼ねて土が盛られたと考えられる。

3.まとめ

今回の工事では、唐古池の築堤過程を解明することができた。古代の築堤技術では版築工法や敷葉工法などがおこなわれることが多いが、近世の築堤ではこのような工法をとっていないことが判明した。また、調査地点の堤防については大きく分けて3段階の築造過程を経ていることが判明した。

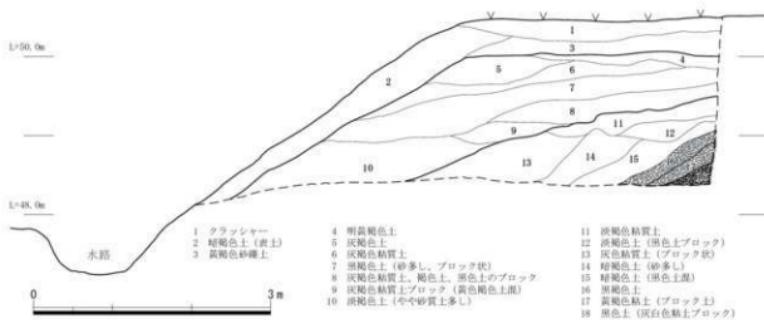
唐古池堤防については、東側堤防の護岸工事に伴う調査（第23次調査）により近世に入ってからの築堤であること、当初は南半の1町池だったものが2段階の拡張を経て現況の2町池となったことが解明されている。そして、史料の検討結果から、当初の1町池が17世紀代に築造され、元禄16年（1703）に第1次拡張が、18世紀後半～19世紀初頭に第2次の拡張がおこなわれたことが結論づけられた。

今回工事立会をおこなったのは、西側堤防の北端から75m程度の位置であり、第1次拡張の部分に相当する。このことから、立会調査で確認した当初の築堤は元禄16年のもの、1回目の嵩上げが江戸時代後期のもの、2回目の嵩上げが近代～現代のものと考えることができよう。

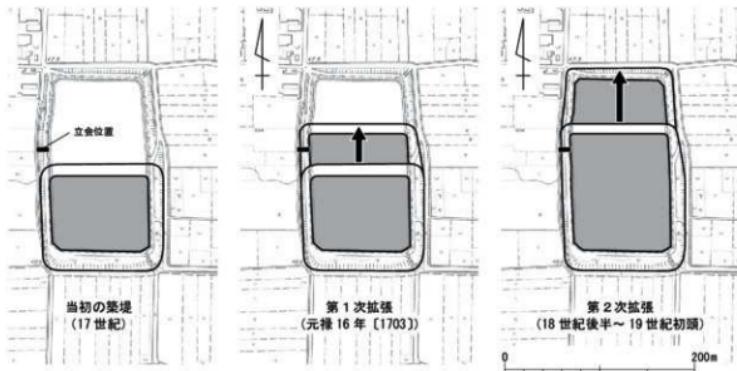
参考文献

田原本町教育委員会 1988「第23次調査の概要」「田原本町埋蔵文化財調査概要6—唐古・鍵遺跡第21・23次発掘調査概報一」

町史編さん室 1984「唐古池の築造年代を追って」「田原本の歴史 第三号」田原本町



第65図 堤防断面図 (S = 1/60)



第66図 唐古池拡張変遷想定図 (S = 1/5,000)



1. 工区全景 (南西から)



2. 堤防断面北壁層序 (南から)